アーマード・コア

〜マスターオブアリーナ〜

篠崎砂美

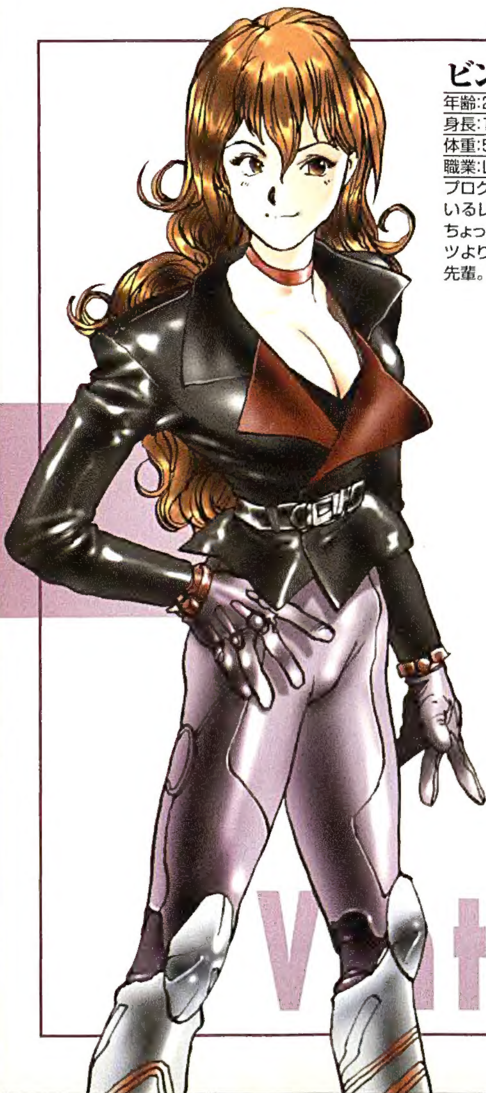


ファミ通文庫

アーマード・コア
~マスターオブアリーナ~

ARMORED CORE

MASTER OF ARENA



ビンテージ

年齢:20歳
身長:165cm
体重:55kg
職業:レイヴン
プログテック社と専属契約を結んでいるレイヴン。陽気で人なつこく、ちょっぴり小悪魔的でもある。フリッツより年下だが、レイヴンとしては先輩。搭乗ACはオレンジ・ペコ。







フリッツ=バーン

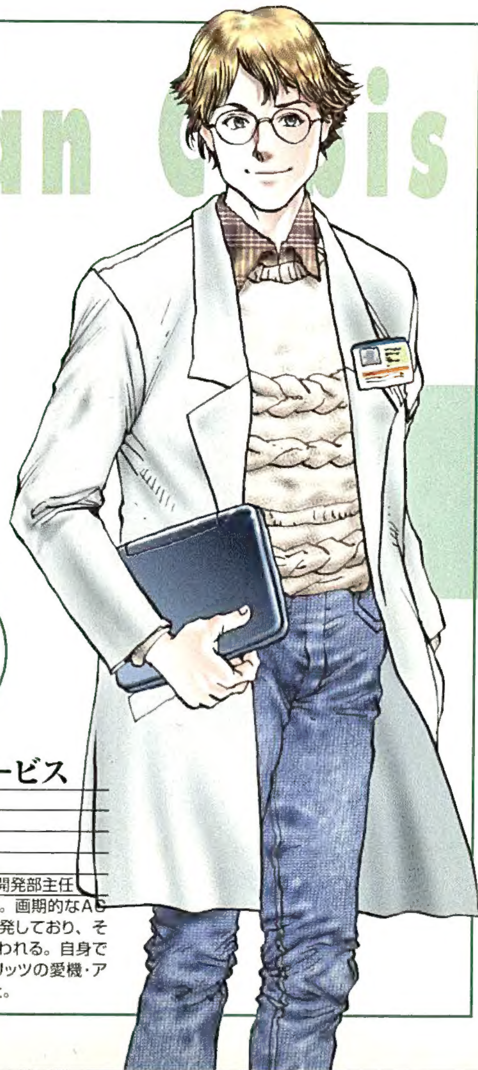
性別:男
年齢:24歳
身長:183cm
体重:72kg
職業:レイヴン
テロ鎮圧時の戦闘に巻き込まれて両親を失う。以後、そのときの"赤いカラーリングのAC"を仇として追い求めている。搭乗ACは、初めはアベンジャー。後にアナイアレイター。

アーマード・コア

～マスターオブアリーナ～

篠崎砂美

FB
ファミ通文庫





エラン=キュービス

性別:男
年齢:26歳
身長:185cm
体重:67kg
職業:プログテック社研究開発部主任

天才とも称される技術者。画期的なAC用新パーツをいくつも開発しており、そのため謎の組織に命を狙われる。自身ではACに搭乗しない。フリッツの愛機・アナイアレイターを構成した。

イラスト　松田大秀

目次

プロローグ　『ナイトメア』　7
ENCOUNTER 1　『ミッション』　13
ENCOUNTER 2　『アリーナ』　45
ENCOUNTER 3　『ナインボール』　115
ENCOUNTER 4　『マスター』　173
エピローグ　『アナイアレイター』　215

Wanna be a Laven?

プロローグ

『ナイトメア』

爆発が起こる。
炎とともに、白煙と黒煙が混ざり合いながら地下の閉鎖空間に広がっていった。
次の瞬間、立ちこめる煙の中から数機のマッスル・トレーサー（MT）が猛スピードで飛び出してくる。高機動の小型MT（エムティ）、ワスプだ。煙の尾を引いてビルの間を散開していく様は、まるでアクロバット飛行のデモンストレーションのようだが、現実には見せ物が行われているわけではない。今行われているものは戦闘なのだ。
右腕のマシンガンを煙の中に狂ったように撃ち込むワスプの一群にむかって、青白いレーザービームの返礼があびせかけられた。短いパルスの輝きが、煙に乱反射してレーザーの軌跡を人の目にも見えるように宙に浮かび上がらせる。つかの間美しいとも思わせる輝きは、飛び回るMTたちを的確に捉え、燃え上がらせては地面に叩きつけた。
煙の中から何かが飛び出してくる。
まとわりつく白煙が振り払われ、赤と黒に塗られたアーマード・コア（AC）の姿が現れた。
通りの中央まで進むと、急制動をかけてくるりと反転（ターン）する。
通りに分散して隠れていたスティンクバグが、ここぞとばかりに赤いAC（エイシイ）に銃撃を集中する。だが、将棋の駒のような平たい機体に二本の脚部をつけただけの簡易戦闘マシンでは、しょせんACの敵ではない。簡単に攻撃を回避され、逆にパルスレーザーガン（WGXP2000）

によって撃破されていった。

スティンクバグの放った銃弾は、空しく対面のビルの壁を刻むだけであった。

だが、ビルの中にいる人間はたまったものではない。昼下がりの居住区に、逃げまどう人々の悲鳴が響き渡った。

事の始まりは、テログループが、アイザック・シティ最大手の企業であるクローム社を襲撃したことだった。機密書類を多数強奪したテログループは、企業に雇われたMTやACに追われて逃亡した。そのグループが、この居住区に逃げ込んできたのだ。逃亡するMT群と追撃するACは、周囲の被害を考えることなく激しい戦闘を開始した。

「これで口と鼻を押さえなさい」

ハンカチを差し出しながら、母親が言った。フリッツは言われた通りにした。火災も発生しているらしく、報知器の音が銃声に負けじと鳴り響いている。

「地下のシェルターに逃げ込めば、何とかなる。頑張って急ぐんだ」

父親が、妻と息子を励ました。主要ビルの最下層には、階層ごとの孤立に対する備えとして、避難用シェルターや他階層への脱出路が用意されている。地下階層都市ならではの設備だが、辿り着けなくてはそれも用を成さない。

アパートの上層階に住んでいたことが災いし、フリッツの一家は止まってしまったエレベータをあきらめて、崩れかけた階段を必死に駆け下りていた。煙や炎を避けながら、何とか一階にまで辿り着く。後はこの通路を抜けて、避難用階段を下りるだけだ。フリッツの一家は、生きるために走った。

そのころ、赤いACは隊列を組んだスティンクバグとスカーリーバーに集中攻撃を受けていた。レーダーヘッドを持ち索敵能力に長けたMTスカーリーバーの誘導で、攻撃は正確性を増している。たかが機銃でも、集中されればやっかいでもあり苛立たしいものだ。ACは肩のグレネードランチャー（WC-GN230）を構えると、メインストリートの交差点の中央にあった時計台を躊躇なく破壊した。爆発とともに基部を失った時計台が、ならんだMT群の上に倒れていく。逃げる暇もあらばこそ、機動性に劣るスティンクバグの大半がその下敷きとなって押し潰された。

だが、破壊はそれにとどまらなかった。時計台の先端は、倒れた先にあったビルの壁面を抉（えぐ）るようにして突き刺さっていったのだ。その裂け目を縫うようにして上昇するスカーリーバーにむかって、赤いACは肩のミサイル（WM-S40/2）を放った。直撃を受けたスカーリーバーが、炎上しながらビルの裂け目に墜落する。

「危ない!!」

みるみる亀裂が入る天井を見て、反射的に父親がフリッツを突き飛ばした。目前の階段に、フリッツの身体が転がり落ちる。直後に天井が崩れ、瓦礫と炎が降り注いできた。一瞬にして、一階が押し潰されるようにして瓦礫に埋め尽くされる。

「父さん！　母さん!!」

長い階段の途中に何とか身体を引っかけて止めると、フリッツは慌てて立ち上がった。

打ち身の痛さよりも、目の前の光景の方が彼を打ちのめした。見上げた階段の入り口は、瓦礫でなかばふさがれてしまっていた。フリッツはしゃにむに瓦礫を押しのけた。瓦礫が脆くも階下へと崩れて、身体が通るだけの穴が開く。登ってみると、通路は天井と左側の壁がほぼなくなっていた。崩れた瓦礫が彼の背よりも高く積み上がっている。

その山の下に、彼の両親がいるはずだ。

フリッツは両親を呼び叫びながら、瓦礫を掘り始めた。そのとき、どすんという地響きとともに、何か巨大な物が近づいてきた。見上げたフリッツの視線の先、崩れた壁のむこうに赤い巨人が立っていた。肩口に描かれた⑨のエンブレムが、目に飛び込んでくる。ＡＣの頭部がゆっくりと回り、センサーアイがフリッツの姿を捉えた。ＡＣに見下ろされるというとてつもない威圧感に、フリッツは心と体が押し潰されてしまうような気分を味わって動けなくなった。永遠とも思われた一瞬の後、赤いＡＣは関心がないと言いたげに踵を返した。

「待って、この下に父さんと母さんがいるんだ、助けて……!!」

呪縛から解き放たれたフリッツは、赤いＡＣに懇願した。そのＡＣが元凶だとはわかっている。わかってはいるが、今すがれるものはそのＡＣしかなかった。だが、最後まで言えないうちにブースターが咆哮し、赤いＡＣはフリッツを無視してその場を去った。

「お前がやったんじゃないか、お前が。僕は忘れないぞ、忘れるものか!!」

フリッツの絶叫は、なおも続く銃声に呑み込まれていった……。

ENCOUNTER 1 『ミッション』

1

忘れていたわけではなかった。だが、思い出せばそれは悪夢であることに変わりはない。

「初日の夢がこれか……」

ベッドの上で上半身を起こすと、フリッツは乾いた笑いを頬にはりつけた。

忘れるなと、心の中で昔の自分が叫んでいる。

忘れていたわけではない。それに、自分自身が忘れさせてはくれないではないか。

フリッツはベッドから抜け出すと、洗面所へとむかった。鏡の中には、胸板の厚い青年が立っている。そう、もうあの頃の無力な少年はどこにもいない。ここにいるのは、レイヴンとなったフリッツ＝バーンなのだ。

身支度を整えたフリッツは、ＡＣの保管や整備を請け負っているガレージへとむかった。そこで彼のＡＣの受け渡しが行われる。

レイヴンとしての彼の分身、彼だけのアーマード・コア（Ａ Ｃ）が今日誕生するのだ。

「ああ。マネージャーから連絡は受けている」

格納台（ハンガー）に固定されたＡＣたちをバックに、ガレージの責任者は無愛想な面もちでフリッツを迎えた。

「マネージャーか……」
　まだ慣れない感覚に少し戸惑いながら、フリッツは彼女、ラナ＝ニールセンとの出会いを思い返した。

2

　アーマード・コアと呼ばれる大型ロボットを操縦する者たちは、レイヴンと呼ばれていた。絶大な戦闘力を持つ、特殊な傭兵たちである。
　この時代、すべての情報はナーブと呼ばれる巨大なネットワーク上にあった。だが、ナーブの一般回線では、彼らの情報はほとんど公開されていなかった。ほとんどのレイヴンが、性別すら確認できないという有様だ。たまにあったとしても、それは興味本位の単なる憶測であったり、ACの名称と自称のパイロットネームだけであった。
　唯一、レイヴンズ＝ネストと呼ばれるクローズドシステムだけが、レイヴン間の相互情報交換の場として機能していた。だが、それを利用できるのはレイヴンズ＝ネストに登録されたレイヴンだけであり、その他の者は依頼を発信するという一方通行の関わりしか持てなかった。それすら企業などの経済基盤を持った者たちだけの特権であり、孤児となった一介の少年とは交差しない世界というのが紛れもない現実であった。
　レイヴンのことを知りたい、レイヴンに会って話がしたい。あの赤いACのパイロッ

トが誰なのか、両親の仇が誰であるのか……。
　だが、レイヴン本人に会うことなど結局できはしなかった。それどころか、話をすることすらままならない。フリッツの願いは、笑い話にされこそすれ、誰も取り合ってくれるものではなかったのだ。
　自分の無力さを噛みしめたフリッツは、いつしかレイヴンすべてへの憎しみを芽生えさせていった。
　そして……。
　レイヴンに会いたい。その言葉は、いつしかレイヴンになりたいという言葉に変化していった。レイヴンに対抗しうる力を持つ者は、唯一レイヴンだけだ。毒をもって毒を制する。フリッツはもう他人をあてにはしなかった。自分自身の手ですべてのケリをつけてやることを決心したのだ。
　だが、決心だけではレイヴンになることはできない。当時の彼には、ACを手に入れることすら夢のまた夢であった。彼にできることは、シミュレータでMTの操縦を覚え、ネットで援助者を探すことだけだ。
　やがて、レイヴンになりたいというフリッツは、ネットの一部でちょっとした有名人になった。それは、彼が待ち続けていた援助者の目に留まるには十分であった。
『レイヴンになりたいそうだな』
　彼をネットワーク上の文字会話（チャット）システムに呼び出したその女性、ラナ＝ニールセンは、

挨拶も交わさずにそうフリッツに切り出した。モニタの上に、感情を持たない文字（キャラクタ）が淡々と単語（ワード）を形作り文章（センテンス）を綴る。

『なぜレイヴンになりたい』

簡潔かつ威圧的にラナは言葉を続けた。

『殺したい相手がいる。だからレイヴンになりたい』

フリッツはあけすけに答えた。いまさら飾りたててどうなるものでもない。

『あからさまだな。だが、そういうぎらついた感情はレイヴンにとって必要なものだ。なぜ殺したいのだ』

『殺された家族の復讐だ。あんたは、赤い二足歩行タイプのACを知らないか？　肩に9という数字をあしらったエンブレムをつけている』

フリッツの感情とは裏腹に、モニタには音もなく言葉がならんでいく。

『赤いカラーリングのACなど、この世界には掃いて捨てるほどいる。有名なところでは、ワイルドキャット、オールパワー、Σ（シグマ）、パラダイスロスト、ペールノエル、ファッケル、ビックマイスター、NS－24……』

思いつくままにだろう、ラナがいくつものACの名前をあげていく。だが、名前だけでは単なる記号にすぎず、今までと同じように仇を確定できるほどの情報にはならない。

『レイヴンとしての適性がお前にあるのならば、そのうち出会うこともあるだろう。そのうちな……』。復讐であれ何であれ、闘志を持つ者は悪くはない素材だ。——いいだろう、私はそういった者をレイヴンにするための援助を行っている。お前がそうだと言うのなら、マネージャーとしてレイヴンになるための支援をしてやろう』

『ずいぶんとあっさりしたものだな』

多少懐疑的にフリッツは訊ねた。本当は諸手（もろて）をあげて喜びたいところだが、それがぬか喜びでは困る。

『心配しなくても、私にもメリットはある。お前たちのような者をレイヴンに育て上げてミッションを斡旋すれば手数料が入るという仕組みだ。ACの資金を与えて、こちらが選別した依頼をこなしてもらい、一定の歩合をもらう。まあ、投機の一種と考えてもらえばいい』

それが自分の仕事であり、レイヴンの候補生とは完全なビジネスの上での関係なのだとラナが説いた。レイヴンの養成学校があるわけではない以上、こういった商売も十分に成り立つのだろう。

『簡単な話、子飼いにしてやるから命令を聞けと言うわけだな』

少し皮肉っぽくフリッツは言った。

『そういうことだ。悪い条件ではあるまい。それとも、拒絶するか？』

『いいや。ぜひお願いしたい』

『いいだろう、契約成立だ。条件は、こちらの選別した依頼だけを受諾することと、指示には絶対に従うことだ』

『了解した』

フリッツは一言でそれを承諾した。現在の彼には、それを拒絶する力はない。とにかくレイヴンになること。それがあの赤いACに近づくための第一歩なのだ。細かいことは後になって考えればいい。

『よろしい。この世界は信頼第一だ、約束は守れよ。別途レイヴンズ＝ネストのネットワークIDとACを引き渡すガレージの位置、それと当座の資金を送る。次のコンタクトは、ガレージでしょう。以上だ』

そう言って、ラナはチャットシステムから姿を消した。

3

「ラナ＝ニールセンは……、マネージャーはここにはきていないのか？」

ガレージの管理者でもある技術屋（メカニック）の主任（チーフ）に、フリッツは訊ねた。

「必要があるのか？　マネージャーなんて、金と仕事を管理してくれる存在、それで十分だろうが」

「違いないな」

いまさらへたな質問をしたものだと、フリッツは自嘲した。

「奥にならんでいるのが、基本機体と呼ばれる安価なACだ。もし手持ちの資金で構成

を変えたいのなら、そこのシミュレータで確認した上でオーダーを出してくれ」

「ああ、そうさせてもらうつもりだ」

フリッツは教えてもらったアセンブリング・シミュレータに近づくと、そこに表示されている機体を変更し始めた。基本機体をベースとして、各パーツをより高性能の物に換えていく。もっとも、物理的に脚部や胴体コアが支えきれない物は搭載できないし、資金を超える高価な部品も今は使えない。

とりあえず、脚部をより積載能力と耐久度（AP）の高い二脚型LN―1001に換装する。機動性に直接関わる推進器（ブースター）はB―VR―33、動力炉（ジェネレーター）もGRD―RX7と、より高出力の物に変更。火器管制システム（FCS）は、より扱いやすいQX―21に。レーダーはより軽量なRXA―99。ミサイルポッドは弾薬数の多いWM―S60／4。メインとなる銃火器は敵を捉えやすいWG―HG512ハンドガンに変更する。資金上、胴体（XCA―00）・頭部（HD―GRY―NX）・腕部（AN―201）・ブレード（LS―2001）の変更は今は見送りだ。これだけでも、すでに手持ちの金はほとんど使い尽くしてしまっている。

一応の機体を決めたフリッツは、データをすぐそばのバトル・シミュレータに転送した。アミューズメント・センターにあるような可動式筐体（きょうたい）に手早く乗り込む。

実際の物と同様のコンソール配置がされたコックピットに、次々と各種機器のインジケータが点灯していく。前面のメインモニタが画像を映し出した。戦闘時に必要な情報のほとんどはこの画面に集約されている。

仮想敵機としてのシュトルヒが二機、ドーム状の闘技場(アリーナ)に現れた。逆関節の脚部を持ち、素早く動き回る全自動タイプのロボットだ。とはいえ、高度な状況分析をできるほどの人工知能(AI)は未だ開発されていないため、動きは行動パターンの簡単な組み合わせでしかない。性能チェックには手頃な相手と言える。

スタートの合図とともに、フリッツはブースター・ダッシュで前方に飛び出した。一方のシュトルヒに狙いを定め、一気に近距離武装であるハンドガンの有効射程にまで接近する。

連装ビーム砲の射界を避け、敵機体をなめるような旋回移動を行いながら間断なく弾丸を叩き込む。着弾のたびに反動でシュトルヒの機体が大きくゆれ、じきに炎を噴き出した。

一機目を仕留めた感動に浸る暇もなく、上方からビームの雨が降り注いだ。多少被弾したが、すぐに上昇しながら反転する。入れ替わるようにして、滞空限界に達したシュトルヒが着地する姿がモニタに映った。回避直後に切り替えたミサイルが敵にロックオンする。即座に空中でミサイルを発射して、自分の着地の時間的余裕を稼ぐ。着地のショックをブースターで相殺すると、フリッツはシュトルヒにむかってダッシュした。ハンドガンで敵の動きを止めながら、肉薄して一気にブレードを振るう。左腕部から放出されたプラズマガスの剣によって脚部を一刀両断にされたシュトルヒが、崩れ落ちるようにして炎上した。

「いい感じだ」

感触をつかんだフリッツは、満足げにシミュレータを後にした。

最後にカラーリングとエンブレムを決定してメカニックたちにデータを回す。機体カラーは光沢のあるエメラルドグリーンを基調とした美しいものだ。レイヴンとして名を売るには、悪くないシンボルカラーだろう。エンブレムは、タロットカードの死神にしてある。いつか、あの赤いACは、自分という死のカードを引くことになるのだ。

ガレージの一角で実際の機体が組み上がるのを待っていると、メカニックの一人が移動体通信の端末を持ってきた。

『まずはおめでとう。念願のレイヴンになった気持ちはどうだ』

声の主はラナであった。初めて聞く、マネージャーの肉声だ。

「悪くない気分だ」

リップサービスも込めて、フリッツは答えてみせた。

『そうか。ところで、さっそく仕事を一つ用意した。出られるか?』

唐突にラナが切り出した。ACを与えた瞬間から、すぐに実戦にかり出すつもりのようだ。

「大丈夫だ。じきに機体も組み上がる」

望むところだとフリッツは答えた。予想していなかったわけではない。まずは値踏みが始まったというところか。

『返事だけは上出来だ。機体名はもう決めたのか？』
「ああ。アベンジャーにするつもりだ」
――復讐者(アベンジャー)。
今のフリッツには、他の名称は思い浮かばなかった。
『これはまた直接的だな。まあいい。詳細を伝える。逃走中の犯罪者を捕獲してほしいという依頼があった。逃走犯は、企業へのハッキング常習者だ。追跡していたガードの装甲車(ジード)を強奪し、アイザック・シティの第七植物プラント内に立てこもっているらしい。現在、施設内の保安システムはすべて奴の手の内にある。警備用のセキュリティメカはすべて敵というわけだ。――目的は逃走犯の身柄の確保。やむを得ない場合、ターゲットの生死は問わない。さほど難しい仕事ではないが、実戦に不慮の事態はつきものだ。慎重に行動しろ。じきに迎えのACキャリアが到着する。それに乗り込め。以上だ』
必要なことを伝え終わると、ラナはいつものように一方的に回線を切った。相変わらずのマイペースだ。
「出撃したい。後どのくらい時間がかかる？」
端末をメカニックに返しながら、フリッツは訊ねた。
「まったく、レイヴンって奴は、どいつもせっかちでいけない。後五分待ちな」
チーフが聞きとめて、コンソールから顔をあげた。顔と声はフリッツにむけられても、その手は休まない。やがて、完成したアベンジャーをホールドしたハンガーが、AC搬

出用通路の前までスライド移動してきた。
「あまり壊すなよ。修理が手間だからな。もっとも、俺たちに修理代を儲けさせてくれようって言うのなら話は別だが」
ニヤリと笑いながら、チーフがACの起動キーを投げてよこす。こうやって、この男は何人の新人レイヴンを送り出してきたのだろうか。いや、新人とは限らない。そして、何人の帰還を迎えることができたのであろうか。
「そいつは、戻ってきたときに自分の目で確かめてくれ」
フリッツは受け取ったキーを握りしめると、これから自分の分身となるACにむかって走り出した。

4

『そちらの様子はすべてモニタしている』
植物プラントに突入したフリッツに、ラナは専用チャンネルを通じて指示を出してきた。
「紐つきか」
あまり嬉しくなさそうにフリッツは答えた。監視用のメカが他に存在しているのか、あるいはこの機体にしかけがしてあるのかだ。

『そうくさるな。新人の通過儀礼のようなものだ。それに、こちらにも都合があるのでな。施設のデータは用意しておいた。何かあり次第連絡する。以上だ』

　ラナの声が途切れると、フリッツはマップシステムを起動させてみた。現在の機体に搭載されているコンピュータでは、本来は通過してきたエリアのメモリー機能しかないはずだが、モニタには施設全体のマップが表示されている。

「一応は至れり尽くせりというわけだ」

　今は自分を納得させると、フリッツは隔壁（ゲート）を開けてプラント内の通路に進んだ。たいして進まないうちに、レーダーに敵影が現れる。ハンドガンを構えて待ちかまえると、フリッツは通路の奥からこちらにむかってくるセキュリティメカを狙撃した。スパーテルという動輪三脚型の警備用小型ＭＴだ。ＡＣの膝にも届かない大きさで武装は機関銃のみという、単機ではＡＣにとって玩具のような相手だ。

　あっけなく敵を撃破すると、フリッツはブースターダッシュによる高速移動で、床をすべるようにして先を急いだ。

　大破壊と呼ばれる最終戦争以降、国家に代わって世界の指導権を握った企業によって造られた地下都市は、人の生活圏であると同時にＡＣの活動圏として設計されていた。ある意味では、本来土木作業用重機であったＭＴによって建造された設備であるのだから当然であるとは言える。とはいえ、小型のＭＴが多数存在する現代に、主要施設がすべて大型のＡＣの規格に合わせたものとなっているというのは少々やり過ぎのような気

もする。それが大破壊以前からの慣習であるのか、開発を行った企業の方針であるのかは、いまさら確かめても意味のないことだが。ともあれ、誰の意向であったにしろ、ＡＣに合わせた建造物はレイヴンたちにとってはありがたい物だった。

　途中の窓から見える植物プラントを横目で眺めながら、フリッツは最深部目指して進んでいった。地上から取り入れた自然光と人工光をミックスして植物に最適に調整された光が、完璧な温度管理をされたプラント内を淡く照らしている。プラント内部に入れるものは、作業用の小型ロボットだけだ。地下都市内の人間の生活を支えているにしては、非人間的な閑散とした場所である。

　散発的なスパーテルの攻撃で多少被弾はしたものの、フリッツは順調に進撃を続けていった。物資貯蔵用のドームをいくつも通り過ぎる。そろそろ本命と遭遇すると思われたとき、彼の行く手はゲートの分厚い扉によって阻まれてしまった。今までのものと違って、対物センサーで自動開閉してくれる様子はない。ＡＣ用開閉装置もロックされていて作動しないようだ。かといって、現在の武装で扉を破壊することは難しい。

『どこかにゲート制御装置があるはずだ。許可は取ってある、見つけだして破壊しろ』

　訪ねる前に、ラナから指示が入った。

「了解」

　いちいちうるさいとばかりに、フリッツはぶっきらぼうに答えた。同時に、本当に監視されているのだという実感が襲ってくる。おそらくは、この機体のセンサー類と連動

させて、逐一こちらの行動を見ているのだろう。

フリッツはマップを参照すると、目星をつけたドームにむかった。

スパーテルが集中しているそのドームには、予想通りゲートの管理用サーバーが設置されていた。敵を掃討した後に、管理装置を破壊する。予想通りゲートロックが解除され、個々のゲートは緊急時プログラムによって独立管理に移行した。今ならば、ゲートはAC用の開閉スイッチで開くはずだ。

急ぎ戻ると、フリッツはゲートを開けて先へと進んだ。執拗にスパーテルが最後の抵抗を試みてくるが、すでに完全な悪あがきだ。ACの侵攻を、止めることなどできはしない。

フリッツは施設最深部のゲートを開いた。ドーム内には、一台の装甲車（ジード）が停まっていた。

『やれやれ、レイヴン相手じゃ分が悪すぎるか。降参だな。ゲームは俺の負けだ』

装甲車の外部スピーカーから、若い男のふざけた言葉が流れてくる。それは、人気（ひとけ）のないドーム内に軽々しく響き渡った。

それにしても、ふざけた男だ。この騒動をゲームだとぬかしている。

「ターゲットを捕捉。ホールドした」

どうせ聞こえているのだろうと、フリッツはコックピットの中で声高に言った。

『確認した。どう対処するつもりだ』

予想通り、ラナから回答が入る。

「抵抗の意志がない者まで殺す必要はないだろう。拘束後、シティガードに引き渡す」

フリッツはそう答えた。甘いかもしれないが、弾薬だってただではない。人間の命も同じことだ。使うだけ、奪うだけが賢いとは限らないはずだ。

『そうか。わかった。手配をしよう』

フリッツの言葉に、ラナが同意した。これで、依頼は九〇パーセント完了といったところだ。

「装甲車（ジード）を降りてこちらの指示に従え」

外部スピーカーのスイッチをオンにすると、フリッツはハッカーに呼びかけた。

『わかった。今出ていくから撃たないでくれよ』

即座にハッカーが返事をする。悪びれた様子は微塵もない。

「まったく馬鹿なことをしたものだ。生死を問わず、排除対象にされるとはな」

ハンドガンの銃口を下げると、フリッツは同情するように言った。もちろん、悟られないようにミサイルはロックオンさせている。

『ほう、ケミカルダインの極秘データはそれだけの価値があったというわけだ。解読（デコード）する時間が持てなかったのが残念……何だ、別のACが接近してくる？』

フリッツの言葉から自分がハッキングしたデータの値踏みを始めたハッカーが、ふいに戸惑いを見せた。その言葉を裏づけるようにドームのゲートが開いていった。死角に



なって見えないが、扉のむこうに別のACがいるらしい。
『複数のレイヴンを派遣されるとは、俺も有名になった……ナインボールだと!? アリーナのトップランカーがなぜ……!!』
ハッカーの言葉が終わらないうちに、彼の乗る装甲車が爆炎につつまれて四散した。
「投降していた者をどうして……」
突然の展開に驚いたフリッツは、ハッカーを抹殺したACの姿が見える位置まで自機を移動させた。
ナインボールと呼ばれたACが、まだ硝煙をたなびかせている肩の砲身を背部へと折り畳んで収納するところだ。上部に張り出した肩が特徴的な、赤い二脚型AC……。
「赤いACだと……!」
思わず、フリッツは叫んだ。
『甘いな』
抑揚のない声が、その赤いACから発せられた。用は済んだとばかりに反転するそのACの肩口に、黒い球体に9と描かれたエンブレムがはっきりと見てとれる。
「貴様は!!」
フリッツが怒号した。そのACこそ、彼が長い間探し求めてきた仇に間違いなかった。
『私を追っているらしいな。やめておけ。私に敵対することは無意味だ。誰であろうと、この私を超えることはできない』

感情のこもらぬ冷淡な声でそう言い放つと、ナインボールはブースターを点火させて通路の奥へと姿を消した。

「逃げるつもりか！」

フリッツもブースターを全開にすると、しゃにむにナインボールの後を追った。

『奴がお前の仇……。よせ、今のお前では無駄なだけだ。相談しよう、とりあえず戻ってこい』

激情にかられるフリッツを押さえようと、ラナが慌てて通信を入れてきた。

「待て！　俺と戦え!!」

フリッツはラナの言葉を無視すると、そのままナインボールの後を追い続けた。だが、機体出力の差はいかんともしがたい。コックピット内に警告音が鳴り響き、オーバーヒートのために安全装置が働いてブースターが自動停止した。レーダー範囲内から、ナインボールの姿を示す輝点が離脱していく。

「くそお！」

かなわないと言うラナの言葉を機体の性能差という事実で突きつけられ、フリッツはコンソールを拳で叩いて無念の叫びをあげた。

5

『機体名、ナインボール。パイロット名は、ハスラー・ワン。ネストの定めるランカーズポイントのトップに君臨するレイヴンであり、アリーナでのランキングも一位。それが、奴についてわかるすべてだ』

ガレージに帰還したフリッツに、ラナはナインボールに関する情報を提供した。取り急ぎ音声だけで連絡したとも思えるが、実際には文字やファイルで提示するほどのデータが存在しないというのが正解らしい。

「それですべてだと!?　パイロットの所在は、容姿は、経歴は、関連組織は、交友関係は……他に何か情報はないのか」

あまりの手がかりの少なさに、フリッツはマネージャーに噛みついた。これでは、何も情報がないのと大差がない。彼が出会ったACは、紛れもなく実在していた。だが、その情報がないに等しいのではパイロットを捜し出しようがない。

『そのような情報は存在しない』

きっぱりとラナは言い切った。そして、言葉を続ける。

『なぜなら、奴はトップレイヴンだからだ。レイヴンは、お前のような人間から狙われることが多い。だから、よりベテランになればなるほど、自己のデータは極秘にしてい

るものだ。ごく当たり前の、自己防衛本能と言った方がわかりやすいか。もちろん、噂の類いは掃いて捨てるほどある。試しに検索をかけてみろ、まことしやかなパイロットの画像までヒットするはずだ。だが、すべては勝手な想像の産物でしかない。単なる情報の雑音（ノイズ）だと言ってもいい。そのような物を真に受けていても時間の無駄だということだ』

「なら、どうやって奴を捜せば……、待てよ、奴はアリーナのトップだと言ったな」

方向性を見いだした気がして、フリッツはラナに訊ねた。

『そうだ。レイヴンたちの闘技場での頂点に位置している。それも、ランカーレイヴンたちの集う上位（ハイ）アリーナのトップだ。すべてのレイヴンから恐れられ、今では挑戦する者もほとんどいないため、アリーナでもその姿をほとんど見かけないという話だ。当然、今のお前では手も届かぬ場所だ』

「だが、辿り着けない場所ではないのだろう」

アリーナにやってきたところを襲撃するという乱暴なプランは捨てると、フリッツは正当な手段での挑戦を期待した。アリーナが一つのシステムであるならば、その条件を満たせば敵も逃げることはできなくなる。

『言うものだな。アリーナへの参加は、運営に参加している企業からの推薦があれば可能だ。ただし、二軍とも言えるサブアリーナに関してだがな。そこでなら、レイヴンであれば誰でも戦うことができる。お前が私の選んだ依頼を確実にこなしていけば、その

チャンスもあるだろう。評価が高くなれば、企業の方で放っておいてはくれないからな。お前がサブアリーナに進出できれば、私としてもメリットはある』

一通りの説明をしたラナが、最後でほくそ笑んだ。マネージャーとしては、ビジネスの広がりを感じ取ったのかもしれない。それとも、フリッツの大言に失笑したのだろうか。

「すぐにナインボールのいるアリーナへの参加はできないのか」

思ったよりも多い手順に、フリッツは声を渋らせた。

『まあそう急くな。サブアリーナでの評価、ミッション成功によるランカーポイント、その両方が高まれば参加資格は得ることができる。アリーナの運営母体の企業組合が会議で参加資格を認可するわけだ。それまでは、おとなしく私の指示に従うことだな。時期がきたならば、私がナインボールと対面できるようにはからってもいい。だが、これだけは言っておく。ナインボールの前に立つ者は、確実に排除される。お前に、それだけの覚悟があるか？』

苦笑気味に説明を続けたラナが、最後にまじめな声でフリッツに訊ねた。

「いまさら、それを俺に聞くのか」

マネージャーを名乗るくせには、俺をまだ把握していないなとばかりにフリッツはやり返した。

『いいだろう。いつか約束が果たせるのを楽しみにしている。以上だ』

6

手段は見えた。たとえ時間がかかろうとも、今は依頼をこなして名をあげるのが優先事項だ。それによってアリーナの参加権を手に入れ、やがてはハスラー・ワンへと辿り着く。

数日後、待ちに待った次の依頼がやってきた。

『今回の依頼はR&Gインダストリーからだ。希少金属(レアメタル)を多量に含んだ隕石の落下がヘヴンズロックの第八補給所付近に予測されている。依頼主はそれを回収したいのだが、情報はすでに複数の企業が入手しているため、争奪戦になるのは明白だ。任務は他企業の雇った回収部隊、および、その警護部隊の排除。以上だ』

マネージャーからの連絡は一方的で唐突だった。こちらから連絡を取れないようにされているのはもどかしいが、発信源を調べたりして援助されなくなっては元も子もない。今は、出された課題はこなさなければならない時期だ。

エレベータで地上に出ると、レイヴンズ＝ネストが用意した垂直離着陸型AC輸送機(バラクータ)がシティゲート前で待機していた。後部ハッチからACごと乗降ができる大型輸送機だ。依頼場所が遠距離になる場合に、ネストが依頼主の経費で都合してくれる。

ヘヴンズロックに到着すると、フリッツはアベンジャーに乗ったまま単機で小高い丘の陰に待機した。隕石落下時の衝撃波は、その予想質量から相当のものになると予想される。それに巻き込まれてしまっては輸送機であろうとACであろうとひとたまりもない。

待機を始めてから、どれほどの時間が過ぎただろう。

『時間だ』

ラナの声が響いた。

何かがレーダーを高速で横切ったと思った直後に、凄まじい衝撃波がアベンジャーの頭上を吹き抜けていった。

電波障害がおさまるのを待って、フリッツは丘を越えた。長距離移動車両用の燃料補給所があった場所は、巨大なクレーターにその姿を変えていた。

『さっそく仕事だ。所属不明部隊が接近している。ぐずぐずするな。すべて撃破しろ』

ラナに叱咤され、フリッツはアベンジャーを発進させた。

隕石の落下地点をはさんで、対面から小型ホバー(カファール)の一団が接近してくる。ビーム砲と機銃で武装した、高速戦闘マシンだ。機動性に富む分、装甲のようなものはないに等しい。

「ちょこまかと動き回りやがって……」

武装をミサイルに切り替えると、フリッツは敵のスピードに翻弄されながらも、一機ずつ確実に仕留めていった。

「どんなものだ」
『あまりうぬぼれるな。増長は死につながるぞ』
勝ち誇るフリッツを、ラナがたしなめた。
『やはりACが勝ったか』
ふいに男の声が外部から聞こえた。
フリッツがそちらに回頭するやいなや、銃弾の雨が容赦なく降り注いだ。たまらず、ブースターを使ってクレーターの陰に逃げ込む。
『敵ACを確認した。サブアリーナ所属、インクリアーの乗るACレギュリナだ。どうやら、漁夫の利を狙ってこちらの戦闘中は隠れていたらしい。敵の武装は速射性を重視している。くらい続けないよう注意しろ』
憎いほど冷静に、ラナが情報を伝えてくる。だが、言われたからといって、弾丸が避けてくれるわけではない。激しく装甲板を叩き続ける敵マシンガンの攻撃に恐怖しながら、フリッツは何とかブースターを酷使して敵の有効射程範囲から逃れた。
たった一機なのに、先ほどの五機のカファールに匹敵する攻撃力だ。
「これが、ACだと言うわけか」
自分と同じ戦闘力の相手を敵にして、フリッツは初めてACの恐ろしさを実感した。同時に、自分もそのACに乗っているのだと自身を励ます。何のために手に入れた力だと言うのだ。敵を倒すためではなかったのか。

ラナから送られてきた敵のデータを参照する。レギュリナの機体構成は、ほとんどアベンジャーと変わらない。標準二足タイプの銃撃戦主体の機体だ。一番の差と言えば、銃の違いだろう。敵は、攻撃力は弱いが速射性に秀でたマシンガン（WG MG500）。こちらは攻撃力は強いが、連射性の低いハンドガン（WG HG5-12）。この場合、純粋にパイロットの技量が試されると言っていいだろう。
フリッツはジャンプと同時に空中でミサイルを発射すると、素早く機体を左右に振りながらハンドガンを地上の敵に対して撃ち続けた。ミサイルの回避運動に入った敵が、頭上からの狙撃に機体を大きくのけぞらせる。
着地後に砂塵を巻き上げるようにして横に回り込みながら、フリッツは攻撃を続けた。手を休めれば敵につけ込むすきを与えてしまう。だが、レギュリナもやられてばかりというわけではない。マシンガンによって張られる弾幕は、フリッツの回避運動が敵FCSに読まれるたびに、確実にアベンジャーの機体を捉えていた。
「この程度でやられてしまっては、しょせんハスラー・ワンを倒せない。俺は、誰にも負けられない！」
フリッツはブースターを全開にすると、一気に敵に突っ込んでいった。ハンドガンで敵の体勢を崩しつつ、ブレードの間合いに入り込む。慌てて離脱しようとするレギュリナに対して、すれ違い様にブレードで斬りつける。わずかに敵の機体を浅く切り裂くも、致命傷ではない。だが、気力の差で勝負はついていた。フリッツは即座に反転すると、

離脱しようとするレギュリナの背中にむかってハンドガンを撃ち込んだ。慌てて敵も回頭しようとするが、崩れた体勢のまま集中砲火をあびて機体各所から火を噴き出した。直後に、レギュリナのジェネレーターが誘爆を起こして、機体が粉々に砕け散る。
『どうやら片づいたな。後は回収部隊の仕事だ、帰還しろ』
祝福の言葉もなく、勝って当然だと言いたげなラナの言葉がコックピット内に響いた。
勝って当然……。そう、限界だと悟って依頼を放棄して逃げ出さない限り、ミッションでの敗北は死を意味する。まだ煙をあげているレギュリナの破片を見つめながら、フリッツはそれを嫌というほど思い知らされた。

7

『プログテック社からの依頼だ。同社が所有する、兵器製造工場の管理用コンピュータが突如として暴走を始め、生産されていた戦闘メカが暴れ出した。コンピュータを止めない限り、狂った戦闘メカは生産され続ける。工場の外部に被害が広がらないうちに、事態を収拾しろ』
さほど休む間もなく、頃合を見計らってラナが依頼を持ってくる。確実に仕事を見つけてくるというのは有能な証なのだろうが、フリッツの都合はお構いなしだ。
「そんなに簡単に狂うなんて、いいかげんなコンピュータを使っているものだ」

やれやれといった風にフリッツはつぶやいた。レイヴンとして依頼は嬉しいが、市民としてはそんなに簡単に事故が起こってもらっては困る。
『ウイルスによる妨害工作ということも考えられる。世の中、そんなに簡単にできてはいないということだ。もっとも、レイヴンは背景などを詮索する必要はない。コンピュータと既存の戦闘メカをすべて破壊しろ。それが依頼だ』
ビジネスに私情は必要ないと、ラナが釘を刺した。
「了解した。すぐに出撃する」
ガレージでアベンジャーを受け取ると、フリッツはアイザック・シティにあるプログテック社の兵器製造工場へむかった。
『施設は封鎖されているため、ゲートやエレベータなどは作動しない。必要とあれば、破壊して前進しろ』
ラナが情報を送ってくる。
搬出用の駐車場から工場内部に侵入すると、そこではトライガードという小型の戦闘ロボットが縦横無尽に走り回っていた。スパーテルと同型式の動輪三脚型のロボットだが、こちらは前方一脚後方二脚というスパーテルとは逆の形式になっている。被弾時の安定性が悪い分、移動速度では勝る設計だ。
「ラインを止めないことには埒があかないな……」
数体のトライガードを破壊したところで、フリッツは敵を無視して管理用コンピュー

タを探した。下の階層に埋め込まれている生産施設から敵は次から次へとわいてくる。元を絶たなければ、事態の収拾はありえない。
　もともと簡単な造りの工場だ、合理的な防衛プログラムも施されていない暴走トライガードを排除しながら、フリッツはほどなく制御コンピュータルームに辿り着いた。
　即座に、ハンドガンの銃弾を叩き込む。次々と大穴がコンピュータに刻まれ、次の瞬間爆発を起こした。
『それで生産ラインは停止したはずだ。残存する戦闘メカをすべて破壊しろ』
「了解」
　ラナの指示に返事をすると、フリッツは工場のすみずみまで回って暴走したトライガードをすべて破壊した。
　やっと静寂に支配された工場内に見える物は、破壊された施設と無数のトライガードの残骸だけだ。しばらくは、この工場は使い物にならないだろう。被害者のプログテック社にしたら、結構な規模の損害だ。それでも、まだ工場の中だけで済んだのだから、ましだったと言えるのかもしれない。もし自分のようなレイヴンが処理しなければ、被害はシティ内に及んだことだろう。
「少しは自分も役に立っているということか……」
　そう思ってから、フリッツはがらでもないとその考えを頭から振り払った。その考えが本当に甘さゆえのものだと思い知らされるのは、わずか数日後のことだ。

　数日後、依頼された仕事は再びプログテック社からのものだった。
『今回の依頼は、ある部隊に対する襲撃だ。移動中の部隊を奇襲し、輸送物資を破壊する。現時点の情報では、部隊の構成は輸送用車両が三台、ＭＴが四機となっている。一機でも逃せば作戦は失敗となる。敵を確認次第、すべて破壊しろ』
「その物資は、何か危険な物なのか」
　依頼の意図を読み切れず、フリッツはラナに聞き返した。こちらからしかけるというのならば、何かしらの正当性があるのだろうと思ったからだ。
『さあな。おそらくは、単純に先日の工場で起こった事件に対する報復だろう。輸送部隊の親会社が、あの事件の黒幕だったというわけだ』
「何か証拠でもつかんだのだろうか」
『そのことに何の意味がある』
　馬鹿なことを聞くと、ラナが聞き返した。
『どちらが正しいかなどは問題ではない。問題なのは、お前が依頼を遂行できる能力を持っているのかということだ。余計な詮索はするんじゃない。それとも、自分が正義の味方だとでも錯覚しているのか？』
「いや、そこまでは子供じゃない」
　ラナに鋭く突っ込まれて、さすがにフリッツはそう答えた。
『だったら急げ。敵は待ってはくれない。お前は、与えられた命令を確実にこなす存在

なのだということを忘れるな』

「それがレイヴンなのか」

『その通りだ。以上』

ラナはきっぱりと言い切ると、一方的に通信を切った。

肉親の仇をとる。それは、フリッツにとって絶対的な正義だ。だからこそ、自分の存在は正義だとどこかで決めつけていたのかもしれない。

おかしな話だと、フリッツは自嘲した。

正義などという曖昧なものは、大破壊以後の世界には存在していない。人にも、企業にも、そしてレイヴンにも、正義などは存在しないのだ。だからこそ、自分の信じる道を進む。他人が何と言おうとも、それしか道はないのだから……。

フリッツはその道を確かめるために、今日も出撃していった。

ENCOUNTER 2 『アリーナ』

1

『朗報だ。お前をアリーナに推薦したいという企業からのオファーがあった。アリーナを運営する企業の一つ、プログテック社だ。以前に何度か依頼したミッションの結果をいたく気に入ってくれたらしい。ただし、お前の力を確認したいそうだ』
その日のラナの最初の言葉は、いつになく愛想のいいものだった。
「確認したい？」
『ああ。投資をしたのはいいが、鳴かず飛ばずではむこうも困るのだろう。——現在アリーナに所属しているレイヴンを襲撃して倒すことという条件がついている。はたしてアリーナで通用していくものかどうか、それで見極めがつくというわけだ』
「むこうがそんなことを言ってきたのか？」
『そうだとも。当然だろうが』
ラナが、きっぱりと言い切った。当たり前のことを聞くなという口調だ。
「そういうものか……」
フリッツは、以前のレギュリナとの戦いを思い出してつぶやいた。確かに、他のレイヴンを倒せるだけの技量を示さなければ、これから先アリーナを制していくことなど無理な話だ。

「すでにレイヴンズ＝ネストのネットワーク上には、私から依頼を送信しておいた。アイザック・シティ東の拡張工事現場を荒らしているMTを排除してほしいという内容だ。もちろんすべてでたらめだがな。依頼を真に受けて現れたACを襲撃し、倒すのが今回の目的だ」

「もう罠をしかけたとは、手回しのいいことだ」

お膳立ては、整えられた後というわけだ。手駒が相手の駒を潰せば、事はうまく運ぶ。拒否する余裕などは用意されていない。

「サブアリーナ所属のマネーセイバーからすでに承諾の返事が届いている」

皮肉を込めたフリッツの言葉を、ラナが無視して言葉を続けた。

「MTが相手ならば、レイヴンにとってさほど難しい仕事ではない。そう考えて敵が油断しているところを一気に叩け。だが、相手も同じレイヴンだということだけは覚悟しておけ。こちらが油断すれば、立場は逆転する。以上だ」

すべては最初から仕組まれていたというわけだ。ともすれば、相手自体決められていたのかもしれない。だが、過程がどうであれ、敵を倒すという目的に変わりはない。どのみち、フリッツも階段にかけた足を下ろす気などなかった。上りつめるために敵を踏み台にして潰すことを躊躇すれば、逆に自分が踏み潰されるだけだ。

思考を戦いのことだけに集中させると、フリッツは愛機と共に指定された場所に潜んだ。

天井の岩盤を支える無骨で巨大な足場が組まれただけの広い空間。資材用のプレハブがならんでいる他には人影も見えない。すでに拡張工事現場はラナの手配によって即席のアリーナにしつらえられていた。おそらくは、各所に戦闘を中継記録するカメラも設置されているのだろう。

息を殺して敵を待つこと一時間。四脚型AC特有のジェットホバー音を響かせながら、青緑色（ピーコックブルー）のACが通路から現れる。意気込んでフリッツが飛び出すと、その後ろから黄金色（ゴールド）に輝くもう一機の四脚型ACが現れた。

2

「ACだと!?　話が違うじゃないか」

専用の回線を通じて、ピーコックブルーのACスーパーボウに乗った女レイヴン、マーベランスハントが相棒に確かめた。アベンジャーを確認して驚いているようだ。

「ふん、やることは同じだ。あちらさんも、最初からまっとうな手を使うつもりはなかったと見える。おそらくは、この間の依頼で俺に撃退された組織の仲間だろう」

予想した通りだと、黄金色の愛機（マネーセイバー）のコックピットの中でアイディアルが苦笑した。

「ふふっ、またあたいを雇っておいて正解だったかい？」

少し媚びた笑いをあげてから、マーベラスハントが訊ねる。

『そういうことだな。依頼金額と内容が不釣り合いなら何かある。金に関する俺の勘は、まだまだ捨てたものじゃないってことさ。――しかけるぞ！』

『おうさ！』

呼吸ピッタリに、敵ACが散開した。挟み撃ちにあわないようにと、フリッツは慌ててプレハブの陰に隠れた。

「どうなっているんだ」

フリッツが叫ぶ。

『敵ACはどうやら二人組だ。少々予定とは違うが、何とかするしかないな』

「簡単に言ってくれる」

建物を越えて迫ってくるスーパーボウの垂直ミサイル（WMSMSS24）を急加速でかろうじて回避しながら、フリッツは言った。

飛び出したとたんにマネーセイバーのアームキャノン（AWRF120）の攻撃にさらされる。一発が命中し、命中のショックでアベンジャーの機体が大きく弾き飛ばされた。たまらず、ジャンプして足場の上に逃れる。

『確認した。サブアリーナ所属、マネーセイバーおよびスーパーボウだ。両機体ともにスピードのある四脚タイプだ。攪乱される前に一方に的を絞れ』

ラナのアドバイスが飛ぶ。

二脚の特性を生かして細い足場の上を素早く走りながら、フリッツは敵の狙撃を回避した。対抗するには敵の足を止めるか、こちらのスピードを増すかだ。

フリッツは、敵の現在位置を確認しながらタイミングを計った。

「やれるか!?」

アベンジャーとて、初期の頃から比べれば武装も、中型ミサイルランチャー（WMMVG404）、高出力ブレード（LS3303）、軽量レーダー（RXA77）にランクアップしている。

フリッツはミサイルを発射してマネーセイバーを牽制すると、下を走るスーパーボウにむかってジャンプした。空中でハンドガン（WGHG512）を撃ちながら接近をはかる。高速で移動しながら、同じ武器でスーパーボウも迎撃に出る。同じ武器での撃ち合いの中、フリッツは上空からの有利な位置をキープしながらスーパーボウを追い込んでいった。

後退して射界を維持しつつ、スーパーボウが少なからずアベンジャーに命中弾を与えてくる。素通りしてから反転するのも一つの戦法だが、気の強いマーベラスハントはまっこうからの撃ち合いを挑んできたのだった。その戦法は、フリッツの狙い通りに事を運ばせた。

「しまった……」

追い込まれたマーベラスハントが気づいたときにはすでに遅かった。後方を岩盤に阻まれ、前方から急接近するアベンジャーを避けることは不可能だった。

アベンジャーの斬り下ろしたブレードが、進退の窮まったスーパーボウの機体を切り

裂く。岩盤とアベンジャーの機体でスーパーボウを挟み込むようにして、フリッツは一気に勝負をかけた。邪魔な建物を迂回してマネーセイバーがやってくるまでに、スーパーボウを破壊しなければならない。

自分もブレードで応戦しようとするスーパーボウの左腕をハンドガンで撃ち砕くと、フリッツは機体を後退させた。レーダーに、急速に接近してくる機影が映っている。

『マーベラスから離れろ!!』

怒号とともに、アイディアルが突っ込んでくる。

マネーセイバーのアームキャノンを回避しながら、フリッツは止め（とど）とばかりにハンドガンをスーパーボウのコアに叩き込んだ。弾痕を刻まれてぐしゃりと潰れたコアが、次の瞬間爆発を起こす。ブレードによって半壊していた脚部が、衝撃で周囲に飛び散った。

『貴様、よくも……』

激情にかられたアイディアルが、トリプルミサイル（WMPS2）を連射してくる。

高低差をつけて三方から襲ってくる小型ミサイルを、アベンジャーのコアに装備されている機銃が自動的に迎撃する。だが、すべて防ぎきることができず、フリッツは手痛い一撃を受けることとなった。被弾時の爆炎を引きずりつつ、フリッツはアベンジャーを建物の陰に退避させた。だが、次の瞬間、プレハブの安普請（やすぶしん）がアームキャノンの直撃を受けて粉々に吹き飛んだ。敵は、こんなもので彼を見逃すつもりはないようだ。

『俺を罠にかけて、いったい何を企んでいた!!』

アイディアルが叫ぶ。だが、フリッツはそれに答える言葉を持ち合わせてはいなかった。

フリッツは、言葉ではなく銃撃で敵に応えた。レイヴン同士の会話に言葉はいらないはずだ。焼き尽くす弾丸とビーム、それだけがレイヴン同士で交わされるもののすべてだ。

フリッツの攻撃に敵も攻撃で応えた。だが、アームキャノンは強力な分、弾薬の装填（リロード）に時間がかかる。攻撃は散発的になりやすかった。その間隙を縫うようにして、フリッツは接近と後退を繰り返しながらハンドガンでダメージを与えていった。

ホバーによる高速移動を実現するために耐久力の少ない四脚型の敵が沈黙するまで、さほど時間はかからなかった。最後まで果敢に戦い続けたものの、先に限界に達したマネーセイバーは回頭時に被弾した衝撃で脚が折れ、その勢いのまま派手に横転していった。最後には足場の基部に激突してひっくり返ったままのかたちで止まった。そこへ、容赦なく放たれたミサイルが止めをさした。

『上出来だ。帰投しろ』

すべてが済んだのを確認して、ラナが作戦の終了を告げた。

さすがにアベンジャーも全身がぼろぼろで、歩行するのがやっとという状態だ。後少し戦闘が長引く、あるいは、アイティアルがパートナーの死にも冷静さを失わないで確実な攻撃をしかけてきていたら、勝敗はわからなくなっていただろう。だまし、だまさ

れ。結局、どちらが先にだまされたのだろうか。そして、どこまでが仕組まれたものだと言えるのか。
　この戦いは本当に必要なものであったのだろうかという思いを振り捨て、フリッツは二人のレイヴンの墓場となった場所に背をむけた。食い合い、潰し合うのがレイヴンだと言うのならば、過ぎ去った者たちに言葉をかける必要はないのだ。

3

『このたび、我々プログテック社はあなたの力を認め、アリーナへの推薦を決定しましたのでご報告いたします』
　待ちに待った知らせが届いたのは、それからしばらくしてからのことだった。
『プログテック社は、ここ数年で主にAC関連の分野で急激に業績を伸ばしてきた企業だ。天才と呼ばれる研究者が、開発主任として次々と画期的な製品を発表しているという話だ。だが、企業にとってアリーナなど宣伝媒体の一つに過ぎない。成り上がるための手段に利用されないようにせいぜい気をつけることだ。依頼の成功とサブアリーナの勝利によってお前の評価が上がれば、さらに上のアリーナへも進出することができるだろう』
　ラナの説明は、あまりプログテック社を気に入っているようではなかった。しょせんはアリーナに登録するための手段として割り切れと言うことだ。利用されないようにして利用しろ。それが、この世界で賢く生きていく術のすべてなのだろう。

『依頼もいくつか見繕ってきたが、アリーナに挑戦したいと言うのならば試合の方を手配するがどうだ？』
　定時連絡で、マネージャーはそう切り出した。順調に依頼をこなしていくフリッツに対して、ラナはそれまでの突発的な連絡方式から、定期的な連絡を入れる方式にサポート体制を切り替えてきていた。それだけ、ラナの中でフリッツの評価が上がったという証なのだろう。おかげで、完全に一方的な命令仕事をこなすだけという立場から、ある程度希望の依頼を選べる立場という関係に移行できたのはフリッツとしてもありがたかった。
「できれば、アリーナの方に慣れておきたい」
　フリッツは、そうラナに申し出た。最終的にアリーナでナインボールと対戦するつもりならば、そのシステムに慣れておいた方が有利だ。
『いいだろう。初戦として手頃な相手を見繕ってやろう。詳細は後日連絡する。以上だ』
　ラナの言葉通り、翌日には対戦相手のデータが送られてきた。パイロット名はハイドランカー、AC名はワンダフルバレルだ。バズーカ砲（WGB212）を主体とし、肩に対空ミサイル（WMX201）と中型ロケットランチャー（WRM70）を装備した火力重視の戦車タイプACだ。圧倒的な火力は脅威だが、機動力ではアベンジャーの方がはるかに上だ。勝機はある。

試合は一週間後。待つのはもどかしいが、アリーナが闘技場である限りはいたしかたなかった。人々はAC同士の戦いを観戦するよりも、その勝敗を賭けて楽しんでいる。一週間は、その賭け金を集めるための時間だった。スポンサーの企業としても、新製品などをレイヴンに貸し与える場合もあり、関連企業などに宣伝する時間がほしかったりするわけだ。

フリッツは一週間を無駄に過ごすことなく、アリーナのルールの把握と、対ワンダフルバレルの作戦を練ることに時間を費やした。上位アリーナなどの場合は、自己のランクの一つ上か格下の者と戦うことができる。上位の者と戦うためには、まずその下の者たちをすべて倒さねばいけないというシステムだ。だが、フリッツがこれから挑もうとしているサブアリーナはいわゆるランク外のため、対戦相手は自由に選択できる。

また対戦場所も、挑戦を申し込んだ者が決定できるシステムになっていた。これは挑戦者側が有利だ。フリッツはいくつかある対戦場所を吟味すると、その中から市街地を模したフィールドを選び出した。いかに破壊力の高い武器でも、射線が通らなければ脅威は半減する。素早く物陰に隠れながら接近すれば、ダメージを受けることもない。破壊力の高い武器は自分自身に被害を及ぼす恐怖があり、隣接されれば迂闊には使えないだろう。そのすきをついて、有利なブレードによる白兵戦に持ち込むこともできるはずだ。

勝敗はポイント制になっている。正確には機体によって定められた耐久ポイントを減

算していき、それが○になった時点で勝敗がつく。装甲に覆われたコックピットの維持限界値を示す数値だ。アリーナでの戦いがあくまでも試合である以上、最低限の安全は確保されているというわけになる。もちろん終了命令を無視することもできるわけだが、原則としてはコンピュータによって攻撃停止命令が実行されるようになっている。もっとも、不慮の事故というものは、いつの場合にもつきものだが……。

そして、試合当日となった。

ガレージに搬入したアベンジャーにフリッツが乗り込むと、ハンガーに固定されたまま機体がアリーナ専用のリフトまで移動していく。リフトにハンガーが固定されると、ゆっくりと上昇が始まった。このガレージの上層にいくつか設置されたアリーナの一つに、自動的に運ばれていくのだ。暗闇の中の非常灯の瞬きが、いやでも緊張感をあおる。

どれだけ上がれば気が済むのだろうかと思い始めた頃、ふいにリフトが止まった。前方のゲートがゆっくりと開いていく。その先にあるものは、数ある闘技場(アリーナ)の一つ、市街戦用アリーナだった。老朽化して人の住まなくなった市街地をアリーナとして再利用した地区だ。

ハンガーのロックが外れ、機体が自由になる。フリッツは機体を発進させると、ゆっくりとアリーナの中へと進んでいった。天然光の供給を絶たれたビル街は、街路と建物の中に設置された照明だけの夜の風景を装っていた。暗くてまだわからないが、対戦相手のレイヴンもこの反対側に到着しているに違いない。

『ゲット・レディ！』
薄闇の静寂を破るように、アリーナの運営局から通信が入った。同じ内容の音声ガイドが、備えつけられたスピーカーでアリーナ中に響き渡る。ＡＣのパイロットの他に、カメラのむこうで見ている観客たちのためのサービスと演出だ。
試合開始にむけたカウントダウンが始まり、フリッツは緊張に身体を軽くこわばらせた。
『ゴー!!』
号令と同時にブースターダッシュで前へ飛び出す。接近によってレーダーに敵影が映った。即座に横方向に移動して、敵正面位置から外れる。敵の武装はどれもこちらよりも長射程だ。こちらの間合いに入るまでは先制攻撃を受けるわけにはいかない。
フリッツはブースターを噴かすと、ビルの屋上すれすれを飛び渡るようにして敵に接近していった。
広いメインストリートを後退しながらスペースを確保したワンダフルバレルが、そうはさせじと対空ミサイルを発射する。上下左右からつつみ込むようにして、小型ミサイルがアベンジャーに迫った。予想通りの攻撃に、フリッツは素早くビルの陰に回り込んだ。機体を追尾したミサイルがビルの壁面にあたって爆発する。飛行高度が高ければまず避けきれないが、ビルの高さに合わせて飛んでいたフリッツは、確実にビルを盾にすることができた。

うまく側面に回り込むと、ビルの陰から半身をのぞかせてハンドガンの攻撃を開始する。敵も負けじと撃ち返してきた。盾にしたビルにバズーカの弾体があたって爆発を起こす。爆風で吹き飛ばされた破片が、容赦なくアベンジャーの装甲を叩いた。弾丸やビームとは違って、爆発性の弾体を使用したものは至近弾でも少なからずダメージを与えてくる。
フリッツはブースターによる可変加速を行って敵のＦＣＳ予測を撹乱させながら、果敢に接近戦を挑んでいった。戦車タイプの機体は旋回速度が致命的に遅い。死角に回り込めば、確実に仕留められるはずだ。
フリッツの意図を察したハイドランカーは、底部ブースターで空中に飛び上がった。そのまま一番大きなビルを背後にして、背後に回り込まれないようにする。とはいえ、横に回り込むことは防げないし、背後のビルは防壁になると同時に行動を制限する壁にもなる。せいぜいのところ、底部ブースターによる上下動でアベンジャーの攻撃を避けるのが精一杯だ。だが、高い位置からのミサイルは侮ることができない。
フリッツは右横にあるビルの背後に回避すると見せかけて、ブースターで左に高速移動してから高々度へジャンプした。一瞬アベンジャーを見失ったワンダフルバレルの真上へと素早く移動する。そのまま空中に浮かんでいた敵の上に降下した。踏みつけられるかたちになって、ワンダフルバレルが地上に叩きつけられる。直前に逆噴射をかけて離脱したアベンジャーは、目論見通り敵の背後に着地した。間髪を入れず、ブレードで

勝負を決めようとする。

一撃でワンダフルバレルのバズーカが砲身を切断されて使用不可能になった。使えなくなった武器を投げ捨てて、ハイドランカーが必死に後退しながら回頭しようとする。

逃がすものかと、フリッツは追いかけて連続攻撃をあびせかけた。かろうじてそれに耐え抜いたワンダフルバレルがアベンジャーの方をむく、そのとたん肩のロケットランチャーが火を噴いた。自らの被害を構わずに至近距離で発射されたロケット弾が、爆発によってアベンジャーの機体を吹き飛ばした。迂闊に深追いしすぎたフリッツのミスだ。

互いの距離が開き、ブレードの間合いから外れる。

一気に止めをさそうと連射されるロケット弾を避けて、フリッツは転倒したままブースターで回避運動に入った。道路のアスファルトで機体をガリガリと削りながら、火花をあげてアベンジャーがすべっていく。その無理な体勢からも、フリッツは攻撃の手を休めなかった。ハンドガンの弾丸を、これでもかとワンダフルバレルの機体に叩き込む。

アベンジャーを追いかけるようにして爆発が炎の花を咲かせ、被弾の衝撃でワンダフルバレルが踊るように機体を震わせた数秒間の攻防の後……。

WINという文字が、フリッツのモニタに表示された。コンピュータが、いったんFCSを停止させて攻撃態勢を解く。反応しなくなったトリガーを執拗に引き続けていたフリッツは、我に返ったように手をコントロールスティックから一度引き剥がした。

フリッツは横倒しになった機体から、黒煙をあげて沈黙したワンダフルバレルを見つ

めた。機体には無数の弾痕が刻まれ、めくれ上がり砕け散った装甲板が周囲に散らばっていた。

やっと一息つくと、フリッツはブースターを使って何とか機体を立ち上がらせた。アベンジャーの機体も結構な被害を受けていた。少し動かすだけでも、アクチュエーターが歯車の噛み合うような嫌な音を立てる。

「これがアリーナでの戦い。レイヴン同士が小細工なしにまっこうからぶつかりあった結果は、いつもこうなるということなのか……」

アリーナでは、マネージャーのサポートはありえない。正真正銘の一対一の戦いだった。一瞬の油断が、形勢を逆転する。

まだ冷めやらぬ興奮に身をゆだねながら、フリッツはこれからの戦いの日々を思いやって、戦意を新たにした。

4

「修理が終わったら、控え室に連絡を入れます」

そう言って、アリーナ所属のプログテック社のメカニックは、損傷したアベンジャーの方にむかっていった。フリッツの背後から、ひどく壊れたものだというぼやきが聞こえてくる。

個人で受ける依頼とは違って、アリーナでの損傷はスポンサーが無償修理してくれる。今回は、それがせめてもの救いであろうか。
　未だ戦闘の興奮が冷めきらないフリッツは、大股でプログテック社専属のレイヴン用の控え室にむかった。勝ちはしたが、今回のような戦い方ではこの先の苦戦が思いやられる。
「ナインボールを倒すためには、もっと力をつけなくては……」
　自らの腕の未熟に腹を立てながら、フリッツは控え室のドアを蹴破るようにしてずかずかと中に入っていった。壁にあたったドアが跳ね返り、フリッツの背後で大きな音を立てて閉まった。
「ちょっと、も少し静かに入ってこられないの」
　誰もいないと思っていた部屋の中央から声をかけられて、フリッツは驚いて身構えた。声の主の姿を見て、さらに目を見張る。
「ここはプログテック社の控え室よ」
　中央のソファーにすわった若い女が、少し胡散臭そうにフリッツに言った。スポーツショーツ一枚という姿で、タオルを首から垂らして豊かな胸元をもうしわけ程度に隠している。
「その通りだ。ここはアリーナに所属するプログテック社のレイヴンだけの部屋だ。関係ない者は出ていけ」

　腰に手をあてると、フリッツはきつい調子で言い渡した。
「あら、言ってくれるわね」
　手に持っていたストローつきの紙コップをテーブルの上に置くと、彼女はそのままの姿ですたすたとフリッツに歩みよってきた。
「だから、ここは私の部屋よ、ぼ・う・や……。取り出すんなら、もっといいもの取り出しなさいな」
　フリッツの胸のあたりに人差し指を押しあてて、彼女は台詞に合わせて何度か軽くついた。ちらりと彼の腰のホルスターに視線を這わせてから、かわいいものでも見るような笑みを浮かべた。そのまま踵を返すと、すらりと伸びた脚となだらかな背中もあらわに、さっさともとのソファーに戻ってボンと勢いよく腰を下ろした。ほっそりとした身体が、軽くソファーの上で撥ねる。再び飲み物を手に取ると、彼女は左手を背もたれに回して軽く足を組んだ。あられもない姿は、色っぽいともはしたないともどちらとも言い難い。
「お前も……、レイヴンなのか!?」
　驚きを隠さずに、フリッツは訊ねた。
「この部屋にいるんだもの、当たり前でしょ」
　失礼だとばかりに、彼女が言い返した。押し掛けファンなり、空き巣なりだと思われたのではいい迷惑だという顔をする。

「ビンテージと呼んでいいわ。ACはオレンジ・ペコ」
女レイヴンが名乗った。言外に、あなたも名乗りなさいと含みを持たせる。
「フリッツ＝バーンだ。ACはアベンジャー」
同じように、フリッツは答えた。
「ああ、さっきあの酔っぱらい（ハイドランカー）とバトルしてた新人っていうのはあんただったの。シャワー浴びた後に見た中継でやってたわ」
したり顔でビンテージが言う。いかにも観戦してやったという態度だ。見た目は彼よりも年下に見えるが、その態度はぞんざいだった。まるでフリッツを格下扱いしている。
「そんなことより、いいかげん何か服を着ろ。目のやり場に困る」
フリッツは、少し顔を上気させながら言った。
「あらら。かわいいこと言うじゃないの。いいじゃない、試合後の一服の時間なんだから」
「ここは、俺の部屋でもある」
明るく笑うビンテージに、さすがにフリッツはムッとした顔をしてみせた。
「はいはい、わかりました」
やっと観念したように言うと、ビンテージはソファーの横に投げかけてあったパイロットスーツを手に取った。ストラップレスのブラジャーを着け、ソックスを履くと、スーツに手足を通していく。ボディラインがそのまま出る薄紫色のパイロットスーツは、

シルエット的には先ほどと大差がない。まだ濡れ気味で収まりが悪い髪を頭の右側でキュッと一つにまとめると、髪留めでしっかりと留める。最後にブーツを履いた姿は、うってかわっていっぱしのレイヴンそのものだ。
その姿に、フリッツはあらためて彼女は同業者なのだと認識した。すなわち、戦いの場で出会えば、敵となりうる存在なのだと。
「なあに、まだそんな恐い顔しているの。長いつきあいになるかもしれないんだから、もっと愛想良くしなさいよ。レイヴンなんだから、どちらかが死ぬまでのつきあいになるわよ。まあ、スポンサーが同じというのは、乳兄弟みたいな関係ね」
「意味がわかって言ってるのか？」
呆れるフリッツに対して、ビンテージがさあと言うふうに軽く肩をすくめてみせた。
「だいたい、俺は紅茶を親類にする趣味はない」
「バトルネームなんだから、いいでしょう。人の趣味にとやかく言うんじゃないわよ。それに、あんただって本名を名乗ってるってわけじゃないんでしょうが」
ビンテージに問われて、フリッツはそれには答えなかった。仇に自分の存在を知らしめるために、フリッツはずっと本名を使ってきたのだ。いまさら名前を変えるようなことはしていなかった。実際には、ナインボールには彼の名前など何の意味もないはずであるが、いつか奴に恐怖を与えられる存在となったとき、その恐怖は偽名などではなく彼本来の名前によってのみなされるべきだとフリッツは決めつけていた。

「呆れた。本当に本名を名乗ってるの」
否定しないフリッツの態度を見て、レイヴンらしからぬ振る舞いだとビンテージが少し驚いてみせた。
「まあ、本名だろうがなんだろうが、名前なんてものは当人が使いたいものを使えばいいのよ。あるいは、その人に呼んでもらいたいものをね。――さあ、いつまで突っ立ってるのよ。こちらにきなさいよ。飲み物なら、そこのクーラーから好きなものが選べるから」
勝手に納得すると、ビンテージがフリッツを手招きした。逆らってもやっかいなだけだと、フリッツはウォータークーラーからアイスティーを汲むと、ビンテージのむかいにすわった。
「そんなにつんつんしていると長生きできないわよ、坊や」
未だムッとしているフリッツの顔を見て、ビンテージが面白いものでも見るような顔をしてから投げキッスをしてよこした。
「フリッツだ」
軽く何かを避ける素振りをしてフリッツは訂正した。直後に、ビンテージが爆笑する。
「ならフリッツ、あなたは何でレイヴンになったの？」
「聞いてどうするつもりだ」
唐突だが、お決まりと言っていい質問に、フリッツは疎ましげに聞き返した。

「そうね、単なる好奇心だけだから、聞いてどうするというわけではないわ。だから、話して困るということもないでしょう」
言っちゃいなさいと、ビンテージがうながした。
「ナインボールというＡＣを知っているか？」
「アリーナのトップね」
ビンテージは即座に答えた。
「奴を倒す。それが目的だ」
きっぱりとフリッツは言った。その言葉に、さすがにビンテージが軽く顔をしかめる。
「やめときなさいって。トップランカーにかなうわけないじゃない。名前を売るんなら、もっと安全で確実な方法がいくらでもあるわ。ナインボールとまともにやり合ったら、命がいくつあっても足りないわよ」
これだからビギナーは困ると、片手を振りながらビンテージが言った。
「それでも、俺は、肉親の仇をとらなければならない」
フリッツは、自分自身に言い聞かせるようにつぶやいた。
「今時敵討ちというわけ。古風ね。そういうのは嫌いじゃないわ」
彼の言葉の時代錯誤的な響きに、ビンテージは面白そうに目を輝かせた。少なくとも、ゴシップ的な暇つぶし程度は与えてくれそうだと思ったのだろう。
「でも、無謀な奴にレイヴンはつとまらないわ。いつか、そのへんは手取り足取りたっ

ぷりと教えてあげるわよ。長生きしたいんなら、もっと賢く生きないとね」

「どういう意味だ」

仏頂面のまま、フリッツは聞き返した。まったく、この女レイヴンには、彼は最初から調子を狂わされっぱなしだ。

「先輩には、貸しを作っておけということよ。はい、おかわり」

彼の態度には構わず、ビンテージが紙コップを突き出した。

「嫌だと言ったら」

腕組みをしたまま、フリッツは訊ねた。

「自分で入れるわ。かわりに、あなたにはアリーナで銃弾を」

顔色一つ変えず、にっこりと微笑みながらビンテージが言った。奇妙に人なつこい一面を持っているかと思ったが、やはりレイヴンはレイヴンだ。その方が小気味いい。

「まったく、お前みたいな奴は初めてだ」

フリッツは苦笑しながら手を差し出すと、ビンテージから紙コップを受け取った。

5

ミッションにアリーナ。レイヴンとしてのフリッツの生活は順調であると言えた。

アリーナに関しては全戦全勝とは言えないまでも、日を追うごとに彼の戦闘技能は高

まっていった。ナインボールへの復讐の道は、明確な一本道のように思えていた。

「大きな口を叩いていただけのことはあるかな」

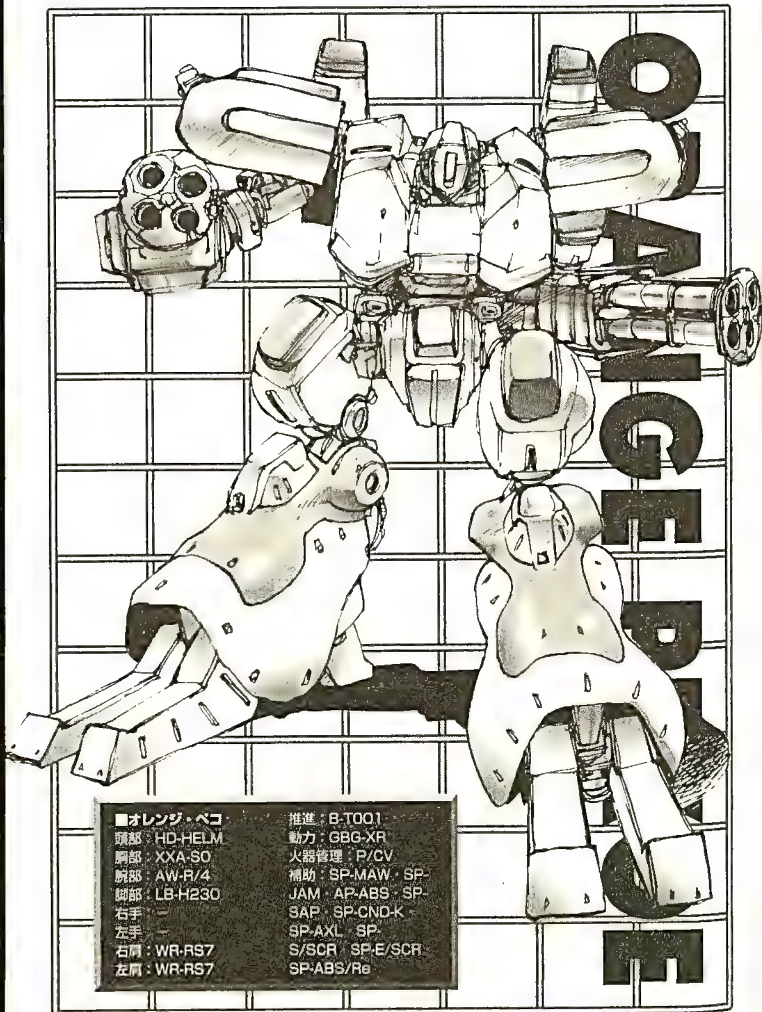
控え室のテレビに映し出されている試合中継を見ながら、フリッツはつぶやいた。画面の中ではビンテージの乗るオレンジ・ペコが、ボマーの乗るレインボムと戦っている。どちらもジャンプによる機動性に富んだ逆関節型のため、戦いは空中戦にも似た立体的なものだ。

レインボムの両腕のミサイルランチャー（ＡＷ－３０／３）と両肩の爆雷投下装置（ＷＭ－Ｘ１０）の攻撃をかいくぐりながら、オレンジ・ペコが急接近と離脱を繰り返しつつ攻撃を加えていく。

それにしても、オレンジ・ペコを構成しているパーツは、ほとんどフリッツの知らない物ばかりだった。

プログテック社のデータベースによると、ヘルメットのような形状の頭部がＨＤ－ＨＥＬＭ、軽量で平たい薄型のコアがＸＸＡ－Ｓ０、四連ガトリングキャノンを装備した両腕がＡＷ－Ｒ／４、ボリュームのある逆関節型の脚部がＬＢ－Ｈ２３０、高効率型のブースターがＢ－Ｔ００１、近距離ＦＣＳがＰ／ＣＶ、高出力ジェネレーターがＧＢＧ－ＸＲ、両肩には特殊ロケット弾ランチャーＷＲ－ＲＳ７が使われている。ほとんどの物がプログテック社の新製品なのだろう。おそらく、彼女は新製品の実戦テストも請け負っているに違いない。

特殊ロケット弾がレインボムにクリーンヒットし、機体が青いスパークにつつまれた。



一時的に電磁スクリーンで敵機体をつつみ、ＦＣＳの機能を麻痺させる物らしい。与えるダメージは低いものの、しばらくは手動照準に頼らざるをえなくなるため、使い方によっては十分な牽制になる。

武器の解説データを参照しながら、さてどう攻めるのかと興味を持ってフリッツはテレビ画面に注目した。

敵の動きが鈍ったのを見てとるやいなや、ビンテージがブースターによる加速で一気に間合いを詰めた。至近距離から、両腕の速射キャノンを連射する。派手な爆発が立て続けに起こり、レインボムがたまらず上空へと逃げ出した。

「勝負は見えてきたかな」

フリッツがニヤリとしたとき、ふいに部屋の扉をノックする音がした。

「プログテック社の者です。フリッツ＝バーン様はいらっしゃいますか？」

急いでいるらしい男の声が通路から聞こえてくる。

「何か用か？」

扉から離れた場所から、フリッツは聞き返した。正体不明の相手の言葉を鵜呑みにしないぐらいには、彼もレイヴンらしくなってきている。

「緊急を要する事態が発生しました。今回は直接依頼をしたいのです」

「どういうことだ。契約では直接の依頼は受けないことになっているはずだが」

用心しながら、フリッツは扉を開けた。

走ってきたのだろうか、顔を上気させた事務職然とした男が息をはずませて立っていた。

「ミズ・ラナに連絡はしたのですが、不在らしくコンタクトできないのです。そのため直接参りました。特例として、依頼を受けてくださいませんか」

「だが、俺は後一時間もすれば試合だ」

困ったようにフリッツは言った。彼としても、この場所に遊びにきているわけではない。

「スポンサー権限として、アリーナの参加権を一時的に停止することも役員から提案されています」

フリッツの言葉は予想されていたらしく、男はあらかじめ用意していたらしい言葉を切り出した。

「俺を脅すとはいい度胸だな」

皮肉っぽく唇の端を動かしながら、フリッツは言った。

「致し方ありません。事態は切迫しているのです。現場に一番早くかけつけられるのは、もっとも近い場所にあるアリーナにいるレイヴン、すなわちあなたたちだけです」

プログテック社の使いは、少しも怯むことなく答えた。彼としても、フリッツがレイヴンであることを重々承知した上での行動らしい。その視線がちらりと、テレビの画面に流れる。さすがに、現在試合中のビンテージを引っぱり出すことはできなかったようだ。それで真っ先にフリッツのところへきたのだろう。

ここで争ってスポンサーを辞退されたりしては、ナインボールに手が届かなくなる。ラナは後で納得させるしかないだろう。

「現在状況は?」

フリッツは、引き受ける意向を示した。

「現在、弊社の研究用施設が所属不明のＭＴ部隊に襲撃を受けています。初期の段階で救援のＡＣを現場にむかわせたのですが、敵の侵入を防ぐのが精一杯の状況です。施設内には、弊社にとって非常に重要な人物がいます。彼を死なせるわけにはいきません。すぐにも援軍が必要なのです」

「わかった。すぐに出発しよう。現場への足はどうなっている」

うなずくと、フリッツは男をうながして歩き出した。時間が惜しい。それと、ここでプログテック社の重役なり何なりに恩を売っておくのは、先々に都合がいいはずだ。

「目的地は地上部分にある海上施設のため、ＡＣ用ホバーキャリーを用意してあります」

「いいだろう。だが、直接依頼の責任は取ってくれよ」

念押しすると、フリッツはガレージへと急いだ。

6

用意された大型のホバーキャリーはアベンジャーを収容すると、大型リフトを使って地上ゲートへと直接上っていった。大破壊と呼ばれる最終戦争以降、地上の大部分は人間の生活圏としての機能を失っている。とはいえ、荒廃した地上にも緑や青い水がまったく残っていないわけではない。中断したアース・リフォーム計画のささやかな結果だ。そして、それに群がるようにして企業の施設がいくつか地上に点在している。放射線の対策などをしっかりしていれば、地上は生存圏となりえなくともまだ活動圏としては機能するのだ。

赤茶けた荒野を高速で移動したホバーキャリーは、ほどなく海岸から海上へと出た。

『敵部隊をすべて排除し、施設内の人員を救出してください』

無線で指示が入る。散発的な銃声が聞こえ、海上のプラットホーム上に設置された研究施設がメインモニタの視界に入ってくる。夕焼けの光に染められて、その風景は色褪せた赤い単色画（モノクローム）に見えた。

「出撃する」

言うやいなや、フリッツはブースタージャンプで一気に戦場へとむかった。高々度から、素早く建物と敵の配置を頭に叩き込む。かなりの数のMTの残骸に紛れるようにして動いているのは、五機のスティンクバグだ。

アベンジャーに気づいた敵が、上空にむかって銃撃を開始した。だが、胴体射界のスティンクバグの機銃では、上方はほとんど死角と言ってもいい。

機体を左右に振って、アベンジャーが簡単に弾丸を避ける。そのまま降下しながら、フリッツは一機のスティンクバグに頭上から攻撃を集中させた。上方面積の多いスティンクバグは、フリッツにとっていい射撃の的だった。アベンジャーが着地するまでに、文字通り蜂の巣のように穴だらけにされて敵が爆発する。

着地と同時に、フリッツはブースターで素早く右方向に加速した。機体の左側を、敵の放った銃弾がかすめ通る。敵を倒した直後が、もっとも他の敵に狙われやすい瞬間と言える。戦いの手を休めては反撃を受けるだけなのだ。

横に移動しながら、フリッツはプラットホームの端から攻撃してきた敵にむかってミサイルを放った。直撃を受けた敵が、バラバラになりながら海へと落下する。

立体的な移動で他の敵に接近すると、フリッツはすれ違い様にブレードで敵の脚部を切断した。バランスを崩した敵が横転する。まさにひっくり返って腹をむき出しにした状態のスティンクバグに、ハンドガンで止めをさした。

残る敵は二機。両機とも、施設の建物の一つに取りついて、集中攻撃を加えている。分厚い装甲板のシャッターが変形し、今にも突破されそうになっていた。おそらく、あの中に所員たちがいるのだろう。

　フリッツは建物に流れ弾をあてないように角度を選びながら、敵にハンドガンで攻撃を浴びせた。被弾した敵が回頭する短い間に、一気に間合いを詰める。そのまま勢いをつけて、フリッツは手前のスティンクバグに体当たりをかました。倒れる敵をかかえ込むようにして、もう一機の敵に対しての盾に使う。躊躇することなく放たれた敵の弾丸は、倒れたスティンクバグの機体に吸い込まれていった。

　盾にした機体の陰からジャンプして躍り出たフリッツは、敵の真上に乗っかるようにして降り立った。乗った瞬間に、真下にむけてハンドガンを連射する。コックピットを射抜かれたスティンクバグが、アベンジャーが飛び降りると同時につんのめるようにして倒れた。

　フリッツは、擱坐(かくざ)してまだ脚部をばたつかせている最後の一機に近づくと、弾痕の刻まれたその機体に、すっとブレードを差し入れた。白煙が立ち、コックピットを焼き溶かされたスティンクバグの動きがピタリと止んだ。

「やれやれ、片づいたか。思ったよりも楽だったな」

　敵が全滅したのをレーダーで確認して、フリッツは一息ついた。彼が倒したのは五機のスティンクバグだけであったが、それに倍する数の敵機の残骸がプラットホーム上には散乱していた。中には、ライトニング級(クラス)MTの残骸らしきものも見える。おそらくは、先に派遣されたレイヴンが破壊したものだろう。しかし、肝心のレイヴンのACはどこにいるのだろうか。

　とにかくも、もう安全だということを伝えに、フリッツは建物の方にむかった。生き残っている研究員たちを、ホバーキャリーに収容しなければならない。

『俺は本社から派遣されたレイヴンだ。敵は排除した。退避用の迎えがきている。安心して出てきてくれ』

　無線と外部スピーカーの両方で、フリッツは建物の中の人間に呼びかけた。

　だが、すぐに人々が飛び出してくる様子はない。じっと待っていると、突然シャッターが大きく歪みだした。何事かとフリッツはアベンジャーに攻撃態勢をとらせた。

『待て待て、俺は味方だ』

　そんな声とともに、シャッターが押し倒されて一機のACが現れた。

『お前は……』

　見覚えのあるACの姿に、フリッツは一瞬戸惑った。

『ああ、あんただったのか。正直助かった。ブレードを壊され、弾薬も酒も切れちまったところだったからなあ。とりあえずは礼を言っておくぜ』

　ぞんざいに礼を述べながら、ハイドランカーがキュルキュルとキャタピラを鳴らしてワンダフルバレルを前進させた。フリッツを結構手こずらせた彼が、全弾を使い切るほどに多数の敵による攻撃は激しかったようだ。

　昨日まで敵だったレイヴンが、今日は味方だ。そして明日は、また敵に戻るのだろう。だとしたら、彼を助けにきた自分という存在は何なのであろうかとフリッツは自問した。

依頼によって立場を変えるのがレイヴンの本分であるのなら、レイヴン個人にとっての正義とはどこにあるのだろうか。いや、もしかしたらそんなものは最初から存在しないのかもしれない。一元的な主義主張ほど、レイヴンにとって無価値なものはないのだ。だとしたら、復讐という目的を持っているフリッツは、レイヴンとして異端な存在なのだろうか。

復讐の価値、それは……。それは誰に決めてもらうものでもない、その価値を決めるのは自分自身だとフリッツは自分に言い聞かせた。

ともあれ、同じレイヴンの血を流すことによって報酬を得るはずのレイヴンが、同じレイヴンを助ける依頼をこなしたのだ。今はそれでいいではないか。自分はハスラー・ワンとは違うとフリッツは声に出さずに言った。

建物の外に出てきたワンダフルバレルの背後には、無事な研究員たちの姿があった。さすがに突然の襲撃に消耗したらしく、また建物の奥でぐったりと床にへたり込んでいる。レイヴンではない一般人が長い間銃声の最中におかれたのだ、それも無理からぬことだろう。

だが、あまりぐずぐずしてもいられない。いつまた敵が襲ってこないとも言えないのだ。

『何だ、あいつは』

突然、ハイドランカーが叫んだ。逸早く敵を察知したらしい。フリッツの危惧は、現

実のものとなってしまったのだ。

海中を疾走してくる敵の姿をフリッツはモニタで確認した。

海上に突き出た機体の一部らしき物が、白い軌跡を曳きながら急速に近づいてくる。敵が浮上した。流線型のボディが海面に浮かび上がる。小型潜水艦かとフリッツがミサイルを構えたとき、敵は水飛沫をあげて空中に飛び上がった。

そして敵は変形を始めた。機体後方が下に折れ曲がって脚部になり、底部が左右に別れて腕部となった。まぎれもない、MTの形態だ。

どすんという衝撃を響かせながら、アベンジャーよりもふた回り近く大きい機体がプラットホーム上に降り立った。

「馬鹿な、海中からMTだと!?」

敵が大型の重MTであることも驚きだったが、海中から現れたということの方がより驚異であった。複雑な動きを再現したACやMTは、機構上稼働部が非常に多くデリケートである。そのすべてをシールドして気密式にすることは不可能だと言っていい。浸水すれば内部の電装系は確実にショートするなり腐蝕するなりしてしまう。すなわち、実用レベルの水陸両用のMTやACは現状技術では実現されていないはずなのだ。だが、眼前に現れた敵は、紛れもなく水陸両用の可変型MTであった。

『冗談じゃない。悪いが俺は下ろさせてもらうぜ』

そう叫ぶなり、ハイドランカーは接岸しているホバーキャリーにむかって全速力で逃

げ始めた。攻撃能力を失っている彼としては、いたしかたない選択だったと言えるかもしれない。だが、レイヴンとして、敵に背をむけたということは致命的だった。

回頭してワンダフルバレルを捉えた敵MTの頭部ランチャーからミサイルが発射される。移動力の落ちていたワンダフルバレルが直撃を受けた。右側のキャタピラのベルトが切れ、動輪が空回りする。MTの左腕が上がった。五連装キャノンから一斉に銃弾が吐き出される。

『うわあ!!』

ハイドランカーの悲鳴が上がった。だが、それもすぐにワンダフルバレルの爆発する音にかき消される。

フリッツはアベンジャーの右手を大きく振って研究員に隠れるように指示すると、ハンドガンを撃ちながら走り出した。とにかく、敵を引きつけて建物から離さなければならない。

ワンダフルバレルを倒したことに気をよくしたのか、敵はまず邪魔者であるフリッツに食いついてきてくれた。ゆっくりとした動きで、アベンジャーを追ってくる。

敵の動きが鈍いのは、海中での運動性を重視しているせいであろう。攻撃を命中させるのはたやすい。おそらくは、まだ試作品(プロトタイプ)レベルの兵器なのだろう。だが、その重装甲と火力の高さは、機動性の低さを差し引いたとしても脅威だ。

敵のミサイルにハンドガンで応戦しながら、フリッツは敵をプラットホーム中央の広

い場所におびき出した。まだくすぶっているスティンクバグの残骸を蹴り崩して、MTが前進してくる。

戦いながら、フリッツはさすがに武器の残弾が心許なくなってきていた。このままでは、先ほどのワンダフルバレルの二の舞だ。ハイドランカーを救うことができなかったのは自身の未熟だとフリッツは自責するが、しょせんは自分の身を守る者は自分だけなのだ。そうでなければ、レイヴンとして生き抜くことはできない。

二脚型(タイプ)の機動性を最大限に生かして敵の攻撃を凌ぎながら、フリッツは機会をうかがった。

ミサイルの最後の一発を放つ。

敵が被弾した瞬間、フリッツは上空にジャンプして敵を飛び越えた。アベンジャーを追うようにして、掲げられた敵の右手からマシンガンの銃弾が曲線を宙に描いた。そのわずかに先をアベンジャーの機体がいく。限界まで上をむいた敵の背後に回ったアベンジャーは、振りむき様に空中で敵をブレードで薙いだ。敵MTの後方に突き出た形状の頭部の中央に装備されたミサイルランチャーが、その一撃で吹き飛ぶ。誘爆したミサイルは、アベンジャーの機体を弾き飛ばし、同時に敵の分厚い装甲に亀裂を生じさせた。

すかさず、フリッツはそこを攻め立てた。ブースターで高度をとり、ハンドガンで正確に亀裂を狙う。これでもかと撃ち込まれた弾丸が、内部機構を抉(えぐ)りながら機体の奥深くまで達する。次の瞬間、ジェネレーターを撃ち抜かれた敵MTが爆発を起こして四散

した。

　ハンドガンの残弾をすべて使い果たしたのを確認すると、フリッツは渋い顔でレーダーを確認した。こんな状態で新手の敵がきたら、本当にまずいことになる。長居は無用だ。

　さっさと研究員を収容しようと彼らのいる建物に戻ろうとしたフリッツは、ふいにレーダーに現れた赤い輝点にその身を緊張させた。だが、急速回頭したフリッツの目に飛び込んできた物は、プログテック社のホバーキャリーに乗ったMT群だった。その中に、ビンテージのオレンジ・ペコの姿もあった。

『やっほー、もう片づいちゃったかしら』

　張りつめた緊張を吹き飛ばしてくれるような声で、ビンテージから通信が入った。

『お前か』

　ホバーキャリーから跳び上がって目前にすとんと着地したビンテージにむかって、フリッツはいまさら何しにきたんだとため息をつくように言った。正直、敵でなくてよかったというのが本音ではあったが、さすがにそれは口にはしない。

『今のところは敵はいない。今のところは……な。すぐに撤退するぞ』

　フリッツは脳天気なビンテージをうながした。先ほどの重MTのような敵が再びやってきたら、撃退するので手一杯ということになる。ここに居続ける限りそれが続くのでは、たまったものではない。

『そんなに急ぐこともないのに。被害はどのくらい？』

　次々に上陸してくるMTのファットボールドをバックに、ビンテージがつまらなそうに訊ねた。一戦もしないで帰るのが不満のようだ。

『戦力的には見ての通りだ。人的にはまだ確認できてない』

　プラットホーム上に散乱する無惨なMTの残骸を指し示しながらフリッツは答えた。

『ふーん、運がなかった奴もいたわけね』

　物言わぬ残骸と化したワンダフルバレルを見つけて、ビンテージがそれだけ言った。それですべてだと言いたげに、もうそちらを振り返らない。

『見たこともないMTが……、おい、そこで何をしているんだ』

　説明しようとして、フリッツは自分が倒した重MTの残骸のそばをうろうろしている研究員の一人を見つけて声をかけた。しゃがみ込んだり、パイプ状の破片を使って装甲の亀裂を広げて内部を見ようとしたりと、いかにも怪しい振舞いをしている。

『あら、やっほー、エラン。無事だったんだ』

　その男を見るなり、ビンテージがオレンジ・ペコのコックピットハッチを開いた。コア中央の装甲板が上下に開き、パイロットスーツ姿のビンテージが姿を現して大きく手を振る。その姿は、まるで無邪気な子供のようだ。敵をまったく気にしていないその仕草に、フリッツは幼い子供の保護者のような気分になって再びレーダーに目をやった。

『誰なんだ、フリッツ』

フリッツは、ビンテージと研究員の両方にむかって訊ねた。
「私の専属メカニックよ」
肉声でビンテージが叫んだ。戸惑うフリッツに、聞こえなかったのかなと再度ヘルメットのマイクを使って言い直す。
彼女の言葉を聞いて、下にいる研究員が困ったように苦笑いした。
「別に、新製品のテスターをしてもらっているだけですよ。あ、自己紹介します。プログテック社AC研究部開発室主任のエラン＝キュービスです」
そう言うと、エランは再びMTの破片に視線を戻した。危機感など微塵も感じられない。状況を把握することよりも、目の前にある機械への関心で頭が一杯という様子だ。
『仕事中悪いが、すぐに避難してもらいたい』
あまりの学者馬鹿なエランの様子に呆れたフリッツは、少し命令するような口調で言った。
その言葉に、どうしようかとエランが瞬間困ったような顔をして立ち上がる。
「そうね、早く帰りましょうよ。私はもう疲れちゃったわ」
ビンテージにもうながされて、さすがにエランもあきらめたようだった。後からきたMT隊に水陸両用のMTの残骸の回収を頼むと、他の研究員たちとホバーキャリーへとむかった。
回収用のホバーキャリーとMTを残して、フリッツとビンテージも乗り込んだホバー

キャリーはアイザック・シティへむかって出発した。
薄闇の中に溶け込んでいくプラットホームを見送りながら、フリッツはそこに残されたワンダフルバレルと敵MTの残骸のことを思った。レイヴンという存在の、その死の何とあっけなく、そして軽いものか。空しさを感じたとしても、それが現実なのだった。たとえば、フリッツが死んだとしても悲しんでくれる者など誰もいない。ラナにしろ、ネストにしろ、プログテック社にしろ、次のレイヴンを探すだけだ。
ふと、フリッツはアベンジャーのすぐ隣にいるオレンジ・ペコの方にカメラをむけてみた。同じレイヴンであるビンテージがどうしているか気になったのだ。おそらくは、先ほどのハイドランカーに対する態度を見ていれば訊ねるほどのこともないのだろうが。
無防備にも、ビンテージはまたもやコックピットハッチをオープンにして生身をコアの外にさらしていた。計器の光に下から淡く照らされながら、片膝をかかえた姿勢でくつろいでいる。ヘルメットを脱いで解いた髪を気持ちよさそうに風に流す姿は、なぜだかこちらをもゆったりとした気分にさせる。
「あら、何か用？」
アベンジャーの頭部が自分にむけられているのに気づいて、ビンテージが振りむいた。
『いや、警戒態勢中に不謹慎だと思ってな』
杓子定規に、フリッツはビンテージに注意した。
「いやだあ、何かたいこと言ってるのよお。敵が近づけば、エランたちが教えてくれる

わよ。私たちよりも広範囲のレーダーを装備しているんだから」

つまらないことを言うのはよしてとばかりに、ビンテージが片手を振る。そしてついと顎を振ってホバーキャリーのブリッジを指し示した。薄暗い室内灯に照らし出された操縦室に、開け放した窓に頬杖をついて外を眺めているエランの姿が見える。風が入るのを迷惑そうにしている他の乗員のことなどお構いなしのようだ。あれでは敵の接近を教えてくれるとは到底思えないと、フリッツはためいきをついた。他の人間をあてにする方が利口だろう。

「せっかくの地上なんだから、少しは堪能しないとね」

エランの心情を代弁するかのようにビンテージが言う。おかしなところで、気の合っている二人だ。

『紫外線で肌が荒れるぞ』

「大丈夫、もう日は落ちてるもの」

『だいたい、コックピットに入り込んだ潮風で機器が傷む』

「そんなのは、メカニックに掃除させればいいのよ。もう、まったくうるさいわね」

むやみに突っ込んでくるフリッツに、ビンテージがうんざりして怒鳴った。

「あなたもそんなところに閉じこもってないで、外に出てきたらどう。いつまでも閉じこもってると腐るわよ。それとも、外に出るのが恐いとか」

口に手をあてながら、うぷぷとビンテージが笑った。

ムッとしたフリッツは、返事もせずにコックピットを開いた。コアの左胸部装甲が開き、突き出したガイドに沿ってコックピットシートがスライドする。銀で縁取られた黒のパイロットスーツとヘルメットは風を通さず、そのままではビンテージの言葉の意味などわからなかった。立ち上がってヘルメットのバイザーを開くと、湿った空気が顔をくすぐった。とっちゃいなとビンテージが目で言う。うながされるままにフリッツはヘルメットを脱いだ。ヘルメット内にこもっていた無意味な熱気を風が奪い去っていく。

「ねっ、気持ちいいでしょうが」

オレンジ・ペコのコックピットから、少し高い位置にいるフリッツを軽い上目遣いに見上げながらビンテージが訊ねた。

確かに風は気持ちのいいものであった。地下都市の閉鎖空間に吹く人工の風とはどこかが違う。

「ああ、悪くはないな」

答えると、フリッツは頭を巡らせたビンテージの視線の先を追った。ホバーの巻き上げる飛沫のむこう、黒く輝く水面の先に月明かりに浮かび上がった水平線が見える。

ミッションの戦場という概念以外で風景を眺めたのは初めてだった。レイヴンになる前は、地上は許可なく簡単にいける場所ではなかったし、生活環境の整備されていない未開の地など興味もなかった。

地上の風景、それを一言でたとえるならば……。

「不思議だよね……」

フリッツの心の内を読んだかのようにビンテージがつぶやいた。

「地上っていうのは、時間と季節で同じ場所でもその風景を変えるのよ。味気ない地下とは大違いね」

「そうだな」

フリッツは、素直にうなずいた。ビンテージの言葉を否定する気もその必要もなかった。

「そのうち、アリーナで金を貯めたら、長距離移動用のキャリアを買うつもり。それで、世界中のシティを回るんだ」

「変なことを言う奴だ」

ふいにそんなことを言い出したビンテージを、フリッツはおかしなものでも見るように見つめた。

「だってさ、つまんないじゃない。生きてるうちは楽しまなくちゃ。アイザック・シティにすべてがあるわけじゃないし、他の場所には、もっと違ったものがあるかもしれないじゃない」

かかえた膝の上にほっそりとした顎をのせながら、ビンテージがつぶやいた。とりたててフリッツの方をむくでもなく、黒曜石色の海面に自分の姿が映ってでもいるかのように静かに見つめている。

「それを見にいこうって言うわけか?」

酔狂なこと、そして面白いことだと思いながらフリッツは聞き返した。

「そうよ。何なら、キャリアの運転手としてフリッツを雇ってあげようか」

「遠慮しておく」

フリッツはそう答えた。彼には、まだアイザック・シティでやるべきことがある。ハスラー・ワンがこのシティのアリーナにいる限り、他の場所に移るという考えなど問題外だった。そして、仇を倒した後のことは、まだ考えられない。それは、そのときに考えれば間に合うことだと、今のフリッツは信じ込んでいた。

「そう。まあ、気が変わったら言ってよね」

ようやくフリッツの方を振り返ってにっこりと笑うと、ビンテージは立ち上がってうーんとのびをした。陸地がもう間近に迫っていた。

「あーあ、いいクルージングだった」

「呆れた奴だ。いったい、何しに出てきたんだ」

あっけらかんとしたビンテージの言葉に、フリッツとしては笑うしかなかった。彼女にとっては、遊びと仕事と、すべての事象が横一線にならんでいるのだろうか。

「あら、あなたやエランを助けるために決まってるじゃない。これでも、ペコの修理もそこそこにかけつけたんだから」

「役には立たなかったがな。どうせクルージングのついでに助けるつもりだったんだろ

う」

ちょっと心外だと言いたげに腰に手をあてるビンテージに、フリッツは軽くやり返した。

「わかってるんならいいじゃない」

言うようになったわねと、ビンテージがほくそ笑む。それを合図に、二人はACの中に戻っていった。彼らを待つ地下都市へと帰還するために。

7

イレギュラーな依頼をこなして自宅へ帰還したフリッツを待っていたのは、ラナ＝ニールセンからの一通のメールだった。

『お前の行動に関しては、マネージャーである私が指示を出すと言ったはずだ。たとえスポンサーの要望でも、勝手に依頼を受けることは許さない。二度とこんなことはするな。以上』

いつにもまして厳しい文面のそのメールは、あきらかに警告であった。苦情でも、注意でもない。そこから伝わってくるのは、自分の思惑から外れる者は許さないという強い意志だ。

いったい、ラナ＝ニールセンという存在は、フリッツのことをどう思っているのだろ

うか。しょせんは、道具の一つとしか思っていないのだろうか。だとしたら、何のための道具なのであろうか。

疑問は膨らむばかりであったが、まだラナ＝ニールセンという後ろ盾を失うわけにはいかなかった。相手がフリッツを利用しようとしているのと同じように、彼も彼女を利用すればいいというだけのことだ。いずれフリッツが彼女の手を離れるようになった場合、彼女がどう出るかは未知数だった。かつてそうしてきたと言うように、新しいレイヴンを育てるのだろうか。そして、フリッツの存在を見過ごすのか、そうでないのか。その答えは、フリッツがレイヴンとして成長すれば自ずと出るのだろう。それは、彼が仇敵に近づくことでもある。

敵討ちが終わり、すべてを知りえたならラナに対する答えを出そう。それが彼女を助けることになるのか、彼女と戦うことになるのかはわからない。だが、少なくとも、現在彼女はフリッツの味方だと言える。それに応えるだけのことはしなければならない。信頼を回復するためにも、フリッツは精力的にラナの選んでくる依頼をこなしていった。

あるときは、墜落していたらしい前時代の宇宙船を調べにいったプログテック社の調査隊を救出にいき、あるときはテロリストが持ち出した地上戦艦を撃破し、あるときは大型ビーム砲台の破壊を請け負ったりした。それらのミッションを通じてわかったことは、地上には大破壊以前の失われた技術（ロストテクノロジー）を隠し持った施設などがかなりの数存在してい

るということだった。そして、それらを手に入れるために多くの企業が闘争を繰り返している。その先鋒がレイヴンなのだ。ミッションを受け持ったレイヴンの活躍により、特定の企業が新たな技術を手に入れる場合もあり、最悪の場合は争奪戦の末に肝心のものを破壊して永遠に失ってしまうこともある。ときには、ライバル企業に渡すぐらいならと、最初から破壊を依頼するところもあるくらいだ。

『ええ。それが現在の自然な競争形態と言えるでしょう』

アリーナの控え室のモニタに映ったエランは、そうフリッツに答えた。

「エランの言う通りね。企業なんて、どこも足の引っ張り合いしかしないもの。お宝を壊すことなんてしょっちゅうよ」

ビンテージが、尻馬に乗るように言った。先日の依頼で救出してもらったお礼をどうしても直接言いたいからとのエラン＝キュービスのたっての願いだからということで、画像電話(ヴィジフォン)の前に試合が終わって帰ろうとしていたフリッツをむりやり引っぱり出したのはもちろん彼女だ。

『おかげで、最大手のクロームとムラクモの二大企業を含めて、新技術は頭打ちの状態です。もっとも、昔のような大量破壊兵器を再製造するような技術も失われたままなので、大局的には悪い方向にいきすぎているわけではありませんが』

「そう言いながらも、不満そうだな」

エランの顔を見て、フリッツはつついてみた。

『そう見えますか。困りましたね』

エランが苦笑する。

『技術者としては、新しい技術を考え出すことはとても楽しいことですから。確かに昔の機器を手に入れることで、技術の再現はできるとは思いますが、私としては自分で原理を考えることの方が好きですね。過去の模倣は、過去の歴史の再現になりかねませんから』

「そう言いながら、作っているのがAC用の武装というわけか」

矛盾しているじゃないかと、フリッツは突っ込んだ。

『その点をつかれると痛いですが』

確かにそうだとエランが恐縮してみせた。当然そんなことは自覚しているのだろう。だが、それを恥じる様子は微塵(みじん)もなかった。本当に彼は何かを生み出すことそのものが好きなのだろう。

「いや、おかげで俺たちレイヴンはその恩恵にあずかれるのだから、俺は否定しないな」

素直にフリッツは言った。ナインボールに対抗できるACパーツが手に入るのならば、これほど心強いことはない。けれども、それはひどく特別な状況であることもまた事実だ。

「だが、新製品と言いつつ改良型しか作ろうとしない他の企業の開発部に比べたら、あんたはある意味ひどく異端な存在だろう」

『ええ、だからたまに苦労しています』
　エランが苦笑した。天才と呼ばれることは、同時に一般人から見れば変人であるということだと彼も自覚しているのだろう。
『先日の襲撃事件も、私たちの研究を奪うか潰すかしようとしたライバル企業の差し金でしょう。よくある話ではありますが、筆頭で狙われ始めたら笑ってばかりもいられません』
「やだなあ、そういうときのために、私たちのようなレイヴンがいるんでしょうが」
　さすがにまじめな顔になるエランに、ビンテージがすかさず自分を売り込んだ。
『ええ、あてにしていますよ』
　信頼を顔に浮かべて、エランがしっかりと言葉を紡いだ。軽く微笑みながら、ビンテージにむけていた視線をゆっくりとフリッツの方へも投げかける。
『ただ、気になる点が一つだけあります。海中から現れたあのMTのことです。今の科学技術では水陸両用のMTを製造するのは困難なはずですし、開発に成功したという噂も聞きません。私は、大破壊以前の失われた技術が用いられているのではないかと推測しています』
「どこかの企業が高性能の新しいMTなりACなりをこれから売り出すということなのか」
　ACの大幅な技術革新があれば、それは従来の戦法の修正をも意味する。レイヴンに

とってその対応の遅れは命取りになりかねない。
『そうとも言い切れないと思います』
　さすがに、エランの言葉も歯切れが悪くなった。
『実戦テストとしては、あの襲撃はあまりに不自然です。どちらかといえば、襲撃計画が先にあって、それに最適のMTが投入されたのでしょう。あるいは、スティンクバグが全滅したのを見て、慌ててイレギュラーで投入してきたかですね。つまり、一見プロトタイプに見えるMTですが、機械的にはほぼ完成していたと見るのが正解でしょう。けれども、あんなMTは今まで誰も見たことがない』
「つまり、どういうことなのよ」
　言いたいことがよくわからないと、ビンテージがイライラしたように大声で訊ねた。
『それだけの技術力を秘匿している組織が存在するということです。自分たちのためだけにその技術を使うことによって、たとえば敵対する組織との格差を生み出そうとしているのではないでしょうか。それならば、とりあえずは納得もいきます。それほど簡単な構図だとすれば、安心もできるのですが。どのみち、私たちの敵であることには違いはないのですから、対策は必要でしょう』
　それがこの電話の真の目的かと、フリッツは納得した。
「つまり、普通の敵だと思っていると、手痛い目に遭うことがありえると言うわけだな」
『その通りです。そうならないためにも、新しい情報が入手できたらお二人には優先し

てお教えします。できる限りの助力もするつもりです。それを覚えておいてほしかったわけです』

「それは、プログテック社としてなのかな」

あえてフリッツは訊ねた。より強く手を結んで対抗していきたいということはよくわかる。問題は、その目的と理由だ。

『結果的にはそういうことになるのでしょうが、実際にはごく個人的なものだと思ってもらっても結構です』

エランの返事は、フリッツが予想したものの一つではあった。だが、もっとも一般的ではなく、かつ彼らしい返事であったと言えるだろう。

『私は変わり者ですから。気が合う人間はなんとなくわかるんです』

目でさらなる理由を求めているフリッツの様子を察して、エランがその理由を述べた。何とも馬鹿げた理由だ。だが、それだけに偽りである可能性は低いだろう。

「ひっどい、どういう意味よ、それって」

遠回しに自分も変わり者だと言われたことに気づいて、ビンテージがモニタ付属のCCDカメラに顔をくっつけた。よく見えないが、アップになった彼女の顔にエランはたじたじとなっていることだろう。微かに引きつったような笑い声だけが聞こえてくる。

ビンテージが変わり者だと言うのはフリッツも諸手をあげて賛成するが、自分もその仲間にされたのではたまったものではない。そう思った瞬間に、フリッツはなぜかおか

しさがこみ上げてきた。

8

プログテック社の研究施設襲撃事件以来、フリッツはレイヴンとして比較的通常の日々を過ごしていった。もちろん、戦闘に明け暮れる日々は一般の人間から見れば十分に異常な日常なのだが、レイヴンにとってはそれが当たり前だった。

サブアリーナでも順当に勝ち星を重ねている。マネージャーのラナにしても、例のメール以来おとなしく指示に従っているフリッツに満足しているらしかった。

『最近、お前のレイヴンとしての腕も評価も上がってきたようだ。上位アリーナに登録されることも夢ではなくなってきたな。だが、上位アリーナは無制限にレイヴンを受け入れる器ではない。レイヴンズ＝ネスト公認のランカーとなり、アリーナ定員枠の一五人に入らなければならないというわけだ。とりあえず今は、定員枠の空きが出るのを待つのだな。なに、運がよければそれほど時間はかからないだろう』

ハスラー・ワンのいる上位アリーナにはいつ参加することができるのかと急くフリッツに、ラナはそう答えた。

ランカーレイヴン。レイヴンズ＝ネストが定めたミッションの成功率による評価点の上位五〇位に位置するレイヴンたちのことだ。ほとんどすべてのレイヴンがレイヴンズ＝

ネストに登録しているため、実質的な全レイヴンのトップに位置する者たちだと言える。そして、その頂点に立つ者が、ナインボールに乗るハスラー・ワンだ。

たとえ敵がはるかに強大だとしても、フリッツは負けるつもりはなかった。それを実感し、他人にも承認させるためにも、彼はサブアリーナで勝ち続けた。

「お疲れー」

ロカーゴスの乗るACトニトルスをアリーナドームで破ってきたフリッツを、控え室にたむろしていたビンテージが迎えた。

「久々に苦戦してたじゃない」

「多少はな。たまには手加減してやらないと、相手にも面子があるだろう」

いじわるっぽく聞かれて、フリッツはそうやり返した。

実際に、一度敵のプラズマキャノン（AWXC65）の直撃を受けて、結構な被害を受けている。アベンジャーの修理には、少し時間がかかるだろう。

「あら、なら私と戦うときにも手加減してくれる？」

「ほう、やっとやる気になったか」

ソファーにドンと腰を下ろしながらフリッツが言った。反動で、隣にすわるビンテージの尻がソファーの上で軽く跳ねた。微かな悲鳴をもらして、ビンテージが乱暴なんだからと軽くフリッツを睨んだ。

スポンサーの同門対決を避ける意味から、ずっと対戦は避けてきた二人だ。だが、他

のレイヴンにはほぼ勝利したフリッツにとっては、ビンテージもいつかは戦ってみたい相手の一人だった。

「やっぱりやめとくわ。そろそろアリーナではあたりたくない相手になってきたからね。勝てる気のしない相手とは戦わない主義なのよ。もっとも、アリーナ以外の場所での戦いなら、相手してやってもいいかも……」

そう答えて、ビンテージが艶っぽく微笑んだ。

「おいおい」

何を言い出すのかと、フリッツが少し慌てて隣にすわるビンテージを見た。

「そしたら、私の本当の名前教えてあげてもいいわよ。特別にね」

んーと唇に指をあてながら、ビンテージが考えるような素振りを見せる。

「それとも……」

言いつつ、ビンテージが腰を捻ってフリッツにのしかかるようにしてにじりよってきた。

「この私じゃ嫌だとでも言いたいわけ」

ぐっと至近距離で睨まれて、フリッツがソファーの上で後ずさったとき、ふいにテーブルの上から電子音が響いた。

「んもう、面白いとこだったのに」

一言文句を言いながら、ビンテージが上体を捻ってテーブルの上に置いていた自分の

携帯端末に手をのばした。
『緊急事態です』
受信ボタンを押したとたん、男の声が叫んだ。フリッツも聞き覚えのある声だ。以前プログテック社の使いとして、フリッツに直接依頼を持ってきた男のものに間違いない。
『弊社の開発中の機器が強奪されました』
「それって、まさか……」
心当たりがあるらしく、ビンテージの顔色が少し変わる。
『ええ、開発中のＷＲＲ‐10です。一刻も早く追撃部隊を出したいという本社の意向です』
「詳細は？」
きびきびとビンテージが確認した。
『ほとんどわかっていません。犯行グループの正体も不明です。現在、逃走経路を割り出し中というところです』
「わかった。すぐそちらへむかうわ」
答えるなり、ビンテージがさっさと端末を切った。
「聞いての通りよ、手伝ってくれる？」
単刀直入にフリッツに訊ねる。
「どうでもいいが、いいかげん下りてくれないか」



未だに膝の上にまたがった格好のビンテージに、困ったようにフリッツは言った。
「私用の新型武器が持ってかれたのよ。手伝ってくれるの、くれないの」
フリッツの言葉を無視して、ビンテージが迫った。
「それは正式な依頼か。だとしたら、マネージャーを通す必要がある。と言うよりも、それ以前の問題として、俺のACはまだ修理中だ。後小一時間は出撃できない」
フリッツの言葉に、ビンテージが額に指をあてて冷静に考え込んだ。
「いいわ。もし手に負えないようなら呼ぶから。そのときは手伝ってくれる？」
「もちろんだ」
フリッツはうなずいた。やっとビンテージが彼の上から身体をどける。
「それじゃ、後でね」
絶対にきてくれることを確信しているような言葉を残して、ビンテージが控え室から出ていった。
残されたフリッツは、のんびりと体を休めて待った。慌てて出ていったからといって、敵の居場所がわからないままでは無駄足に終わる可能性が多い。賢く対処するつもりなら、現場から足取りをたどる追撃隊と、その情報によって動く別働隊に分かれて、挟み撃ちにした方がいい。ビンテージが動くなら、フリッツは待ちに徹した方が得策だ。敵の居場所が判明する頃にはアベンジャーの修理も終わるだろうし、プログテック社からマネージャーへの正式依頼もあることだろう。

フリッツの予想は、ほどなく現実となった。ガレージからアベンジャーの修理が完了したと連絡があった直後、わざとらしくそれを待っていたかのようにラナからの連絡が入った。
『プログテック社から緊急依頼が入った。同社の機密物資が強奪されたそうだ。犯行グループの正体は現在調査中だが、ランカーACのヴュルフェルと思われる機体が目撃されている。強奪犯の足取りが最後に確認されたのはフォートガーデン周辺だ。送った地図を参照しろ』
ラナにうながされて、フリッツは送られてきたデータリンクを参照した。
『フォートガーデンの南部に、放棄された古い坑道があるはずだ。いくつかの縦穴と資源貯蔵ブロックから成り立ち、最深部に巨大な洞窟がある。敵グループの潜伏場所としては最適だろう。廃坑内部を探索して、物資を発見次第回収しろ。途中のブロックの可能性もあるが、おそらくは最深部にいるだろう。敵にとっても、そこがもっとも守りやすいからな』
「ずいぶんと手回しがいいな」
マップデータを見ながらフリッツは言った。
『無駄口を叩く前に行動しろ。他の者に出し抜かれても私は関知しないぞ』
「いや、情報が多いのはありがたいことだ。すぐに出撃する」
ラナに急かされて、フリッツはガレージにむかって急いだ。

アベンジャーの装備も、ここにきてかなり充実してきている。脚まわりはLN－1001Bに装甲強化し、対空ミサイル（WM-X201）、ハンディショットガン（WG-HG1）、広域レーダー（RZ-A1）という装備に強化していた。FCSもより高速タイプ（QX-AF）になり、高速化チップ（SP-AXL）と相まって効果をあげている。実体弾兵器用（SP-S/SCR）とエネルギー兵器用（SP-E/SCR）の防御スクリーンも心強い。たとえ相手がランカーレイヴンであるとしても、負ける予感などは微塵も感じていなかった。

フリッツはAC単体で連絡道に入ると、ブースターを利用して地下トンネルの中を駆け抜けていった。指定された廃坑はさほど遠い場所にあるわけではない。シティ間の連絡地下道をいくつか抜けていけばたいした時間もかからずに辿り着けるはずだ。

いくつかの分岐点を指示通りに過ぎ、ごく最近破壊されたらしい進入禁止のバリケードを突破してフリッツは目的の廃坑入り口に辿り着いた。

『敵戦力の詳細は不明だ。注意しろ』

巨大な縦穴を前にしたフリッツに、ラナが注意を呼びかけた。

「了解」

短く答えると、フリッツは廃坑内部へとダイブした。ブースターを断続的に使って落下速度を調節しながら、最深部へとむかって降下していく。何層にもならんだ貯蔵庫を通り過ぎていくとき、一瞬赤い光がアベンジャーの機体をすり抜けていった。とたんに、レーダーに敵影が現れる。侵入者探知用のセンサーに引っかかったらしい。

縦穴の底に着地したフリッツは、最下層の横穴から飛び出してきた敵にハンディショ

ットガンの照準（サイト）を定めた。フロートスーツと呼ばれる戦闘強化服（パワードスーツ）だ。両肩に高機動スラスターバーニアを装備し、小型のハンドガンと拡散弾を使用したスラッグガンで武装している。だが、いかんせん装甲も火力もACとは比べるべくもない。

慌てて飛び出してきたという感は否めない敵を落ち着いて撃破すると、フリッツは坑道を奥に進んでいった。小規模な敵の抵抗を退け、いくつかの縦穴と横穴を介して最深部へと迫った。

『その先が終点だ。相手がランカーレイヴンだということを忘れるな』

ラナの言葉が終わるのを待たずに、フリッツは洞窟内部に飛び込んでいった。待ちかまえていた二機のフロートスーツが、歓迎の砲火を浴びせてくる。

『ランカーACヴュルフェルを確認。奴の背後にある坑道に物資があるのだろう。素早く動き回って撹乱しろ。奴の武装は非常に強力だ、間違っても被弾はするな』

聞こえているのだろうがと続けるラナの言葉を聞き流しながら、フリッツはフロートスーツの十字砲火を避けるために敵との間合いを開いた。

「くそ、後少しで引き渡しの時間だというのに。やってきたのは、依頼者（クライアント）ではなくて、敵レイヴンか」

プリーマグルックが、ヴュルフェルのコックピットの中で渋い顔をした。

「たいした仕事じゃない。ここは退くか攻めるか……」

余裕なのか敵を見くびっているのか、大胆にも戦闘中にプリーマグルックはコックピットの中で金貨（コイン）を放り投げた。落ちてきた金貨を素早く右手で受け止めると、左手の甲に右手を被せて載せる。何かを決定するときの彼の癖だ。

「さて……」

右手を開く。金貨の女神が微笑んでいた。

「攻めるか！」

叫ぶと同時に、プリーマグルックはヴュルフェルのデュアルキャノン（AWDC/2）を撃ち放った。

「何だと!?」

フロートスーツをミサイルで仕留めたフリッツは、突然迫ってきた火球に慌てて回避運動に入った。ブースターが咆哮をあげ、アベンジャーの機体が高速で右方向に移動する。直後、先ほどまでアベンジャーがいた場所が凄まじい爆発につつまれた。爆風で、回避運動に入っていたはずの機体がバランスを崩して激しくゆれる。

何とかブースターで機体を持ち上げて立て直したフリッツの目に映ったのは、ヴュルフェルのミサイルランチャー（WMAT）から間髪入れず放たれた大型ミサイルの迫りくる姿だった。避ける余裕はなかった。フリッツは、ほとんど本能的に機体をミサイルの方にむけた。機体中央に備えつけられた内装火器である対空機銃（オートキャノン）が、自動迎撃プログラムに従って攻撃を放つ。間一髪、空中でミサイルが爆発した。広がる火球は、先ほどのデュアルキャ

ノンに匹敵するほどの凄まじさだ。フリッツは、ラナの言った言葉の本当の意味を嫌というほど身体に思い知らされた。

だが、一方的にやられているわけにはいかない。攻撃が強力な分、大型の弾薬はリロードに時間がかかるはずだ。そのすきに肉薄し、アームキャノンを持つACの弱点である白兵戦に持ち込むしかない。

フリッツはブースターを全開にすると、一気に敵にむかって突っ込んでいった。満を持して待ちかまえるヴュルフェルが再びミサイルを放つ。フリッツは賭に出た。アベンジャーの迎撃性能を信じて、回避運動をとらずにそのまま突っ込む。機銃がミサイルを撃ち落とした。フリッツの運が勝った。広がる爆炎を隠れ蓑にすると、フリッツはアベンジャーをジャンプさせてヴュルフェルに迫った。対ワンダフルバレル戦のときのように、頭上から一気に敵を圧倒するつもりだ。

爆炎を抜けると、フリッツは敵にむかって空中からブレードを振り下ろそうとした。だが、モニタのどこにも敵の姿は映っていなかった。レーダーの水色の敵影は○方向にある。

「真上だと!!」

その言葉の終わらないうちに、激しい衝撃がコックピットを襲った。フリッツのさらに上をとっていたプリーマグルックが、ヴュルフェルの機体をアベンジャーにぶつけてきたのだ。必死にブースターで機体を支えようとするアベンジャーを、押し潰さんとヴ

ユルフェルが機体重量をかけてくる。さらに、敵の底部ブースターがバーナーとなってアベンジャーの機体を焼いた。

「これが、ランカーなのか……」

敵の圧倒的な強さに恐怖しながらも、フリッツは闘争心だけは失わないように自分自身を叱咤した。

加熱に耐えきれず、フリッツが頼りにしていたブレードが爆発を起こして吹き飛んだ。だが、フリッツはその反動を利用すると、ブースターのパワーも総動員して墜落する寸前に敵の下から辛くも逃げ出した。

だからといって、敵がそのままフリッツを見逃してくれるはずもない。間をおかずに、デュアルキャノンの攻撃がフリッツに襲いかかってきた。ブースターで機体スピードをランダムに変化させながら、洞窟の内壁沿いに飛行しながら全力で逃げる。迫りくる死のような着弾の爆発が、岩壁を吹き飛ばしながらフリッツの後を追ってきた。衝撃で、天井にいくつか下がっているつらら状の突起が今にも崩れ落ちてきそうだ。厚い岩盤を砕いて激震させ、洞窟そのものを破壊しようというのだろうか。

『どうした、逃げ回るだけか』

金貨をコンソールの上に置いたプリーマグルックが、外部スピーカーを使って挑発してきた。この状態に持ち込んだのなら、後は時間が帰趨（きすう）を決める。

「くそ、逃げてばかりでは埒が……」

反撃のチャンスはないのかとフリッツが焦燥感にかられているとき、突然警告音がコックピット内に響き渡った。ブースターの過剰使用によるジェネレーターのオーバーヒートだ。安全装置（セイフティーデバイス）が働いて、コンデンサによる出力が回復するまでブースターやエネルギー兵器が使用不可能になる。

「まずい！」

思わずフリッツは叫んだ。このままでは着地した瞬間を狙われる。なんとしても、その瞬間の時間を稼がなければならない。

みるみる高度の下がる機体を回頭させると、フリッツはミサイルを敵に放とうとした。トリガーを引く寸前、ノイズとともにロックオンが外れた。ＦＣＳが、ミサイルの発射を中断する。

「ジャマー（SP JAM）か！」

叫ぶと同時に、アベンジャーが着地した。危惧した通り、狙いすました砲弾が真一文字に飛んでくる。避ける暇などありはしない。

凄まじい爆発がアベンジャーの機体を打ち据えた。直撃だ。衝撃で機体が、投げ飛ばされた人形のように転がった。シートベルトが引きちぎれんばかりに身体がコックピットの中で振り回され、フリッツは食いしばった歯の間から低い呻き声をもらした。

かろうじてアベンジャーは持ちこたえてくれた。とはいえ、胴体の機銃は砲身が潰れ、肩のミサイルランチャーも衝撃で吹き飛ばされたというひどい状態だ。使用可能な武器

は、残弾の少なくなったハンディショットガンのみだった。
　状況は違うにしても、奇しくもプリーマグルックと同じ選択をフリッツは迫られた。
「どうする、戦うか、逃げ出すか……」
　逃げずに無理に戦って死んでは、敵討ちをすることはできなくなる。だが、ここで勝てないようなら、ランカーのトップに立つハスラー・ワンを倒すこともまた夢だ。
　敵は、なかば瓦礫に埋もれて動かなくなったアベンジャーの様子を静観しているようだ。さすがに主武装のデュアルキャノンは撃ち尽くしたらしいが、まだミサイルが二発と補助武装であるパルスレーザーキャノン（WCXP4000）が健在だ。少しでも動けば、すぐに次の攻撃がやってくるだろう。逃げ出すことさえ、至難の業だろう。
「決めた」
　プリーマグルックのように金貨で決めるようなことはせず、フリッツは自分の意志で自分の行動を決定した。
　アベンジャーの出力が復活するまで冷静に時を待つ。勝負は、スピードが鍵を握るはずだ。唯一残された戦法は、ブースターの最大推力によって一気に接近し、〇距離から敵のコックピットにハンディショットガンの攻撃を集中して浴びせるしかない。
　そんなフリッツの思惑を見透かしたのだろうか、ヴュルフェルがミサイルランチャーをアベンジャーにむけた。一気に止めをさしておくつもりのようだ。
　敵がミサイルを発射した瞬間、フリッツはブースターを全開にして飛び出した。何と

かこのミサイルをやり過ごせば、敵が次の攻撃を放つまでに十分接近できるはずだ。
　フリッツは洞窟の中空に飛び上がると、全速で敵を目指した。だが、敵ミサイルの追尾性能は、彼の予想をはるかに上回るものだった。アベンジャーの倒れていた地点の目前で機首をあげると、信じられないような旋回半径で反転したのだ。
「こうなったら、あのミサイルを奴にぶつけてやる」
　追尾してくるミサイルを逆に敵にぶつけようとフリッツは考えた。
　だが、そんな甘い考えは許さないとばかりに、下からヴュルフェルがパルスレーザーを撃ってくる。逃がさずに、確実にミサイルの餌食にさせるつもりだ。最低でも、またオーバーヒートして落ちてきたところにミサイルで止めをさす気なのだろう。
「なら、こういうのはどうだ！」
　後ろと下をふさがれたフリッツは、ヴュルフェルの真上にある天井の突起目指して急上昇した。ミサイルがそれを追う。突起に肩をこすりつけるようにして、アベンジャーがその裏側に回り込んだ。ミサイルはそこまでの追尾はできず、突起の基部に命中して爆発した。
　衝撃とともに、天井の岩盤の一部が砕けて下に降り注いだ。アベンジャーが身を隠した巨大な突起そのものも、天井から抜け落ちるようにして落下を始める。
　岩に潰されてはたまらないと、ヴュルフェルが慌てて移動しようとした。その機体を、激しい衝撃がその場に釘づけにする。

「馬鹿な、一緒に心中するつもりか!!」
　プリーマグルックが叫んだ。落ちてくる岩塊に機体を押されて貼りつくようなかたちになったアベンジャーが、それに構わずハンディショットガンを頭上から連射している。このままでは二人とも岩の下敷きだ。心中覚悟とも思える攻撃に、プリーマグルックが恐怖する。
「俺は逃げない！」
　フリッツはコックピットの中で大声で叫んでいた。
　相討ちなど冗談じゃないと、プリーマグルックが全速で離脱をはかる。だが、上からの攻撃がヴュルフェルの機体を被弾の反動でその場に押さえつけた。コックピットをゆるがす振動で、金貨が下に落ちて裏返ったことは、誰にも気づかれなかった。
　岩塊が逃げ遅れたヴュルフェルを直撃する直前、フリッツはブースターを全開にして脱出をはかった。ありったけの推力を岩塊に叩きつける。押さえつける岩塊に装甲表面を削り落とすようにして機体が動いた。残っていた肩のレーダー基部が削げ落ちる。アベンジャーが岩塊の下から抜け出した。直後にヴュルフェルが岩塊に押し潰され、残っていたミサイルが誘爆を起こした。爆風と飛び散った岩塊が背後からアベンジャーに襲いかかる。激しい衝撃が何度もフリッツを襲った。頭から突っ込むようにして墜落したフリッツは、その衝撃で一瞬気を失った。
　数秒後、フリッツは機体維持限界の警告シグナルで目を覚ました。まだかろうじて機

能している頭部レーダーに、敵影が映る。即座に機体チェックするが、脚の関節がうまく機能せず、右腕は跡形もない。
「万事休すか……」
　降下してくるフロートスーツを見たフリッツが機体を捨てて脱出することを決意したとき、突然敵が爆発した。新たなACが洞窟内に降下してくる。
『ずいぶん派手にやったじゃない、生きてる？』
　着地したオレンジ・ペコから、ビンテージの明るい声が洞窟内に響いた。
「味方か」
　フリッツは、初めてほっと胸をなで下ろした。
『ああ、生きてる。物資は、あの横穴の奥だ。くれてやるから、回収部隊を呼んでくれ』
『くれてやるもなにも、もともとあれは私の物よ』
　即座に訂正すると、ビンテージはさっさと物資を確認しにいった。まだ敵がくるかもしれないのに、フリッツにはお構いなしだ。
『やれやれ』
　なぜか奇妙な安堵感を感じて、フリッツは口元をほころばせた。
『先を越されたのは悔しいけど、私は実質的な命の恩人なんですからね』
　やがて戻ってきたビンテージが、自慢げにフリッツに言うと頭部センサーアイで頭上を見上げた。プログテック社のマークをつけたMT部隊が降下してきたのだった。

9

『おめでとうございます。あなたのアリーナへの昇格が認められました。本来なら欠員が出るのを長い間待たなくてはならないのですが、今回は非常にタイミングよく空きができたようです。今後はしばらくアリーナでの活動に専念してくだされば幸いです』
プログテック社からのメールが届いたのは、ヴュルフェルを倒した数日後のことだった。
ラナの言った通り、たいして時間はかからなかったわけである。それに、プログテック社の処理も早かった。まるで無駄がなかったと言ってもいいだろう。
それを手際がよかったと誉めるべきなのか、よすぎると疑うべきなのか。おそらく欠員とは、プリーマグルックのことなのだろう。
レイヴンとして上に登るには、同じレイヴンを踏み台にしなければならない。だとすれば、その頂点に立つハスラー・ワンは、いったい何人のレイヴンを生け贄に捧げてきたのだ。その同じ道をたどらなければ奴に手が届かないとするならば、いつかはフリッツ自身もハスラー・ワンと同じ立場に立たないとは言い切れない。悲しいレイヴンの連鎖だと言ってしまえばそれまでだが、今はそれに目をつむるしかなかった。いつかハスラー・ワンを倒すその日までは……。

ENCOUNTER 3 『ナインボール』

1

シャドゥフェードのブレードがアベンジャーの鼻先の空間を斬り裂いた。拡散するプラズマに装甲表面が焼けてチリチリと音を立てる。敵の切っ先を見切って後ろに下がったステップから、一転してフリッツはアベンジャーを前に踏み込ませた。ブレードを振り終わって腕が開いた敵の懐へ飛び込み、ブレードを一閃させる。そして、斬り返した。

胸と脇腹を斬られ、敵が後ろへとよろめく。さらに一歩前に出て間合いを詰めると同時に、フリッツはアベンジャーの左腕を前に突き出した。センサーアイをブレードで突き抜かれたシャドゥフェードの頭部（HD ONE）が爆発して吹き飛ぶ。

勝負はついた。

「凄いじゃない。アリーナ一〇位にランクインおめでとう」

控え室に戻ってきたフリッツを出迎えたのは、ビンテージのお祝いの言葉だった。

先ほどシャドゥマスターの乗るシャドゥフェードを倒したことにより、アリーナでのフリッツのランクは第一〇位になったのだ。アリーナに登録されてからわずか五戦目。異例の早さだった。

「なんか、ここにきて急に強くなったじゃない」

好奇心にかられて、ビンテージが訊ねてくる。

「俺だって、少しは努力している」
ランカーとして正式にネストに登録されたのだ。以前と違わなくては自分自身でも困るとフリッツは心の中でつけ加えた。
「夜中に特訓してるとか？」
まさかねという声音で、ビンテージが聞く。
「そんなようなものだ」
フリッツはそっけなく答えた。実際、戦術の研究とその実践は連日行っている。戦いは、ACに乗って敵と対峙しているときばかりではないのだ。
「ねえ、今度一緒にエランのところに遊びにいかない？」
ふいにビンテージが切り出した。
「遊びだったら、お前一人でいけばいいじゃないか。俺はそんなに暇じゃない」
少しムッとしたようにフリッツは言い返した。
「だって、エランがしきりに連れてこいって言うのよ。たまにはいいじゃない」
ビンテージが食い下がる。よほどエランに強く頼まれたのだろう。
「俺は遊びでレイヴンをやっているわけじゃない。プログテック社だとしても、依頼以外では不用意に関わらない主義だ」
「会社は多分関係ないわよ。エラン個人があなたに興味を持ってるみたいだから。私から見れば、二人とも似た者同士みたいだし」

「一緒にしないでくれ」
フリッツは迷惑そうに顔をしかめた。どうも、ビンテージはエランとフリッツを一緒に扱おうとしているようだ。友達としてなのか、利用できる相手としてなのか、あるいは単に二人を両肩に捕まえて、両手に花を楽しみたいだけなのかもしれない。
「まったく物好きな男だ。おおかた新型兵器の実験台にでも使うつもりなのだろう。お前のようにモルモットにされるのはごめんだな」
相変わらずプログテック社の研究施設にこもりきりの男のことを思って、フリッツは皮肉混じりに苦笑した。何をしているかはわからないが、どうせ新兵器の開発に没頭しているというのが正解だろう。
「何ですって。私はモルモットじゃないわよ」
さすがに気を悪くしたビンテージが、大声で怒鳴り返した。
「まったく、たまには息抜きさせてあげようと思って誘ったのに。そんなにピリピリしてると、いつか大怪我するわよ。敵討ちなんて……。ナインボールに返り討ちにされるのが落ちだわ」
思わず、ビンテージが本音をもらした。その忠告は、初めて会ったときにもされたものだ。
「やってみなければわかるものか」
フリッツは言い返した。彼とて、レイヴンに成り立ての頃とは比べものにならないほ

ど成長しているはずだ。

「わかるわよ。もう無謀なことはやめちゃいなさいよ」

　ビンテージが決めつけた。それはフリッツを心配している心から出ている言葉なのだろうか、それとも、彼をまだ見くびっている心から出ている言葉なのだろうか。フリッツには釈然としなかった。

「やめるわけにはいかない……」

　後戻りはできない。立ち止まることも。フリッツは、このまま今の生活――レイヴンとしての自分に甘んじるつもりはなかった。だから、復讐はやめない、あきらめない。その心が、このつぶやきとなった。

「このお、わからずや！」

　自分の言葉に耳をかたむけようとしないフリッツに、ビンテージがヒステリック気味になって叫んだ。

　プログテック社の人間がやってきたのは、ちょうどそんなときだった。扉をドンドンと叩きながら、声をあげる。フリッツはビンテージから遠ざかるように扉を開けた。意気込んで言葉を発しようとしたプログテック社の男が、フリッツの背後で柳眉を逆立てているビンテージの顔を見て、びくっと一歩後ろに下がった。

「何の用なの！」

　ビンテージの怒鳴り声に、男がしどろもどろになる。

「構うな、続けろ」

　フリッツは気にするなと顎でビンテージをさすと、男をうながした。

「非常事態です。シティ中心部にある我が社の研究施設が正体不明の一団に襲撃を受けています。敵はいくつかの小隊に分かれ、それぞれ別の経路を侵攻していますが、最終的なターゲットは同じだと思われます。開発主任エランのいる試験場です」

「何ですって！」

　後ろで不満げに聞いていたビンテージが、慌ててフリッツの後ろにかけつけてきた。

「何で早く言わないのよ」

「ですから……」

「いいから、現状を説明しろ」

　ビンテージの勢いに口ごもる男に、フリッツは先を続けるように要求した。

「以前当社の海上施設を襲撃した部隊との関連も考えられますが、現在詳細は不明です。いずれにせよ、一刻を争う事態に変わりはありません。試験場へと通じるゲートは施設の第七ブロックにあります。先回りしてゲートを死守してください」

　気を取り直すと、男は用件を伝えた。

「いこう」

　フリッツの背中を押すようにしてビンテージが言った。迷うことはないという態度だ。

だが、フリッツは、すぐにはその場を動かなかった。

「待て、俺のマネージャーには連絡してあるのか?」

いつぞやのことを思い出して、フリッツはプログテック社の男に訊ねた。いらぬトラブルを招き込むのは願い下げだ。

「現在連絡中ですが、状況から考えて事後承諾はやむを得ないと考えています」

「それではだめだ」

フリッツは首を横に振った。これでは、あのときとまったく同じ状況ではないか。このまま出撃すれば重大な契約違反だ。またラナの機嫌を損ねてしまう。

「何よ、あなたは人の許可がなければ自分の行動も決められないの。なっさけない。エランが危ないのよ、助けたくはないの。私はいくわよ、もちろん、自分の意志で」

フリッツと男のやりとりを聞いていたビンテージが、口をはさんできた。彼女としては、フリッツが躊躇する理由が、ひどく気に入らないらしい。

「お前は首に紐がついていないからな」

皆が同じ立場だと思われては迷惑だとフリッツはビンテージに言い返した。

「何よ、そんな紐、レイヴンだったら自分で食いちぎりなさい。あなたならできるはずよ」

「言ってくれる。気楽だな」

レイヴンならではのビンテージの言葉に、フリッツは苦笑した。物事をそう簡単に割り切れられればどれほど楽なことか。

「そうよ、あなた自身のことですもの。自分が決めるなら簡単なことだわ。あなたは誰のためにレイヴンをやってるのよ」

確かに彼女の言う通り、彼がレイヴンでいるのは自分自身の復讐のためだ。決してラナのためではない。レイヴンは手段であり目的ではないはずだ。

「わかった。彼を見殺しにすれば、プログテック社も俺を支援してくれないだろうからな。せっかく勝ち取ったアリーナへの参加権だ、無駄にする気はないさ」

フリッツは観念すると、自らの行動を決定した。

「関連データを俺たちの機体に転送しておけ。いくぞ、急げビンテージ」

プログテック社の男に言い添えると、フリッツは走り出してビンテージを手招きした。

「そうこなくちゃ。私の強さを見せてあげるわ」

2

『敵は第七ブロックに戦力を集中してきています。幸い試験場へと続くゲートは頑強なためまだ破られてはいません。そのため、敵の一部隊がゲートコントロールシステム破壊のために管理センターにむかっています。ここが破壊されてしまうと、ゲートは端末の操作で開かれてしまいます』

施設内部に突入した二人に、プログテック社のオペレータは現状を伝えてきた。

『なら、私はコントロールへ』

言うなり、ビンテージが通路を曲がって走り去った。

『ゲートは俺が守る。手早く片づけろよ』

オレンジ・ペコの後ろ姿にむかって言うと、フリッツは奥のリフトに飛び乗った。下層に下りると、敵のMTとプログテック社のMTが奥へと続く通路前のホールで乱戦を繰り広げている。施設内の数カ所で、このような戦闘が繰り広げられているのだろう。

フリッツはその中に飛び込むと、味方の識別信号を出していないMTを容赦なくハンディショットガンで破壊した。小型の高機動型MTワスプだ。

『ここはいい。ゲートの方を頼む』

汎用型MTスカーリーバーに乗ったプログテック社のパイロットが、ワスプをビームライフルで狙撃しながらフリッツに言った。

『了解した』

フリッツは答えると、ブースターを全開にして火線の飛び交う中を疾走していった。

そうはさせじと飛び出してくるワスプを、ブレードの一閃で斬り崩す。そのまま敵を無視して通路に飛び込んでいく。背後で、先ほどのワスプが味方のビームに止めをさされて爆発する光が見えた。

通路を抜けた先はトランスファーホールだった。四方に、試験場へと続くゲートがならんでいる。

『第一ゲートが敵に取りつかれた。撃破してくれ』

銃声混じりに、指示が入ってくる。レーダーで敵影を確認すると、フリッツはゲートにむかった。天井を支える巨大な柱が林立し、その間を縫うようにして進んでいく。途中には、破壊されたスティンクバグの残骸がいくつか転がっていた。おそらくは破壊されたプログテック社の守備隊のものだろう。

爆発が起こる。ワスプが放ったミサイルがゲートを直撃したのだ。だが、分厚い装甲板は、多少の攻撃ではびくともしていなかった。この強度なら、敵を倒すだけの時間は十分に持ちこたえてくれそうだ。もっとも、ゲートが開いてしまえば敵の侵入を防ぐのは非常に困難になるが。

フリッツは、射程に入ったワスプにむかってハンディショットガンを放った。被弾した敵が、慌てて上空へ飛び上がる。フリッツは素早く武装を切り替えると、後退して敵にミサイル（WM-X201）を放った。四方に分かれたミサイルが、つつみ込むようにして敵に命中する。一気に突進（チャージ）をかけると、フリッツは落下してきたワスプをブレードで両断した。上下に分断された敵の機体が、それぞれ別々に時間差をもって爆発する。

残るワスプが、背後からアベンジャーにマシンガンを浴びせてきた。フリッツは素早く柱の陰に身を隠した。そのまま柱をなでるように移動して、敵の背後に回り込む。急加速で上空から放たれたミサイルをやり過ごして敵の懐に飛び込むと、高度をあわせて

空中で射撃戦を演じた。至近距離から散弾の全弾をまともにくらった敵が、粉々に砕け散る。

　当面の敵は排除したと思ったのもつかの間、レーダーに新たな敵影が映る。別のルートを突破してきた敵部隊が侵入してきたのだろう。フリッツはすぐさま迎撃にむかった。

プログテック社の守備隊はよくやっているようだ。敵の侵入は散発的で、戦力は逐次投入のかたちになっていた。これならば、各個撃破はランカーレイヴンとなったフリッツには簡単なことだった。

　敵の第三波を撃退したとき、突然四番ゲートが開きだした。

「ビンテージめ、しくじったのか!?」

　フリッツは非常用ゲート開閉装置を操作しているワスプを、装置ごと空中からミサイルで破壊した。ゲートが半開きのまま止まる。

「まずいな。敵は後どれだけ残っているんだ……」

　レーダーで索敵するフリッツの目に、急接近してくる敵機を表す赤い輝点が映った。即座にそちらに回頭して身構える。

　見覚えのあるACが、速いスピードで接近してくる。いや、そのACは、忘れようとしても忘れられない存在だ。

『ナインボール!!』

　フリッツは、外部スピーカーをオンにして叫んだ。

　怪訝そうに、ナインボールの機体が立ち止まる。戦闘中に止まるのは無謀な行為だが、あたかも王者の余裕のような態度で、ナインボールはアベンジャーと対峙した。

『なぜここにいる。イレギュラーだ』

　ハスラー・ワンがつぶやいた。驚いていると言うよりは、不満そうな口調だ。

『貴様を倒すためだ!!』

　叫ぶなり、フリッツは猛然と敵に突っ込んでいった。奴と直接出会うのはこれが三度目だ。長い間待ち続けたこの瞬間……。フリッツは一気にここで勝負を決めるつもりだった。すでに、プログテック社の依頼などどうでもいいことだ。

　速攻で放たれた散弾を、ナインボールが真横に急加速して回避する。そのままの体勢で肩のキャノン（WC-GM230）が起き上がり、砲身がアベンジャーの方をむいた。

「馬鹿な……」

　フリッツは、二脚型（タイプ）のACがそんな体勢でショルダーキャノンを撃てるわけがないと叫びかけた。だが、ハスラー・ワンはその考えを力でねじ伏せた。ナインボールのショルダーキャノンから放たれた砲弾が、アベンジャーを直撃する。激しい爆発につつまれ、フリッツはたまらず柱の陰に逃げ込んだ。脳裏にヴュルフェルと戦ったときの恐怖が蘇る。

「逃げてどうする。これは、俺が望んでいた戦いだろうが！」

　フリッツは自分を叱咤すると、冷静に状況を見つめた。幸いなことに、こう障害物が

多い空間では、遠距離からの攻撃はミサイル・ビーム兵器ともに射線は通りにくい。接近戦となれば、ハンディショットガンは十分に役に立ってくれるだろう。後は、ブレードの腕前がどちらが上かということだ。

フリッツは巧みに柱を使いながらナインボールに近づいた。敵も本来の目的は後回しにして、当面の障害である彼に挑んできてくれる。

一本の柱をはさんで、至近距離で二機のACが対峙する。

「出るか、迎え撃つか……」

フリッツが躊躇（ちゅうちょ）した瞬間、ナインボールがまるで瞬間移動したかのように突然フリッツの眼前に現れた。右肩に振り上げた左腕から、青白いブレードがのびる。本能的にフリッツはトリガーを引いた。撃ち出された散弾がナインボールの機体を弾き飛ばす。間合いが変わり、紙一重で敵のブレードが何もない空間を薙いだ。斬り裂かれた大気が熱風となってアベンジャーの機体に吹きつける。

ほとんど運だと言っていい一瞬の攻防だった。だが、大切なのはそれを単なる偶然で終わらせるかチャンスとするかだ。

フリッツは、ハンディショットガン（WGXP2000）を連射した。散弾の一部に被弾しながら、ナインボールもパルスレーザーガンで応戦してくる。その反撃に、アベンジャーの機体が幾度となく焼かれた。あっという間に距離が開いていく。あまり離れると散弾は命中はしても攻撃力が落ちてしまう。フリッツは一気にブースターダッシュして間合いを詰め直す。

至近弾を受けて、ナインボールが機体の体勢を崩しかけた。

「いける！」

フリッツは勝利を確信して、突っ込んだ。優勢なうちに勝負を決めようと焦ったのかもしれない。ナインボールは即座に体勢を立て直すと、アベンジャーの突進をするりとかわすように真横から後ろへと回り込んだ。フリッツがしまったと思う間もなく、強烈なブレードの一撃がアベンジャーのブースターノズルを破壊した。反動で前方につんのめりながらも、フリッツは機体を捻って後方にむけて攻撃を続けた。やられたとしても、そのままにはしておかない。フリッツの執念は、ナインボールにも確実に手傷を負わせていく。だが、まだまだナインボールにとっては軽傷ばかりだ。機能低下を起こすほどの損傷は受けてはいない。対するアベンジャーの機体の損傷は深刻だった。今にも、警告シグナルが鳴り響きそうだ。

ナインボールは間合いを開くと、ショルダーキャノンを展開した。いいかげんに止めをさすつもりのようだ。

フリッツは軋む機体に鞭打つと柱の陰に逃げ込もうとした。だが、ナインボールの攻撃はそれで逃げ切れるほど甘くはなかった。アベンジャーが隠れた柱をかすめるようにして敵弾が炸裂する。爆風で、アベンジャーは柱の陰から吹き飛ばされた。床に倒れたまま、全身をナインボールの視界にさらす。

ショルダーキャノンの砲身が、ピタリとアベンジャーにむけられた。

「動け、この!!」
　フリッツは、いうことを聞かないアベンジャーの機体に大声をあげた。
　もはやこれまでかと思ったとき、ナインボールの前に何かが流れてきた。構わずナインボールがショルダーキャノンを発射する。空中で大爆発が起こった。発射された弾頭に、近接信管型の浮遊機雷が反応して爆発を起こしたのだ。
『フリッツ、大丈夫!?』
　間一髪、ゲートの陰から浮遊機雷(WRR-10)を放ったビンテージが通信を入れてきた。
　助かったと思う間もなく、フリッツは倒れたままの体勢で散弾銃(ハンディショットガン)を撃った。散弾を避けるように、ナインボールが後退していく。
『大きすぎる……。修正が必要だ……』
　そんなつぶやきとともに、ナインボールは外へと続く通路に姿を消した。
『待て、逃げるつもりか!!』
　フリッツは叫ぶなり、アベンジャーの機体を引き起こしてナインボールを追おうとした。そのとたん、バランスを崩したアベンジャーが擱坐した。無理な衝撃を何度も受けた右膝から、白煙がもうもうと立ち上っている。
『敵は撤退しました。これ以上の無理はしないでください』
　戦闘の終結を告げるメッセージが、エラン本人からフリッツたちに入った。
『よかった、あなたも無事だったのね。敵は撃退したけどコントロールセンターもやら

れちゃったんで心配してたんだ』
　エランの声を聞いて、ビンテージが心底嬉しそうに言った。
『あなたには生きていてもらわないと、私も困るんだから』
『ええ、私も、作っていた物も無事です。安心してください』
　少し理由が不純ではないかという推測を笑顔で隠しながら、エランが答えた。
『ナインボールはどうした!』
　通信機にむかって、フリッツは怒鳴った。今の彼にとって、大切なのはエランの無事を確認することではない。
『すでに施設の外に脱出しました。追跡は不可能です』
　エランの答えは事務的なものだった。彼としても、フリッツに追跡をあきらめさせるためにそう言うしかなかったのだろう。
『くそお!』
　フリッツは、両の拳でコンソールを思いっきり叩いた。
『今は、あきらめなさいって。ナインボールと戦って無事だっただけでもめっけもんなんだから』
　オレンジ・ペコでゆっくりとフリッツに歩みよりながら、ビンテージが言った。なぐさめているつもりなのだろうが、フリッツにとってはなぐさめの言葉にもなりはしない。
「この機体では、ナインボールには勝てないと言うのか……」

両の拳を握りしめたまま、フリッツはつぶやいた。

『二人とも、よければ下に降りてきてくれますか。見せたい物があるんです』

フリッツの言葉が聞こえたのだろうか、エランが呼びかけてきた。

『そんな暇は俺には……』

ないとフリッツは言いかけた。すかさず、ビンテージが横やりを入れてくる。

『どのみちあなたのＡＣは動かないんだから、そこから降りるしかないじゃない。だったら、少しエランのために時間を割いてもいいんじゃないの？』

『そうしてくれると助かります。それに、これはあなたのためなのですよ。ほら、いつか約束したでしょう、あなたのために力を貸すと。今カートを回していますから、それに乗ってとにかく下にきてください』

追い打ちをかけるように、エランが続けた。その言葉を証明するかのように、ゲートの中から施設内移動用の電動カートが現れる。

『わかった。そちらへいこう。その間に、アベンジャーをガレージに回収してくれ』

フリッツは観念すると、エランたちの言葉に従った。

3

「やあ、よくきてくれました。見せたい物というのはこちらにあります」

地下試験場に入るなり、エランが小走りに駆けよってきて二人を歓迎してくれた。まだ苛立ちが消えきっていない様子のフリッツを、引っ張るようにして施設の奥へと誘う。

彼がいるここは、当然のことながらＡＣ用の製品テスト場のようだ。分析室の奥には、ガレージと動作試験用のドームが続いている。

「これは……」

ガレージに一歩踏み込んだとたん、フリッツは目の前に現れた物を見て立ち止まった。思わず視線が釘づけになる。

「どうですか。私の自慢の逸品です」

ハンガーに固定されたＡＣをさしてエランが自慢そうに言った。

試験機だからなのだろうか、機体は光沢のある黒一色にカラーリングされていた。漆黒の機体は、すべての色を拒むように鈍く輝いていた。闇の中にあっても、闇の色にさえ混じらぬだろうという気高い黒だった。

機体を構成しているパーツは、最近流通している新しい物が多い。

「興味を持っていただけましたか。少し説明しましょう。こちらへ」

エランが、ＡＣに見とれているフリッツを端末の方へ招いた。

「頭部は、最新型のＨＤ－４００４を使用しています。比較的軽量で、高性能コンピュータと近距離レーダーを搭載したタイプです。コアは拡張性と防御力に優れた軽量タイプのＸＸＡ－Ｓ０。腕部は軽量のＡＮ－25。脚部は二脚標準タイプのＬＮ－１００１Ｂ

をベースに、独自に私が強化改良を施した物です。ジェネレーターは高出力のＧＢＧ－１００００。ブースターはバランスのよいＢ－ＶＲ－３３。ＦＣＳはロック数が多いワイドタイプのＴＲＹＸ－ＱＵＡＤ。オプション類もたいていの物は装備されています。特にオートバランサー強化装置は新型のＳＰ－ＡＢＳ／Ｒｅを使用しています」

「能書きだけは悪くないな」

まるでセールスマンとしゃべっているようだと、フリッツはエランに苦笑してみせた。

「気に入りそうですか。これは、あなたのために作ってみたんです」

臆面もなくエランが言った。

「どういう意味だ？」

何か仕組まれたものを感じて、フリッツが聞き返した。

「言葉通りですよ。もしこのＡＣを使っていただけるのならば、先ほど大破したＡＣと交換しましょう」

「少し話がうますぎるな」

何か裏にあるのだろうと、フリッツは疑ってかかった。いくらスポンサーだからと言って、理由もなくこんなことをするはずがない。

「かもしれませんね。でも、理由がないわけじゃありません」

「彼女のように実験データを取るためか？」

フリッツは、後ろで興味深そうに端末の機体スペックをのぞき込んでいるビンテージ

■アナイアレイター
頭部：HD-4004
胴部：XXA-S0
腕部：AN-25
脚部：LN-1001B
右手：WG-1-KARASAWA
左手：LS-3303
右肩：WM-SMSS24
左肩：WC-IR24
推進：B-VR-33
動力：GBG-10000
火器管理：TRYX-QUAD
補助:SP-JAM・SP-SAP・SP-CND-K・SP-AXL・SP-S/SCR・SP-EH・SP-E/SCR・SP-E+・SP-ABS/Re

をさして言った。
「もちろん、その意味もあります。見た目は既存と同じパーツでも、内部はかなりカスタム化していますから、戦闘データは貴重です。メンテナンスも必ずプログテック社のメカニックによって受けてもらうことになると思います。けれども、理由はそれだけではありません。最大の理由はナインボールの存在です」
「どういうことだ？」
なぜナインボールが理由になるのかと、フリッツは聞き返した。
「本来なら、このＡＣはここにやってきてもらって試験場内のみで動かしてもらうか、こちらの指定した相手とアリーナで使用してもらうだけのつもりだったのです。けれども、今回の襲撃で方針を変更しました。敵の組織はナインボールと契約しているからです。これからも、いつナインボールなりランカーレイヴンなりが襲ってこないとも限りません。それなりの備えがこちらとしても必要だと思います」
エランが説明した。プログテック社としても、襲撃してくる敵と同等の手駒がなければ困るというわけだ。
「それで俺に肩入れしようと言うわけか」
フリッツは納得した。損得で割り切れる方が、理解はしやすい。
「ええ。こちらとしても、命を預けるのですから、誰でもいいというわけではありませんので。それに、あなたはナインボールを追っているのでしょう。利害関係は一致して

いると思います。だったら、協力し合うべきです。どうでしょう、スポンサーからの支援の条件として使っていただけませんでしょうか。少なくとも、この機体ならばナインボールと正面から互角に戦えるはずです」
エランが、熱心に説いた。なるほど、まるっきり悪い条件ではない。エランは、わざとスポンサーからの強制的な条件のように言っているが、それはフリッツに気を遣ってのことなのだろう。だいたい、今襲撃されたばかりで、プログテック社の保安部なり上層部なりがこんなことを即決するはずがない。おそらくはエランの独断だ。そして、エランはそれを事後承諾させるだけの力と自信を持っているのだろう。
「ねえ、フリッツがいらないんなら、私がもらうわ」
フリッツが即答を控えていると、すかさずビンテージが割り込んできた。
「そ、それはちょっと……」
予想外の展開に、思わずエランが顔を引きつらせた。どうやって彼女を丸めこもうかと、天才と言われた頭脳を全開にして計算しているようだ。
「どーして、私じゃだめなのよ。ええ、説明してごらんなさいよ」
「フリッツ」
詰めよるビンテージに、エランが助けを求めるようにフリッツを見た。
「やれやれ。仕方がない。このＡＣをもらうとしよう」
二人の様子に苦笑しながら、フリッツは言った。ナインボールを倒すためには、利用

できる物は遠慮なく利用し尽くすべきだ。より高性能のACが手に入るのなら、それは大きな前進だろう。それに、この二人を見ていると、陰謀などとは無関係だと思えてしようがない。フリッツは、そう信じていた。

「ずるいわね。せっかくアールグレイっていう名前まで、もうつけていたのに」

軽く頬を膨らませてビンテージが文句を言った。

「ベージュに塗り替えたら素敵よね、エラン」

ねえと同意を求められて、思わずエランが逃げ腰になる。

「まだ名称が決まっていないからと言って、これを紅茶シリーズの一機にされてしまうのはちょっと……。フリッツ、何かいい名前はありませんか？」

矛先を変えようと、エランがフリッツに訊ねた。

「アナイアレイター……」

訊ねられて、フリッツは心の中に浮かんできた言葉を口にした。

「殲滅者(アナイアレイター)ですか……」

エランが、心持ち眉根を顰めた。

「今の俺が使うACとしては、ふさわしい名だろう。奴を叩き潰すACだからな」

そう言って、フリッツは漆黒のACを見上げた。

「ナインボールの件ですが、もう少し突っ込んで調べてみます。前に現れた水陸両用MT、こちらでマーマンと名づけましたが、あの謎のMTを擁する組織との関連も気になります。少なくとも、個人で活動しているレイヴンが、あれだけの実績を残せるわけはありません。ハスラー・ワンの正体は謎とされていますが、謎は誰も気にしなかったから謎になってしまったか、あるいは誰かが意図的に謎にしているかです。いずれにしろ、ナインボールとハスラー・ワン、彼らが唯一の糸口であることは間違いありません」

技術者らしい探求心をあらわにしてエランが約束した。確かに、ハスラー・ワンの正体がわかれば、こちらから攻め入ることもできるだろう。それが早道であることには間違いはない。だが、フリッツにとってはハスラー・ワンの正体などどうでもいいことであった。奴の存在そのものを抹消できればそれでいい。

「俺にとっては、奴の背景など問題じゃない。奴そのものを叩き潰せればそれでいい。それだけだ。スポンサーの依頼は、率先して解決しよう。あんたの身柄も間違いなく守ってみせる。その代わり、俺がハスラー・ワンを倒すための、最大限の協力をしてくれ」

「いいでしょう。私が約束します。何かあれば、二人には、固有のチャンネルで連絡を入れます」

エランが、力強くフリッツにうなずいてみせた。

4

事態は大きく流れを変えた。

フリッツがハスラー・ワンを仇と狙う、それ自体は何ら変化はない。だが、彼の周囲は激変していた。それをもっとも象徴していたのは、プログテック社の試験場襲撃事件の直後にマネージャーのラナ＝ニールセンから届いた辛辣なメールだった。

『直接の依頼は受けるな。そう警告したはずだ。もう、私はマネージャーではない。お前への援助は打ち切る。勝手に死ぬがいい』

紋切り型な単語の羅列に、フリッツはこれといった感慨はいだかなかった。手駒としては、やけにあっさり捨てたものだ。ただそれだけを思う。

このメールとともに、レイヴンズ＝ネストを通じたミッションの依頼は一切こなくなってしまった。依頼そのものは、ネストが遂行可能と判断したレイヴンにだけ送られてくるシステムのため、ネストが不適当と判断したレイヴンには実際に送られてこない。おそらくは、ネストに顔の利くだろうラナが、フリッツへの依頼をすべてストップしているのだろう。そう考えなければ、一件の依頼もこないということの証明にはならない。

子供っぽい手段に訴えるものだと、フリッツは内心苦笑した。肝心なときに連絡がつかなかったわりには、こういう報復処置は驚くほど素早い。

ミッションの停止はペナルティのつもりなのだろうが、今のフリッツには痛くも痒くもないことだった。もともとが、ハスラー・ワンのいるアリーナに参加するための手段としてのミッションポイントの獲得だったのだ。すでに当座の目的は果たしている現在、フリッツにとってはミッション依頼などすでに無用の長物だった。しかも、ラナという個人の後ろ盾を失った代わりに、プログテック社が以前に倍するかたちでサポートしてくれている。結果的な状況は好転しているのだ。

おそらく、ラナ＝ニールセンは、自分がフリッツを捨てたと思っていることだろう。だが、本当は彼が彼女からプログテック社に乗り換えただけなのだ。

フリッツはガレージのハンガーにセットされたアナイアレイターに近づくと、コックピットハッチ付近から垂らされたリフトステップに足をかけた。ワイヤーをつかんでスイッチを押すと、ワイヤーが巻き取られてフリッツの身体が上に上がっていく。開かれたコックピットハッチに足をかけると、パイロットシートに身を沈めた。標準型コア（XCA00）に比べれば、この新型コア（XXA・SO）は乗降が非常に楽だ。

コンソールを操作してハッチを閉じると、メインモニタが外の風景を映し出した。各機器をチェックしつつ、メカニックに両肩の武装のセッティングを指示する。モニタの機体模式図の右肩に、垂直ミサイルランチャー（WMSMSS24）がセットされる様子が表示される。軽い衝撃とともに武装がハードポイントにセットされ、各種回路が接続されたことを知らせるインジケータが点灯した。続いて左肩に光弾型ショルダーキャノン（WC1R24）が接続される。回路接続を確認するとフリッツは右腕を動かして、ウエポンラックからプラズマライフル（WG1KARASAWA）をつかみ取った。

『ロックを解除してくれ』

フリッツの指示で、メカニックたちがハンガーのロックを解除する。固定されていた

機体が、完全に自由になった。フリッツは、アナイアレイターに一歩を踏み出させた。ズンと巨大な足が、フロアを踏みしめる。その威圧的な容貌とは対照的に、機体の操作性は軽快でかなり良好だ。コックピットには、たいした振動は伝わってこない。

フリッツはハンガーにならんでいる整備中や待機中のACの列の間を通り抜けると、アリーナドームへの専用のリフトゲートへとむかった。出陣する仲間を見送るように、物言わぬ巨人の列は静かにたたずんでいた。

鈍重なゲートの前にアナイアレイターが立つと、ロックシリンダーが上下に移動して分厚い装甲板が左右に開いていく。フリッツは、アナイアレイターを中へと進ませた。リフトのムービングフロアの中央部分に、二脚用の脚の位置がマーキングしてある。その位置に立つと、音を立ててゲートが閉じていった。

傾斜したトンネルの底にあたる狭い空間が、非常灯の赤い光だけに満たされる。床から脚部固定アームが起き上がって両脚をがっしりと挟み込んだ。ムービングフロアのロックが外れる。軽く押さえつけられるような感覚とともに、アナイアレイターの機体が斜め四五度のトンネルの中をゆっくりと上昇を始めた。等間隔にならぶライトの列が、まるで異空間への誘導灯のようにフリッツの目を瞬かせる。

ガクンという衝撃とともに長かったトンネルも終点へと辿り着いた。天井の扉のロックが外れ、明るい光が射し込んでくる。ムービングフロアがせり上がり、アナイアレイターの機体が明るいドームの中へと押し上げられた。

半球状のアリーナドームの反対側には、赤い四脚のACが米粒のように見える。ランカーレイヴンのツーセルフが乗るACビトゥイーンだ。

試合開始の合図が鳴り響いた。

フリッツはブースターを噴かすと、ホバー移動で回り込もうとする敵に対応した。機動性の感触は悪くない。

遠距離から、敵がスナイパーライフル（WG-RFM118）で狙撃してくる。急加速で敵の射界から外れると、ミサイルで牽制しながら接近をはかる。垂直に発射されたミサイルは頭上から敵に降り注ぎ、進路を妨害して敵の足を止めた。フリッツはすかさずプラズマライフルで攻撃をしかけた。直撃を受けた敵の装甲が、灼熱して弾ける。今まで使っていたハンディショットガンとは、比較にならない威力だ。

たまらず、ビトゥイーンが肩のリニアガン（WC-LN350）を連射しながら離脱をはかった。襲いかかる銃弾の雨を果敢にかいくぐり、フリッツが荷電粒子ビームを正確に命中させていく。強力な武装は数よりも正確さを要求される。逆に言えば、ラッキーヒットのようなものがない限り、トリッキーな動きで回避することが可能だ。ショットガンのように弾が拡散するわけではないので、射撃は敵の動きとFCSの追尾機能を考えてここぞというときにしなければならない。

ミサイルの着弾までのタイムラグをうまく使ってライフルでの同時攻撃をしかけながら、フリッツは一気に間合いを詰めた。振り払われるブレードを避けて、ビトゥイーン

が高くジャンプする。引っかかったなとばかりに、フリッツは壁際まで急後退した。ミサイルを放ってから、アナイアレイターにショルダーキャノンを構えさせる。飛来するミサイルを迎撃しようと、ビトゥイーンが空中でめまぐるしくむきを変えた。首尾よく迎撃には成功するものの、滞空限界に達して降下する。

ビトゥイーンが着地する。同時に、その着地地点にむけられていたアナイアレイターのキャノンが発射された。飛び出したプラズマ球体の光弾がビトゥイーンを直撃する。

それが止めとなった。それきり、ビトゥイーンが沈黙する。

「エランが言うだけあって、いい機体だ」

アナイアレイターでの初勝利に、フリッツは満足そうにつぶやいた。

5

アナイアレイターを手に入れてからのフリッツは、まさに快進撃だった。

たいした時間もかけずにパスコールにデスカルソという上位のレイヴンを連続して倒し、ランキング七位にまで上りつめていた。もちろん、その間には今まで倒してきたレイヴンたちからの再挑戦もきっちりとはねのけている。

いよいよランキング六位に挑戦するという日、珍しくプログテック社の控え室は静かだった。

「今日は、いつものお騒ぎ娘は留守か……」

奇妙な安堵感と物足りなさを同時に味わって、フリッツはつぶやいた。べつだん、いつも控え室で一緒になるわけではないのだが。確か今日はヴェル・エールとの対戦があるから見にこいとしきりに言っていた日のはずだ。自分で誘っておいて、姿が見えないというのもおかしい。それとも、すでにガレージにいってしまったのだろうか。

『すまない、そちらにビンテージはいっているか？』

内線（インカム）でガレージのメカニックを呼び出すと、フリッツはビンテージの所在を確認してみた。

『ビンテージさんですか？　それなら、ずいぶん前に本社からの依頼を受けて、我が社の輸送部隊の護衛に出かけました』

たまさか出た若いメカニックが、周囲の騒音を気にしながら大きな声で答えた。背後で、チーフのものらしい内線の主を誰何する声が聞こえてくる。メカニックがフリッツであることを告げると、受話器をひったくるような音とともにチーフが直接出てきた。

『レイヴンか？　ちょうどいい、手が空いているなら、依頼を受けてくれ』

『個人的な依頼は、受けない主義にしている』

フリッツは、そっけなくチーフの言葉を断った。

『違う、違う。俺の依頼じゃない。プログテック社からの正式な依頼だ』

『なら、詳細を聞かせてもらおう』

勘違いするなと言葉を続けるチーフに、フリッツはあらためて訊ねた。
『今、ビンテージさんがやっている依頼の救援だ。さっき本社から、手隙のレイヴンがいたら連絡してくれと言われたんだ』
『襲撃されたのか？』
ビンテージが救援を頼むなど、よほどのことかとフリッツは慌てて聞き返した。
『ああ。どうも、部隊の中にスパイがいたらしい。現地ではかなり混乱しているようだ。まあ、あの娘がいるからには心配はいらないとは思うが。だが、このままでは味方の被害が馬鹿にならないってことらしい』
チーフの言葉に、フリッツは少しほっとした。
『わかった。出撃しない理由はない。すぐそちらへいく』
手早く答えると、フリッツはガレージへとむかった。
すでに出撃の準備を整えられていたアナイアレイターに飛び乗ると、戦闘が行われているというアイザック・シティのセンターストリートへとむかった。ＡＣ単体でも、急げばさほど時間がかからずに到着できる距離だ。
網の目状に地下に張り巡らされているシティ間連絡通路を抜けると、センターストリートのある地区は小規模な市街戦の様相をていしていた。散発的に機銃の音が聞こえ、ときどき閃光が輝く。照明が夜のモードになっているのは、輸送部隊を逃がすためにプログテック社がシティの管理局にでも頼んだのであろう。だが、味方を見えにくくする

ということは、同時に敵を見えにくくするということにもなる。奇襲の危険性を考えれば、あまりいい方法ではないだろうに。
『援軍か、助かった』
フリッツが到着を告げると、護衛部隊の責任者らしき男からすぐに返信があった。敵に傍受されるのは計算のうちだ。味方には援軍がきたということで士気を持ち直させられるだろうし、敵には脅威を与えることができる。
『敵も伏兵を投入したらしく、状況はあまりよくない。少しでも多くの味方を救ってくれ。ただし、敵はこちらと同型のＭＴを使って偽装している。識別信号も同じなので、気をつけてくれ。とりあえず部隊にいた敵は撃退したので、機体カラーの違いで肉眼で識別は可能なはずだ。グレイの機体だけを撃破してくれ』
『了解した。できれば、そちらは戦力を再集結してくれ。識別の手間を省くために、撤退してくれた方がこちらとしてはやりやすい』
現状を聞いて、フリッツはそう指示を出した。はっきり言って、そんな状態なら味方のＭＴは邪魔なだけだ。
フリッツはブースターを開くと、メインストリートをすべるようにして進んでいった。前方に、一機のスティンクバグが見える。ボディカラーは暖色系のくすんだオレンジ色だ。それを取り囲むようにして、グレイのボディカラーのスティンクバグが三機、銃撃を集中させている。

フリッツはその最中にアナイアレイターを割り込ませた。

次の瞬間、フリッツは有無を言わせずプラズマライフルの三連射で敵のスティンクバグを破壊した。慌てて残る二機が建物の陰に隠れようとするところを、速攻で葬る。市街地であることを考えると、一発の流れ弾も許されなかった。それは、かつての悲劇の再現につながる。

『残りの部隊はどこだ』

フリッツは、助けたばかりの味方に訊ねた。

『ビンテージとともに、ルート77へのゲート付近にいるはずです』

プログテック社の一般周波数とは違う周波数で、そのMTから返信があった。以前エランが言っていた専用チャンネルだ。それもそのはず、声の主はエランその人だった。

『一人か?』

慎重に言葉を選んでフリッツは訊ねた。

『いいえ』

同様に短く答えがある。おそらく、輸送部隊というのは、エランを別の施設に運ぶための部隊だったのだろう。襲われたために、輸送車両を囮にしてMTで脱出したらしい。まったく、危ない橋を渡るものだ。

『わかった。すぐにここから離脱しよう』

『そのつもりです』

フリッツはエランを守りながら、このブロックから外に出るゲートへとむかった。幸いにも、生き残ったMTたちがゲート付近に集結している。いや、数から言って本社の増援部隊もかけつけたのだろう。中には、ファットボールドなどの重MTの姿も見える。これならば、ひとまずは安心だろう。

『フリッツ、私はもう大丈夫です』

エランから通信が入る。わかったとばかりに、フリッツはその場から急いで離れていった。

ちょうどストリートの反対側に、シティ間トンネルのゲートが口を開けている。そこに立ったオレンジ・ペコが、トンネル内に逃げ込もうとしている車両を掩護して戦闘中だった。

フリッツは大きくジャンプすると、上方から敵MTに対しての射線を通した。空中からの狙撃で、一機のスティンクバグを倒す。

背後からの突然の敵の攻撃に、残った敵が動揺した。それを見逃さず、オレンジ・ペコのアームガトリングキャノンが敵を一機スクラップに変えた。

『フリッツなの!?』

驚いたような嬉しいようなビンテージの声が、アナイアレイターのコックピットの中に響いた。

フリッツは建物の陰にアナイアレイターを着地させると、コンデンサのエネルギー回

復を待った。数秒後飛び出すと、ブースターで一気に敵に近づき、ブレードを一閃させた。片足を切断されたスティンクバグが横転する。

『待て、降伏する!!』

擱坐したスティンクバグのパイロットが、外部スピーカーを使って命乞いをした。ライフルをむけたフリッツは、一瞬動きを止めた。捕虜は役に立つかもしれないと言う考えが頭の端を過ぎる。だが、次の瞬間、敵のMTは集中砲火をあびて粉々に砕け散った。

『甘いわよ』

諫めるようなビンテージの声が響いた。

『短絡的だな。敵から情報を手に入れられたかもしれないのに』

『そうか、そういう手もあったわね』

フリッツの言葉に、ビンテージがいけしゃあしゃあと答えた。舌を出してごまかしている姿が目に浮かぶようだ。

『いいじゃない、とにかくこれで済んだんだから。エランは無事だった?』

『ああ』

『よかった。なにしろ彼は、私の飯の種だもんね。さて、そろそろ帰りましょうよ』

そっけなく言い切ると、ビンテージはフリッツをうながした。戦闘が終われば、ACは無用の長物だ。長居は無用だと言いたいのだろう。

『いや、まだだ』

フリッツは首を横に振った。

『どういうこと?』

『見ろ』

怪訝そうなビンテージに、フリッツはあちこちで火の手の上がっている市街地をさしてみせた。戦闘による巻き添えで、関係もない人々が被害に遭っている。フリッツは、幼いときの悪夢が蘇ったようで、きつく口元を結んだ。

『救助を手伝おう』

『何変なこと言ってるのよ』

少し怒ったようにビンテージが言い返した。

『もうワーカーマシン(WK750)や作業ロボット(テックボット)が繰り出してるんだから、私たちがすることは何もないわよ』

プログテック社が手配したのだろうか、すでに救助用のMTなどが火災の消火や崩れた建物の撤去を始めている。

『それでも何かしたいんだ』

フリッツは、率直な今の気持ちを述べた。

『呆れた。私たちが助けにいったって、恨まれるだけよ』

『だろうな。それはしかたないさ』

言いながら、フリッツは一人でMTの手伝いにむかった。少なくとも、あのときのナ

インボールになりたくはない。ただ、それだけの理由だった。たとえそれが偽善であったとしても、それで助かる者がいればそれでいいではないか。

『しようがないわね……。一緒にいたげるわ』

あきらめたようにつぶやくと、ビンテージがフリッツの後に続いた。

『すまない』

『借りは大きいわよ』

素直に礼を言うフリッツに、ビンテージが明るく答えた。この明るさこそが、彼女の原動力なのだろう。

幸いにして、ビンテージ以外の者が爆発性の武器を使っていなかったために、戦闘による死亡者はパイロット以外にはいなかった。住民たちは逸早く教会の地下シェルターなどに避難したらしい。避難した者たちも、テロの頻発する大都市の人間らしく、戦闘には慣れてしまっているようだ。

恐怖感の麻痺した住民を見て、フリッツは違和感を覚えずにはいられなかった。敵討ちのためにACによる戦闘を続ける自分と、どちらがより人間としておかしな存在なのだろう。

ハスラー・ワンを倒したとき、何かの答えが出るのか。それはそのときにならなければわからない。だからこそ、奴を倒さなければならないのだとフリッツは自分自身に言い聞かせた。

6

アリーナトップに君臨するハスラー・ワンには、次点であるランク二位に位置しなければ挑戦権が発生しない。フリッツは、現在ランク四位にまで上りつめていた。このままの勢いならば、挑戦権を得るのも時間の問題だろう。もはや、ハスラー・ワンも彼を無視することはできないはずだ。

アリーナのいくつかは、完全な閉鎖空間で戦いが行われる。そこならば、ナインボールも逃げ隠れすることはできない。アナイアレイターとナインボールが戦うとき、それはデスマッチになることだろう。

きたるべき日に備えて、フリッツは気を引き締めるとともに訓練も怠らなかった。後は、対戦の日まで何事も起こらないことを祈るだけだ。

だが、おうおうにして悪い予感は的中する。

その日、フリッツは電子音で目覚めさせられた。電話の呼び出し音だ。

端末のスイッチを入れると、プログテック社の社員の慌てた顔が画面に映し出された。

「何の用だ」

少し不機嫌そうにフリッツは言った。

「大変です。本社が正体不明の敵部隊に襲われています」

「何だと!?」

フリッツは飛び起きた。

『赤いACを中心とする敵部隊は、我が社の守備部隊を次々と撃破して、社内最深部へとむかっています。間違いなく、目標はエラン主任です。一刻の猶予もありません、トップクラスのレイヴンであるあなたの力を貸してください』

モニタの中の男は、早口でまくし立てた。事態はよほど悪いらしい。今エランを失うわけにはいかない。そして、何よりも赤いAC……。間違いない、奴だ。

「ナインボールがきているのか。わかった。すぐにむかう。それまで持ちこたえさせろ」

言いながら、フリッツは急いで身支度を整え始めた。

「なあに、何かあったの?」

隣で寝ていたビンテージが、間延びした声で訊ねてきた。彼女が地方アリーナで負け続けていた炎刃に初めて勝てたのと、フリッツのベストスリー入りの前祝いだと称して、昨夜からフリッツのアパートに押し掛けてきていたのだった。

「エランのいるプログテック本社が襲撃された。すぐに救援にいく」

「何ですって!」

ほぼパイロットスーツを着終わったフリッツに、ビンテージが驚いて叫んだ。

「私もいくわ。ちょっと待ってて」

「急げよ」

裸の胸を隠そうともせずに慌てて昨晩脱ぎ捨てたままのパイロットスーツに手をのばすビンテージを待つ間に、フリッツはガレージにACの準備をするように連絡を入れた。

「いいわ。いきましょう」

手早く身支度を整え終えたビンテージが、フリッツをうながした。

すっかりレイヴンの顔になった二人は、急いでガレージにむかった。準備の整えられていた愛機に乗り込むと、アイザック・シティの中央部にあるプログテック本社ビルに出撃する。

重火器で破壊されたビルの資材搬出入ゲートの周辺には、破壊されたMTの残骸が散乱していた。まだ黒煙が立ち上り、機体の一部に炎が見えるところが生々しい。施設の破壊は最小限のところを見ると、ほとんど一瞬のうちに全滅させられたのだろう。

『敵の中にナインボールがいるらしい。奴に会ったら俺に任せてお前は手を出すな』

『逃げろって言うの。私のこと、心配してくれてるのかしら』

『奴は俺の獲物だ。それだけだ』

彼の心の中を探ろうとするかのようなビンテージの言葉に、フリッツはそっけなく答えた。

『もう、素直じゃないんだから』

からからと笑うと、ビンテージがフリッツに先んじて建物の中に突入していった。彼の言葉に従うつもりなど、毛頭ないらしい。

建物の中は予想に反して静かだった。この場所ではすでに侵入した敵部隊と守備隊の戦闘は終わってしまっているらしい。散乱する双方の機体の残骸が、雄弁にそれを物語っていた。

『敵はさっさと先に進んじゃったみたいね。追いかけましょう』

ビンテージが先を急ぐようにリフトのスイッチを入れた。上層から、昇降用のリフトが降りてくる。プログテック社の本社は上下の岩盤をつなぐ柱状のビルであり、その中枢部は下層の岩盤ではなく上層の岩盤の中にあった。人間の感覚としては通常と逆であるが、地下都市の構造としては決して不思議なものではない。

『内部の状況は確認できないのか？』

ビンテージと共にリフトで上昇しながら、フリッツはプログテック社のセキュリティに訊ねた。監視カメラなどが生きていれば、敵の配置を事前に把握することができるはずだ。

『エラン＝キュービスです。監視システムは戦闘で使えなくなっていますが、通信システムは支障ないようです』

返信は、直接エランから送られてきた。

『二人とも十分に気をつけてください。現在、私のいるブロックの手前のブロックに、あのナインボールがいます。不思議なことに、彼は私のブロックに突入してくる素振りを見せていません。彼の目的は私ではないようです。どうも、私は本当の目標をおびき

出すための餌にされたようです。おそらく彼は、フリッツ、君を待っています』

『望むところだ』

フリッツは不敵に笑うと、自信たっぷりに答えた。ハスラー・ワンの方からわざわざでむいてくれたということは、ある意味手間が省けたというものだ。

『施設内のデータを送ります。決して無理はしないように。くれぐれも気をつけてください』

最後にエランがつけ加えた。同時に、社内のマップデータが送られてくる。

『ＯＫ。記録したわ』

コンピュータにデータを記録したビンテージが答えた。

リフトが停止する。上層のブロックに到着したようだ。エランが、いや、ハスラー・ワンがいるブロックは、さらに上層のブロックだ。

まるで攻撃のない不気味な静けさに緊張しながら、フリッツは次のブロックにいくためのリフトの操作盤に近づいた。敵部隊が使用したためか、すべてのリフトは上昇した状態で止まっているようだ。リフト上に敵機や爆発物がある場合に備えながら、フリッツはリフトの降下スイッチを押した。

その瞬間、フリッツたちは背後から銃撃を受けて慌てて散開した。資材置き場に隣接した倉庫の扉の中から、敵が飛び出してくる。重装甲に覆われた丸みをおびた機体のファットボールドと、おなじみのスティンクバグだ。左右に分かれたフリッツたちは素早

く回頭すると、挟み込むように火線を集中させて敵を粉砕した。
『待ち伏せとは、姑息なまねをするものだ。敵はやけに本社の内部に詳しいらしい』
周囲を警戒した後、フリッツは降りてきたリフトに近づきながら言った。
『またスパイでもいて、情報を漏らしたんでしょうよ。いいじゃない。それだけ敵も余裕がないんでしょうから』
『なら、こちらも相応に歓迎しようじゃないか』
『それはいいかもね。こっちも引っかけてやりましょう』
フリッツの言葉に、ビンテージが乗り気をみせる。どうも何やら企みを思いついたようで、フリッツは少し不安になった。
ビンテージとリフトに乗ったフリッツは、上昇スイッチを押した後、その場でアナイアレイターにショルダーキャノンを構えさせた。敵が次に待ち伏せるとしたら、リフトが上がりきった瞬間がもっとも可能性が高い。案の定、リフトが上昇していくとレーダーに反応が現れてくる。ショルダーキャノンの砲口がフロアから上にのぞいた瞬間、フリッツは速攻で光弾を放った。床すれすれを這うようにして飛んでいった光弾が、待ち伏せていたファットボールドの脚部に命中して敵をひっくり返す。そこへ、ビンテージがすかさずアームガトリングキャノンの砲弾をあびせかけた。集中砲火をあびた敵MTが爆発する。
間を空けることなく、フリッツは続く攻撃で残るスティンクバグを粉砕した。リフト

が上がりきったときには、敵は見事に排除されていた。
『味方は残ってはいないようね』
慎重に資材置き場に歩みを進めながらビンテージが言った。
『ああ。ここから先は敵ばかりと見た方がいいな。先を急ごう』
『慌てないで。敵が網を張っているのなら、ここは交互に掩護しながら進みましょう。途中で雑魚に機体を傷つけられて、あなたがナインボールと万全な態勢で戦えなかったら問題だわ。レイヴンなら、最後には勝つ方法を考えなきゃ』
雑魚をなめすぎるなと、ビンテージが説いた。目的はナインボールであって、途中の敵は単なる障害でしかない。まともにやり合っては、地雷を自ら踏むようなものだ。
『いいだろう。だが、最初は俺がいかせてもらう』
フリッツはビンテージの言葉を入れると、資材置き場奥の通路に入っていった。曲がりくねった通路を奥に進んでいくと、予想通りファットボールドが一機待ちかまえていた。
フリッツは、敵が銃弾を放つよりも早く後退して曲がり角から射線の外に逃げた。素早く回頭して、片膝をついたキャノンの発射体勢をアナイアレイターにとらせようとする。だが、折り畳まれていたキャノンの砲身がのびきらないうちに敵が角を曲がってくる。ファットボールドが両腕の内装マシンガンをフリッツにむけた瞬間、アナイアレイターの背後でオレンジ・ペコがジャンプで半身をのぞかせた。同時にアームガトリング

キャノンが敵に炸裂する。被弾の衝撃で体勢を崩したファットボールドに、フリッツのショルダーキャノンから発射された光弾が止めをさした。

息の合った連係プレーをとりながら、二人はナインボールの待つ最深部目指して突き進んでいった。

『エランが送ってきたマップデータによると、じきにナインボールのいるホールね』

リフトを始動させると、ビンテージがマップデータを参照して伝えてきた。

『今度は私が先に立つから、掩護して』

『いや、ナインボールのいるホールには俺が先にいく』

フリッツは、ビンテージの申し出を退けた。ナインボールとの決着は、彼自身の問題だ。彼女に介入させるつもりも、巻き込むつもりも最初からなかった。

『あら、最後は当然譲るわよ。心配しないで』

ビンテージが安請け合いする間に、リフトが上がりきった。同時に敵の出迎えがある。

フリッツがプラズマライフルで応戦する間に、アナイアレイターの横をオレンジ・ペコがすり抜けていく。接近戦を挑むつもりかとフリッツが危惧したのもつかの間、ビンテージは敵の間をもジャンプとブースターダッシュですり抜けていった。

『罠がないか私が確認するわ。その後に突入して』

短く言い残して、ビンテージが奥へと続く通路の中に姿を消した。

『抜け駆けはなしだと言っただろうが！』

叫んで慌てて後を追おうとするフリッツの前に、ファットボールドが立ちふさがる。

『どけ！』

強行突破しようとするアナイアレイターを、敵が腕のシールドで横殴りに阻止した。

体勢を崩したままブースターで横移動しながら、フリッツはプラズマライフルを連射した。ファットボールドの装甲が赤熱し、内部から爆炎が噴き出して倒れる。残るスティンクバグをブレードで叩き斬ると、フリッツは全速でビンテージを追った。

7

「これで少し時間が稼げるかな」

無人のリフトを上に戻すと、ビンテージはコックピットの中でつぶやいた。こうしておけば、フリッツはリフトを使わざるをえないだろう。ACで縦穴を降下されればあっという間だが、リフトを使えば結構な時間がかかる。時間稼ぎにはもってこいだ。

「ほんっと、私も意外と甘いわよね」

誰にともなくつぶやく。エランにしろフリッツにしろ、簡単には死にそうにない二人をネタに、情報を売ってはずいぶんと稼がせてもらったものだ。だが、ここまで彼らに思い入れるとは、彼女としても予想外であった。特にフリッツには……。今の彼女としては、フリッツに怪我などさせたくはなかった。そのためには、倒すべき者がいる。

ビンテージはホールの扉の前に立つと、大きく一つ深呼吸した。そして、扉を開きながら、外部スピーカーを使って中のナインボールにむかって呼びかけた。

『待って、敵じゃないわ。撃たないで！』

アームガトリングキャノンの砲口を下にむけながら、彼女はゆっくりと進んでいった。

『貴様ではない……』

パルスレーザーガンをむけたまま、ハスラー・ワンがつぶやく。

『そうよ。私じゃないわ。フリッツなら、今こちらへ誘導してきたから、すぐにやってくるはず。私が送った、施設内のデータは把握しているのでしょう？』

言いながら、ビンテージがナインボールに近づいていった。ナインボールは軽く頭部を動かしてオレンジ・ペコを確認しただけで、後は彼女の言葉を受け入れたのか、その行動を無視するかのように微動だにしなかった。

『これから、無線で油断させてからここへ入らせるわ。後はあなたの好きにして』

ナインボールの背後に回り込むと、ビンテージはそう約束した。

配置は完了した。直立したままショルダーキャノンを構えたナインボールが、ホールの入り口のゲートに照準を合わせている。今までのことがあったとはいえ、簡単に信用してくれたものだとビンテージは一人ほくそ笑んだ。

ナインボールの背後に立ったビンテージが、フリッツに連絡を入れた。

『ナインボールを発見したわ。私が合図したら突入して』

言うなり、ビンテージは両腕をあげてナインボールの背中に狙いを定めた。砲身が回転し、一気に砲弾が発射される。その瞬間、仕留めたとビンテージは確信した。だが、実際には、彼女の放った砲弾はホールの端まで飛んでいって厚い隔壁で爆発を起こしただけであった。

「そんな！」

すでにメインモニタにナインボールの姿はなかった。一瞬のうちに消えたというのだろうか。レーダーの敵影を確認する。上だ。ビンテージの攻撃によって起こった爆発の光に下から照らされるようにして、ナインボールが空中でショルダーキャノンを構えていた。

「そんな、空中から……」

最後まで言えないうちに、凄まじい爆発がオレンジ・ペコの機体をつつみ込んだ。衝撃で、機体が転倒する。

「反撃を……」

敵に照準（サイト）を合わせようと両腕を持ち上げかけたところへ、パルスレーザーガンを撃ちながら降下してきたナインボールがコアと左腕を勢いよく踏み潰した。レーザーをあびて加熱していた左腕が踏みちぎられ、コアの左側が衝撃で大きく陥没した。変形するコックピットブロックに身体を圧迫されて、ビンテージがくぐもった悲鳴をあげた。ナインボールがオレンジ・ペコの頭部にブレードを差し入れて破壊する。ビンテージの頭上

の機器がスパークを飛ばし、メインモニタがブラックアウトした。あっという間にオレンジ・ペコは大破させられてしまった。止めをさそうと、ナインボールの左腕が振り上げられる。ビンテージは死を直感した。その瞬間――

『ハスラー・ワン!!』

大音声と共に飛来した光弾を、ナインボールが慌てて回避した。自らの放った光弾の後を追うように突進してきたアナイアレイターが、オレンジ・ペコをだきあげて飛びすさる。一瞬の差で、ナインボールの放った砲弾が二人のいた床を焼き尽くした。

ブースターを全開にして二機のACの機体を持ち上げると、フリッツはミサイルを一斉発射してナインボールを牽制しつつホール内周の張り出しの上に避難した。六基のミサイルがホールの高い天井すれすれで反転し、高速で後退するナインボールを追い回す。

『大丈夫か、ビンテージ。だからあれほど言ったのに……』

『へへっ……。失敗……しちゃった。だませたと、思ったんだけど……』

問いかけると、弱々しい声が返ってきた。

『いいから早く脱出しろ。ナインボールは俺が引き受ける』

損傷の激しいオレンジ・ペコを見て、フリッツはビンテージに脱出をうながした。機体のところどころからは火も噴き出している。誘爆するのは時間の問題だろう。

『だめみたい。左足がはさまれて……もう感覚がないの』

『あきらめるんじゃない、今ハッチをこじ開けてやる』

そう叫ぶと、フリッツはオレンジ・ペコの胸部装甲にアナイアレイターの手をかけた。

『ねえ、そういえば、まだ私の本当の名前教えてなかったわよね。私の名前は……』

唐突にビンテージが言い出した。

『そんなことは後でいい』

いいながら、フリッツはオレンジ・ペコのハッチを装甲ごと引き剥がした。ぐったりとしたビンテージの姿があらわになった。

『今出して……』

ひしゃげた前面コンソールに下半身をはさまれたビンテージに、アナイアレイターがマニピュレーターをのばした。そのとき、下のフロアから、ショルダーキャノンを構えたナインボールが垂直上昇してきた。

「逃げて、フリッツ!!」

叫ぶなり、ビンテージがオレンジ・ペコの右腕でアナイアレイターを振り払った。ブースターを全開にすると、空中機雷の弾倉ロックを外しながらナインボールへと突っ込んでフリッツの盾となる。

「今まで、ごめんなさ……」

ビンテージの言葉が、爆音でかき消された。ナインボールの放った砲弾がオレンジ・ペコに直撃したのだ。周囲に放出された機雷が誘爆し、凄まじい爆発が立て続けに空中で起こった。その激しい爆風に、オレンジ・ペコは跡形もなく吹き飛び、ナインボール

とアナイアレイターももんどりうつようにして爆風に飛ばされた。

衝撃でフロアに墜落したアナイアレイターのモニタに、オレンジ・ペコの細かな破片が降り注ぐ様が映し出された。その中に、ビンテージの髪飾りを見たような気がして、フリッツは呆然としながら機体を立ち上がらせた。フロアに散乱する破片の下のどこかに、ビンテージの身体があるのだろうか。

『ハスラー・ワン！　貴様あ!!』

両親を押し潰した瓦礫を思い出し、フリッツはコックピットの中で叫んだ。

ホールの反対側に、多少損傷を受けたナインボールが舞い散る破片の中をゆっくりと降下してきて着地する。

『力を持ちすぎる者はすべてを壊す。秩序も、周囲の人間も……。お前もその一人だ』

おごそかとも言える口調で、ハスラー・ワンがフリッツに言った。

『貴様が……、貴様がそれを言うのか……。俺のすべてを破壊してきた貴様が!!』

叫ぶなり、フリッツはプラズマライフルを連射した。即座にナインボールもパルスレーザーガンを撃ち返してくる。

二機のACのブースターが咆哮した。

激しく体を入れ替えながら、フリッツたちは射撃戦を繰り返した。立体的な両機の移動に、ビームがイルミネーションのようにホール内を乱舞する。

一気に間合いを詰めたフリッツが、ブレードでナインボールを斬ろうとした。予測し

ていたナインボールがジャンプしてアナイアレイターを飛び越そうとする。その瞬間、フリッツは垂直ミサイルを発射した。空中でナインボールが機体を捻ってミサイルをかわす。そこへ、ジャンプしたアナイアレイターが迫った。体勢の崩れた敵の機体にブレードを叩きつける。ナインボールの胴体機銃の砲身が溶け落ちた。一瞬にして斬り返し、コアを破壊しようとする。だが、そのアナイアレイターの左腕をナインボールは右手でがっしりと受け止めた。逆に、今度はナインボールがブレードを発生させて斬りかかろうとする。そうはさせじと、フリッツも敵の腕の内側にプラズマライフルの銃身を差し込んでその動きを封じた。

もつれ合うようにして、きりもみしながら二機のACは墜落した。落下の衝撃で、フロアをブレードで焼き焦がしながら二つに別れる。

互いに銃を敵に撃ち込みながら、宿敵同士が立ち上がった。

度重なる酷使に耐えきれず、ついにアナイアレイターのプラズマライフルが砲身熔解を起こして粒子加速板が作動しなくなった。耐用限界を超えてしまったのだ。フリッツはライフルをナインボールに投げつけると、ブレードによる白兵戦を挑んでいった。軽快なステップとジャンプを巧みに使いながら、ナインボールがそれを迎え撃つ。ついては離れ、離れてはつきつつ、AC同士の一騎討ちが続く。双方のブレードが空を切るたびに、美しいプラズマの軌跡が宙に描かれた。

『いいかげんに消えてなくなれ!!』

フリッツの怒号と共に、ホールの天井近くの空中で両雄が激しくぶつかりあった。同時にブレードを振るおうとした左腕が真正面からぶつかりあい、空中で腕を重ね合ったままブースターによる力押しの状態になっていった。押し切って敵の体勢を崩した方が、次の攻撃の機会(チャンス)をつかむ。ブースターを全開にしたまま、二人は腕のパワーを全開にして思い切りブレードを振った。弾かれるようにして、浅く斬り合いながら双方が高度を維持したまま後退する。軽いダメージに、わずかにアナイアレイターが体勢を崩しかけた。その瞬間を見逃さず、ナインボールが素早くキャノンを構えた。このままでは回避は不可能だ。フリッツはその位置で、垂直ミサイルを発射した。天井に命中したミサイルが爆発を起こす。その爆風が、アナイアレイターを下に突き動かした。間一髪、ナインボールの放った砲弾が天井で炸裂する。

　爆炎に身を隠すかたちになったフリッツは、何とか落下中に体勢を立て直し、フロアに脚をめり込ませるようにして着地した。即座に、ショルダーキャノンの発射体勢をとる。そのまま、すぐに光弾を発射した。当てずっぽうの攻撃ではない。ナインボールの降下地点で爆発した光弾の爆風は、アナイアレイターとは逆に下からナインボールを突き上げた。余裕を持って着地しようとしていたナインボールが体勢を崩して墜落する。そこへ、フリッツは今度はしっかりと敵をロックオンして光弾を放った。空中で直撃を受けたナインボールが後ろへと吹き飛ばされる。フリッツはキャノンの砲身が折り畳まれるのももどかしげに、ブースターを全開にしてナインボールに突進していった。激しく鋼鉄の機体同士がぶつかりあう。肩の装甲板をひしゃげさせながら、フリッツはなおも加速した。ショルダーアタックをかけたまま、ナインボールの機体をホールの外壁に叩きつける。凄まじい衝撃が、アナイアレイターのコックピットをも震撼させた。

　外壁にめり込むようにして、二機のＡＣは一瞬動きを止めた。

『終わりだ、ハスラー・ワン』

　フリッツはナインボールの右脇腹付近に押しあてたレーザーブレード発振器にエネルギーを注ぎ込んだ。噴出するプラズマガスが、敵の装甲を溶かして内部に流れ込む。アナイアレイターの機体も焼かれるのを無視して、フリッツはぐいとブレードごと手首までナインボールのコアに突き込むと、勢いよくそれを薙ぎ払った。右半身を大きく破壊され、斬り飛ばされたナインボールの右腕が大きく宙を舞ってフロアに叩きつけられた。

　擱坐して横倒しになったナインボールが、破壊された箇所からもうもうと白煙をあげる。フリッツはアナイアレイターを後退させると、ショルダーキャノンの発射体勢をとらせた。

『止めだ!!』

　白煙につつまれるかたちのナインボールに、ピタリと照準を定める。

「待ってください!!」

　まさにトリガーを引こうとしたフリッツの視界に、ナインボールに駆けよる人影が映った。紛れもない、エランの姿だ。

『なぜ止める。危ないから下がっていろ!!』
　フリッツは叫んだ。ナインボールごとハスラー・ワンを消滅させねば、今のフリッツはおさまりがつかない。
「まだだ。ハスラー・ワンの正体をつかむまでは、まだだめだ!」
　怒鳴りながら、エランが白煙につつまれたナインボールの機体によじ登ろうとした。焼けた装甲に火傷しそうになって、慌てて手を引っ込める。
『何を馬鹿なことを。一緒に吹き飛ばすぞ』
　フリッツの警告にも、エランは耳を貸す様子がない。
『こいつのためにビンテージがやられているんだ。そこをどけ』
「わかっています。だからこそ確かめなければならないんです。もし私の仮説が正しければ、まだすべては終わっていないはずです。そのためにも確かめるんです」
　フリッツの言葉に、エランが沈痛な面もちで答えた。だが、その言葉は不可解だ。ナインボールを、ハスラー・ワンを殺せばすべてが終わる。仮に背後に何かの組織があったとしても、そんなことはフリッツの知ったことではなかった。
「あなたは、ハスラー・ワンの姿を見てみたいとは思わないのですか」
　コックピットのあたりに回り込むと、エランが叫んだ。着ていた白衣を右手に巻きつけると、必死にコックピットハッチ上部の装甲を引き剝がそうとする。
『どけ、俺がやろう』

　業を煮やしたフリッツが、エランを下がらせた。アナイアレイターなら、コックピットから黒こげのハスラー・ワンの死体を引きずり出すことなど造作もない。焼かせてくれないのならば、この手で握り潰すまでだ。
　アナイアレイターの手が、ナインボールの胸部装甲をはがして放り投げた。飛ばされた装甲が回転しながら落ちてフロアに突き刺さる。ズンという鈍い音が、ホールに響き渡った。
　そこにハスラー・ワンの姿はなかった。恐ろしく小さいコックピットブロックに人影はなかったのだ。炎に焼かれ、炭化してなくなったというわけではない。周囲の機器の様子からして、死体があったのならば何らかの痕跡が残っているはずだ。
『馬鹿な、奴は逃げたというのか!!』
　フリッツは叫んだ。立ちこめる白煙に紛れたとしか考えられない。だが、そんなことが可能なのだろうか。ビンテージという犠牲を払ってまで、彼はまたもやハスラー・ワンを取り逃がしたというのだろうか。
「やはり、そういうことか……」
　エランはそうつぶやくと、コックピット内部の原形をとどめている部品を集めだした。

ENCOUNTER 4 『マスター』

1

「いったい、どういうことなんだ」
苛立ちを隠さずにフリッツはエランに詰めよった。
「落ち着いてと言っても無理でしょうから、せめて怒鳴らずに聞いてください。私だって、同じなんですから」
胸ぐらをつかみかからん勢いのフリッツに一歩も怯むことなく、エランが冷酷なまでの冷静さを装いながら言った。
プログテック社の襲撃からすでに一週間が経っていた。ハスラー・ワンを倒せばすべてのケリがつく、あるいは新しい何かが始まるとフリッツは思い込んでいた。少なくとも、復讐に明け暮れていた過去とは違ってくるはずだった。
だが、結果は何も変わらなかった。一つのことをのぞいては……。
「結論から言えば、ハスラー・ワンは死んではいない、いえ、より正確に言うのならば未だに存在し続けているということです」
わかっていることをエランが繰り返した。そう、ハスラー・ワンは死んではいなかった。その証拠が、アリーナでのランキングだった。ナインボールの破壊と共に、プログテック社はすぐにレイヴンズ・ネストを通じてハスラー・ワンの死亡を報告した。会社

としては、トップの死亡によるフリッツを含めた順位の繰り上げ手続きをするつもりだったのだ。だが、それはあっけなく却下された。理由は、ハスラー・ワンは健在だというレイヴンズ＝ネストの調査報告書の存在だった。

「回りくどい言い方はよせ。つまり、あそこから脱出したということか。それは不可能だ。あの状態から逃げ出すことは不可能なはずなんだ」

　フリッツは思わず力説した。コックピットのすぐ横を、数万度のプラズマガスで焼かれたというのに、パイロットが無事のはずがない。それに、半壊したコックピットは、人間がいれば肉塊になっているだろうほどに潰れていた。

「私もそう思います。けれども、現実にはハスラー・ワンの死体はなかった。そして、彼は今もアリーナのトップに君臨している。おかしいとは思いませんか。――以前ハスラー・ワンに直接襲われた後、私なりに色々調べてみました。問題点は二つ。一つはもちろんハスラー・ワンの正体。そして、もう一つは彼の属する組織の正体です」

「何かわかったと言うのか」

　聞き返すフリッツに、エランがうなずいた。

「まずハスラー・ワンですが、彼に直接会ったという人物は探し出せませんでした。それどころかデジタルなデータには、彼の記録は一切残っていません」

「隠密性の高いレイヴンなら、ある意味当然だろう」

　フリッツは失望気味に言った。それでは、以前ラナから聞かされたことと同じ内容だ。

「けれども、すべての公的記録が残っていないというのは不自然を通り越しています。そこで、私は情報をアナログに切り替えてみました」

「どういうことだ？」

　フリッツは、一瞬意味をはかりかねた。

「プログテック社のセキュリティ部門を使って、聞き込みをさせたんですよ。人間の記憶というものは、おいそれと消去はできませんからね。噂話に近い情報ですから整理するのは手間でしたが、だいたいの傾向は割り出しました。ハスラー・ワンが関わった企業は、そのすべてが急速に業績を伸ばすか、あるいは衰退しています。それはもう極端なほどに」

「ハスラー・ワンは企業の命運を左右する存在だと言うのか。いくらレイヴンの依頼が企業の利益に直接結びついたものが多いとはいえ、極端すぎる」

　フリッツは信じられないと叫んだ。確かにトップレイヴンになら、最も重要なミッションが回ってきたとしても不思議ではない。けれども、そのすべてが企業の存亡に関わるミッションだけだというのならば、ハスラー・ワンの存在というものは単なる一レイヴンの域をはるかに超えてしまっている。

「でしょうね。ここ一連のプログテック社に対する襲撃も、そのパターンの一つなのでしょう。すなわち、急激な成長を遂げたプログテック社を潰すためのものです」

　ハスラー・ワンの存在の異常さは、エランも感じているようだった。

「だとすれば、黒幕は二大企業のどちらか？」
「普通に考えればそうですね。そこで浮かび上がってくるのが、彼を支援している組織です。誰にも会ったことのないパイロットが、どうしてアリーナに出ることができるのでしょうか。特定の企業が彼のスポンサーである形跡はありません。それどころか、アリーナのメカニックの誰一人として彼を見た者はいないのです。彼はナインボールに乗ったまま現れ、またいずこへともなく去っていくという話です」
「個人で活動しているとかはないのか」
　あえてハスラー・ワンを擁護するかのようにフリッツは問い返した。可能性のすべては、可能な限り検証してみた方がいい。
「レイヴンズ＝ネストがありますから、不可能ではありませんが……。そう、ここで重要なのがレイヴンズ＝ネストの存在です。なぜなら、ハスラー・ワンの情報のほとんどはネット上からある特定の組織によって消されたものであったからです。その犯人がネストです」
　エランが、もう一つの核心にふれた。
「何か証拠でもつかんだのか」
「ダミーで、破壊したナインボールから類推した機体構造上のデータをネットに流してアクセスを監視してみました。案の定、データを消しに現れた者がいました。その進入経路をたどったところ、ネストに辿り着いたわけです」

「危ない橋を渡るものだ。一歩間違えれば、逆に監視を見破られて敵の注意を引きかねないだろうが」
「いまさら、目をつけられても変化はないでしょう」
　フリッツの言葉に、エランが肩をすくめてみせた。すでにターゲットにされている以上、何をやっても状況は変わらないということだ。
「それで、誰かまでは突き止めたのか。本人が自分のデータを消しているという可能性は？」
「それを現在調べています。ハスラー・ワンがネストの回線からデータを操作しているのなら、必ず痕跡があるはずです」
「それはそれでいい。だが、俺が倒したはずのハスラー・ワンが未だに存在するということの説明にはなっていないようだが。ハスラー・ワンという人物はすでに死んでいるか、あるいは今のハスラー・ワンは本物の影武者か名前を継いだ二代目という可能性はないのか」
「あるいは、あなたが倒したナインボールに乗っていたのが影武者だったかですね」
　可能性の一つをエランがつけ加える。
「私はこう思うんですよ、もともとハスラー・ワンという人物など存在しないのではないかと」
「じゃあ、誰がナインボールを動かしているんだ。幽霊が乗っているわけじゃないし、

完全自動で動くACなど存在しないはずだ」
　エランの立てた仮説に、フリッツは大声で言い返した。
「ないわけではありませんが、とても現在のAI技術では、ナインボールのような高度な動きは実現できませんね。現在の技術では……」
　パターン行動プログラムの施された無人型の簡易MTならともかく、本来人間が操縦することで真価を発揮するACがコンピュータ制御で動くはずがない。そこまで高性能のコンピュータやプログラムは存在しないはずだった。
「ですが、もしマーマンのように大破壊以前の技術が応用されていたとしたら、絶対に不可能だとは言い切れません。もちろん、断定はできませんが」
　だが、十分に可能性があるとエランが目で語った。
「だとしたら、確かめてやるだけのことだ。アリーナのナインボールと対戦してみればすべてがわかるはずだ。そこで、俺が必ず奴を地獄の底に叩き落としてやる。もし、それでもまた奴が復活するというのであれば、何度でも何度でも、根絶やしになるまで抹殺してやる。そうでなければ、俺の両親も、ビンテージも、うかばれることはない……」
　フリッツは、自分の進む道をあらためて確認した。それは、終わりの見えない一本道のようにも思える。だが、いまさら立ち止まる気はなかった。果てを見届けるか、途中で倒れるか。そのどちらかだ。
「そんなに一人で業を背負ってどうしようと言うのですか」

　少し心配そうにエランが言った。
「好きで背負い込んだわけじゃない。だが、これは俺の問題だ。情報提供以外は関与しなくていい。あんたには関係ないことだ」
「いいえ。私も、あなたと同じものを一つ持ってしまいましたから……」
　突き放そうとするフリッツに、エランは静かにつぶやいた。彼もすでに同じ道を歩き出していることをフリッツは感じた。まったくタイプの違う人間でありながら、運命は二人を一つに束ねて扱おうとしているようだ。そういえば、ビンテージも同じようだったと、ふとフリッツは思い返していた。

2

　ブレードが、一閃する。五連装ハンドマシンガン（WA Fnger）を持ったディザスターの右腕がスパークをあげながら斬り落とされた。慌てて離脱しようとする敵に、プラズマライフルが止めをさす。
　アリーナランク二位のバンドラボムが、フリッツに屈したのだ。だが、特別な感慨はわかなかった。しょせん、二位は二位。単なる通過点に過ぎない。フリッツは、擱坐したディザスターに背をむけると、それきり振りむきもしなかった。
　真に、残るはナインボールのみとなった。

アナイアレイターのメンテナンスをメカニックに任せると、フリッツは独り控え室に戻った。

静かだった。

いるべきもののいない寂しさというものを、フリッツは痛烈に噛みしめていた。いつの頃からだったただろうか、あれを当たり前だと思い込み始めたのは。

いたたまれない違和感に、フリッツはさっさと控え室を後にしようとした。それを見ていたかのように、室内の端末が呼び出し音を叫んだ。

無視してもよかったのだが、フリッツは静けさを壊すために端末を取った。

『久しぶりだな。ランキング二位、おめでとう』

懐かしいとも言える声が、画像をオフにされた端末から響いてきた。ラナ＝ニールセン。かつてのマネージャーの声だ。

『お前がここまで成長するとは、正直思ってもみなかった。お前は私の思惑をはるかに超える力を身につけた。十分過ぎるほどにな……。覚えているか、いつかナインボールに会わせてやろうと言ったことを』

「ああ、覚えているさ」

フリッツは答えた。まだアリーナに参加もできない頃、フリッツはその言葉だけを頼りに戦っていたのだ。

『アイザック・シティ近郊に、その存在すら知る者のない一つの工場施設がある。そこ

で私は待っている。ナインボールに会いたければそこにやってこい』

一方的に言うと、ラナはそっけなく回線を切った。相変わらず、質問も何も許さないという態度だ。端末には、工場の入り口の位置を記したマップデータが配信されていた。

「いいだろうさ。ハスラー・ワンに会わせてもらえるというのならいってやる。ついでに、お前の正体も拝ませてもらうさ」

携帯端末にマップデータを転送しながら、フリッツはつぶやいた。

転送が終わったとたん、再び呼び出し音が鳴った。またかと思いつつ、フリッツは回線をつないだ。

『フリッツですか』

モニタにエランの顔が映った。

『急ぎ知らせたいことがあって連絡しました。ハスラー・ワンのことです。ネットのデータバンクを探ってみたところ、ナインボールの搭乗者データにはH－1という記号が記されていました。ハスラー・ワンの略号だとは思いますが、人物の名前としてはあまりに記号的です。まるで、何かのパーツのような、そんな印象を持ちました』

「あんたの推測が正しかったということじゃないのか。いまさら大騒ぎすることじゃないだろう。それにしても、ネストのコンピュータに侵入するとは、大胆なことをするものだ」

『こちらも手段を構っている場合ではありませんから』

呆れるフリッツに、エランが不敵に顔をほころばせた。

「それよりも問題なのは、ナインボール関連のデータの中に、かつてあなたのマネージャーであったラナ＝ニールセンの名前が出てきたということです。彼女は、ナインボールと何かつながりがあるはずです。しかも、すでにむこうは動いています。レイヴンズ・ネストとラナ＝ニールセンの名で、あなたのアリーナでのナインボールへの挑戦権が凍結されています」

「これはまた手回しがいいことだな」

フリッツは苦笑した。

「たった今、彼女から呼び出しを受けたところだ。彼女は、どうしても俺を手許に呼びよせたいらしい」

「気をつけてください。それは罠です」

エランが叫んだ。

「当然だろう。そうでなければ俺を呼ぶ意味がない。おそらくは、彼女はナインボールと共に俺を待ちかまえているはずだ。滑稽なものだな。ずっと仇の一員に使われていたなんて」

「では、彼女がナインボールを操っていた真のハスラー・ワンなのでしょうか。いずれにしろ、備えなしに関わるのは危険です」

「もう遅い。俺はこれからすべてのケリをつけにいくつもりだ。ナインボールが操り人

形であるのなら、それを操る者たちを根絶やしにしてやる。ハスラー・ワンはもうチャンピオンじゃない。今はこの俺を恐れる一介の挑戦者だ。そのことを教え込んでやる」

引き留めるエランを無視すると、フリッツは回線を切った。

再び静寂が控え室をつつむ。

足音を響かせながら、フリッツは部屋を出ることにした。ドアから半身を外に出すと、部屋の照明を消す。

「いってくる」

暗闇の中にそう告げると、フリッツはドアを閉めた。

3

ガレージに移動したフリッツは、予想外の足止めをくらうかたちになった。試合後のメンテナンスで、アナイアレイターがパーツ分解されていたのだ。

「組み立てにどれくらいかかるんだ」

フリッツの問いに、メカニックたちはチェック込みで一時間と答えた。悔しいが、整備不良の機体で敵と戦うのは自殺行為だ。今は我慢するしかなかった。

その時間が、エランにガレージへとかけつける時間を与えてしまった。

「何をしにやってきたんだ」

息を切らしてガレージに駆け込んできたエランを見て、フリッツはやっかいごとはごめんだとばかりに顔をしかめた。

「私もいきます。連れていってください」

「馬鹿なことを言うな。いってどうするつもりだ。だいたい、こんな場所にやってくるなんて迂闊すぎるぞ。自分が狙われているということを自覚していないのか」

無謀とも言えるエランの言葉に、フリッツが声を荒げた。

「わかっているからこそ、やってきたんです。私だって、守られているだけの存在ではないつもりです」

エランも簡単には引き下がらない。その決意の強さは、フリッツも認めざるをえなかった。

「ビンテージのことを気にしているのなら、もう十分だ。彼女もレイヴンだった。それだけのことだったんだ。決して珍しいことじゃない」

エランが意気込む理由を察して、フリッツはなぐさめるように言った。それは、フリッツが出撃する理由の一つでもあったからだ。

「あなたは、流す涙もないんですか」

珍しく激昂したエランが、フリッツに詰めよった。

「流すものは涙じゃない。真のハスラー・ワンの血だ!!」

負けじとフリッツも怒鳴り返す。

「すいません。言い過ぎました。でも……」

少しの間睨み合った後、唐突に力が抜けたようにエランが下がった。

「足手まといはごめんだ。俺も、自分のできることで手一杯だからな。あんたも、自分の仕事に戻れ。ケリは、レイヴンとして俺がつけてくる」

その場を動かず、フリッツはエランを追い返す仕草をした。

「わかりました。でしたら、私のできることで、私にも何かさせてください。ナインボールに合わせたアナイアレイターの最終調整、それこそ私の仕事のはずです。そして、それが私にとっての戦いです」

組み立て途中のACを見上げて、エランは力強く言った。さすがに、その言葉を否定するつもりはフリッツにはなかった。

「いいだろう。頼む」

観念したようにフリッツは言った。

「わかりました。あっという間に新しいアナイアレイターを組み立ててみせますよ」

ガレージに現れてから、初めてエランが笑顔を見せる。そして、その言葉は確実に実行されていった。

ジェネレーターは四〇パーセントもコンデンサ出力の高いGBG−XRに変更され、より長時間のブースター使用に耐えられるようになった。ブレードも強力な試作タイプのLS−99−MOONLIGHTに変更され、白兵戦能力が強化された。それらの重量

増加に伴い、脚部は新型重装二脚のLN－S3に変更された。歩行による通常移動能力はかなり低下するが、ブースター移動能力が高くなっている分、遜色はないだろう。重装甲の持つ耐久性の高さは、敵施設内で長期戦になった場合は頼もしいはずだ。

「アナイアレイター＋(プラス)といったところか」

エランの手で素早く組み立て調整されたACを見上げて、フリッツはつぶやいた。

「ええ。必ずあなたの力になってくれるはずです」

エランがうなずいた。

「必ず、戻ってきてください」

「当たり前だ」

エランに答えると、フリッツはアナイアレイターに乗り込んでいった。

4

その工場は、アイザック・シティから見て死角とも言える場所に存在していた。老朽化を理由に廃棄された鉱業ブロックからのびた、閉鎖された連絡トンネルだけが唯一の通路だ。

「さて、どう出る」

分厚いゲート前にアナイアレイターが立つと、待ちかまえていたかのようにゲートが

開いていった。待ち伏せのようなものはないようだ。

フリッツはその中に進んでいった。その背後で、ゲートが重苦しい音を立てて閉じる。どうせ再び開けるつもりはないのだろう。フリッツは気にせず歩き出した。

ゲートの古びた様子とはうって変わって、トンネル内は整備が行き届いている。一定間隔ごとにある隔壁が、厳重にブロックを仕切っていたが、フリッツが近づくとそれらは順次開いていった。そして、通り過ぎていった後の隔壁は順次閉じていく。

『やってきたようだな』

ふいにラナの声が響いた。声は、トンネル内部に響いているものを、アナイアレイターの音響センサーが拾っているものだ。おそらくは、目前に近づいてきた隔壁のむこうから聞こえてくるのだろう。やっと目的地に着いたのだ。

『お前たちはなぜ現れる。なぜ邪魔をする……』

「おかしな言い方をする。まるで俺が何人もいるような口ぶりじゃないか」

つぶやきにも似たラナの言葉に、フリッツは隔壁の手前で立ち止まって訊ねた。外部スピーカーをオンにして、ラナにも彼の言葉が聞こえるようにしてやる。

『そうだ。お前のような妨害要素(ディスターピング・エレメント)は、なぜか不確定確率で発生する』

ラナの返事は、さらに不可解だった。

「妨害要素……邪魔者だとしても、ひどい言われかただな。俺のことより、貴様のことを説明してもらおうか」

「いいだろう。私のところまでやってこい。それができるならば、対等に相手をしてやろう」

ラナの言葉と共に、隔壁のロックが外れる。

「最後まで、居丈高な奴だ」

不敵にほくそ笑むと、フリッツは隔壁を開き同時に中へ突入していった。一瞬の差で、扉付近の床をパルスレーザーが焼き焦がす。姑息な攻撃だ。

一気に奥までブースターダッシュで突き進んだフリッツは、素早く室内の配置を頭に叩き込んだ。円筒状の室内の中央には旧型化した巨大な動力炉のような物が天井を突き抜けるかたちで立っている。おそらくは、軌道上の発電衛星からマイクロウェーブを受信するレクテナシステムの一部分だろう。工場の存在を悟られないために、必要時のみ受信部と反射板を地上に露出させて展開するものだ。室内の高さは十分にあるものの、それが障害物となってミサイルや長射程武装は使いづらい。内壁には一定間隔で回廊状にテラスが張り出している。こちらは、戦闘時の足場として使えそうだ。

敵の初撃をかわしたフリッツが上を見上げると、上方からナインボールがパルスレーザーガンを撃ちながら降下してくる。まったくの予想通りの展開に、フリッツは思わず笑い出したくなるのをこらえてジャンプした。

空中で激突する寸前に、二機のACはブレードを素早く振り払いながら左右に分かれた。上昇していたアナイアレイターが、一段高いテラスに足場を確保する。ナインボールはいったん床まで落ちて着地すると、ブースター出力を回復させて飛び上がった。

フリッツはその場でショルダーキャノンを構えて、敵を待ちかまえていた。上昇してきたナインボールの機体が、ぬっとモニタ上に突然現れる。同時に、パルスレーザーがアナイアレイターの機体を焼いた。フリッツはその攻撃を無視すると、確実な狙いで光弾を放った。

互いに出会い頭を狙った攻撃でも、その威力が違いすぎる。直撃を受けたナインボールが吹き飛ばされ、中央の構造物に激突した。チャンスを逃さず、フリッツが第二撃を叩き込む。敵の機体が背後の機械にめり込んだ。回復の暇を与えず、アナイアレイターがナインボールめがけて跳んだ。見上げるナインボールの頭部を踏みつけるようなかたちで、機体重量のすべてを加重としてぶつける。その勢いに、ナインボールの機体が落下を始めた。ブースターを使ってアナイアレイターが前面から押さえつけているために、なす術がない。構造部の表面を背部で削り取るようにして、華々しいスパークをあげながらナインボールは落ちていった。落下を止めようと点火されたブースターが衝撃で誘爆を起こし、装置の表面に大穴を開ける。寸前でフリッツは離脱すると、墜落していくナインボールにプラズマライフルからビームを数発撃ち込んだ。床に激突したナインボールが、そのまま停止する。フリッツは油断なくその機体に近づいていくと、ビームを受けて灼熱したコアをアナイアレイターの脚で蹴り飛ばした。電子戦コアの特徴的な胸の張り出し部が脆くも砕けて飛び散る。

あらわになったコックピットには、やはりパイロットの姿はなかった。
「まさに血も涙もない操り人形とはこのことだな」
見下げるようにフリッツは言った。
『本来あるべきお前と同じようにな。ナインボールは、私の分身であり、そしてお前自身の分身でもある』
ラナの声が響いた。ナインボールの敗退にも動揺を見せてはいないようだ。
「俺は心を持たない機械人形とは違う。こんな物に負けはしない!!」
『そうであるなら、その力とやらを見せてみろ……』
ふいにラナとは違う男の声が響いた。フリッツはその声に聞き覚えがあった。ナインボールから聞こえてきたハスラー・ワンのものとされる声だ。
『私は、奥で貴様を待っている』
ハスラー・ワンが言った。では、いよいよ本当のハスラー・ワンが待ちかまえているというのだろうか。
「慌てなくとも、今そちらへいってやる」
フリッツはブースターを噴かしてアナイアレイターを上昇させた。下にそれらしき扉は見えない。ナインボールが上から現れたことからして、奥への入り口は上方にあるはずだ。
予想通りゲートを見つけると、フリッツはその中に入っていった。進んでいくと、扉

の先に透明な素材で作られた空中歩廊が現れた。そこからは、この施設の主要部である工廠を見下ろすことができた。
「これは……」
思わずフリッツは声をあげた。アナイアレイターを立ち止まらせて、周囲を見回す。
そこに見えた物は、ハンガーに設置された何体ものナインボールの群れだった。さすがに、その数は脅威だ。それにしても、人間の姿は先ほどから一人も見ることができない。戦闘を予測して避難しているのか、あるいはこの工場全体が完全自動で運用管理されているかだ。
『お気に召したかな』
自慢するかのようなラナの声が響いた。
「悪趣味なものだな。これだけの数の人形を作って、いったい何を企んでいる。アイザック・シティを武装占拠でもするつもりか?」
『面白い冗談だ』
ハスラー・ワンが答えた。わざとらしくラナと交互に答えるところが、フリッツの癇に障る。
『ナインボール、ＡＣ技術、それを管理するレイヴンズ＝ネスト、企業……。すべてはこの私が作り出したものだ』
歴史の教科書でも読むような口調で、ラナが語りだした。

『――荒廃した世界を、衰退した人類を救済する』
ハスラー・ワンの声が、ラナの声に重なっていく。
『――それが私の使命……』
最後には、二人の声はピッタリと重なって工場内に虚ろに響いた。もはや二人の言葉は一体化し、寸分の違いも見られなくなった。二人で一つの人格、いや、最初から一つの人格の音声を変えて、それぞれをラナ＝ニールセン、ハスラー・ワンと呼んでいたに過ぎないのだろうか。
「貴様たちは何様のつもりだ。すべての組織をお前たちが作っただと。馬鹿らしい。創造主にでもなったつもりか」
あまりに荒唐無稽な言葉を、フリッツは笑い飛ばしてみせた。ＡＣ技術が誕生したのは五〇年近く前のことだ。シティを管理する企業体連合に属していた大企業や、レイヴンを管理するレイヴンズ＝ネスト、そのすべてはフリッツの生まれる前から存在していた。
『私は管理者であり、遂行者だ。大破壊で荒廃した世界のもっとも効率的な再建のため、すべてのバランスを管理する役目を担っている』
「誰がそんなことを頼んだと言うんだ」
『総意だ』
ラナとハスラー・ワンは答えた。

『絶望を覆す希望として、人々の総意が我々を生み出した。その第一の願いが、大破壊の再発の防止。そのためにACが、レイヴンズ＝ネストが生まれた。唯一の存在が誕生しないように、パワーバランスを保つ調整者として。第二の願いは、人類の再生。そのために企業が生まれた。管理されたプログラムの遂行者として。健全な発展は競争のもとに行われ、過不足はレイヴンが調整する。それこそが、我々の定めた理想的な人類再生計画……』
「お前たちは……。お前たちは、本当に人間なのか!?」
フリッツは絶句した。彼らの言っていることが本当だとしたら、この世界のすべては何者かが計画したレールの上をなぞっているだけということになる。そこには、感情も、善悪すらも存在しない。
『そのようなことを聞いてどうする。確かめたとしても、それは無意味な情報に過ぎない』
「無意味かどうかを決定するのは、貴様じゃない。俺のことは、俺自身が決める!!」
怒鳴り返すと、フリッツは再び奥にむかって走り出した。透明歩廊を抜けてなおも進むと、突き当たりに一基のリフトが待ちかまえていた。迷うことなくフリッツはそのリフトでさらに地下へと降りていった。もはや引き返すことはできはしない。
『プログラムの調整は、レイヴンの本来の目的。力を持ちすぎた者を淘汰し、バランスを元に戻すのがその役目。なのに、なぜお前のような者が現れる。力を調整する存在の

はずのレイヴン自体が力を持ちすぎること、それは危険だ……』

引き続き声が響く。フリッツはもはやその声を無視した。

かなり下がって、やっとリフトが停止した。ただ一本の通路が先にのびている。近づくと、分厚い隔壁が音を立てて開いた。そのすぐむこうにも隔壁がある。何重にも設置された隔壁を次々と開いて、フリッツは進んでいった。そして、最後の扉を開き、アリーナのドームのようなホールへと到着した。

背後で扉が閉じる。そこには、二体のナインボールが静かに待ちかまえていた。

『力を持ちすぎた者。秩序を破壊する者。プログラムには不要だ』

つぶやきにも似た言葉と共に、攻撃が開始された。

さすがに、同時にナインボールを二機も相手にするのは辛いものがある。降り注ぐパルスレーザーの光条を避けながら、フリッツは敵を直線上に誘い込むように移動した。そのまま、片方に的を絞って、ブレードで白兵戦を挑む。当然のように、接近された方のナインボールが、ブレードで対抗してきた。

フリッツは斬り結びながら、敵の相対位置に常に気を遣いながら移動していった。味方のナインボールをアナイアレイターとの直線上に認識して、一方のナインボールの攻撃の手が止まる。思った通りの機械的な反応だ。人間なら、互いに連絡を取り合って挟み撃ちにするところを、単機での制圧用にプログラムされているナインボールでは連携プレーというものを理解していない。一機で十分にミッションをこなせるという製作者

のおごりが、操り人形に自ら枷をはめてしまっている。

フリッツは敵の欠点を確信すると、斬り合いを続けながら、わざと敵の射線上にアナイアレイターを移動させた。満を持して待ちかまえていたナインボールがショルダーキャノンを放つ。それこそ、フリッツの思うつぼだった。一瞬だけわざと見せたすきを逆手にとって、斬り合いを演じていたナインボールの機体をなめるようにして見事にその背後に回り込む。一太刀あびせかけながら、フリッツは急速後退した。慌てて後を追いかけようと回頭したナインボールの背中に、味方の放った砲弾が直撃する。大破しながら、突き飛ばされるようにしてナインボールがアナイアレイターの方にやってきた。待ちかまえていたフリッツは、出力を最高にまで高めていたブレードを一閃させた。コアと脚部のジョイントを一撃で両断され、ナインボールが二つの鉄塊と化した。一瞬後に爆発して四散する。

背後の爆炎に漆黒の機体を紅く染めながら、アナイアレイターは素早く真横へと移動した。かわされたキャノンの第二撃が、ナインボールの爆炎と混ざり合うようにして炸裂した。

これで戦力は一対一になった。対等ならば、今のアナイアレイターがナインボールにひけをとる理由など一つもない。

フリッツは、移動しながらプラズマライフルで残るナインボールを狙撃した。サイドをとられたナインボールが、いったん態勢を立て直すためにブースター移動で間合いを

離す。フリッツは通常移動でエネルギーチャージを回復させると、素早く敵の姿を追った。

緩急をつけた移動で、敵の動きに合わせて確実に狙撃する。飛来する敵ミサイルを迎撃すると、フリッツはブースターを使った巧みなフットワークで、急速に敵との間合いを詰めていった。数発のビームを受けるが、被害と言えるものはない。

アナイアレイターが左腕にブレードを発生させると、それに応えるかのようにナインボールもブレードを形成して構えた。

「馬鹿正直め……」

一気に踏み込んで斬りかかると見せかけて、フリッツは軽くステップを踏んでフェイントをかました。瞬発的な後退を行い、ナインボールの振ったブレードを紙一重でかわす。敵のモーションが終わらないうちに、フリッツは近距離からビームを撃ち込んだ。高出力ビームの直撃を受けて、ナインボールのミサイルランチャーが吹き飛ぶ。敵が体勢を崩すところへ、今度こそ懐に飛び込むと、フリッツはブレードをナインボールの腹部につき入れた。とどまることをしらない勢いに、機体が激しくぶつかりあう。フリッツはそのまま左腕を上に突き上げた。コアごと切り裂かれるようにして、ナインボールの半身がごとりと落ちる。切り口から、血潮のように炎が噴き出した。

崩れるようにして倒れるナインボールからフリッツが離れると、噴き出す炎がジェネレーターに引火して敵が爆発を起こした。

「人形などいくつ繰り出してきても無駄だ。何なら手持ちのナインボールをすべて出してきてもいいぞ」

フリッツは大見得を切った。こんな消耗戦をしいられては彼の方が不利だ。尻尾ではなくて頭を叩き潰さなければ、戦いは終わらない。

「しょせん、機械の玩具など人間の敵ではないんだ。そうは思わないか、ラナ・ニールセン、ハスラー・ワン、いや、そう名乗るだけの卑怯者め。もし貴様が実体を持っているというのなら、それで俺の相手をしろ。そうでなければ、貴様などただの虚構だ」

フリッツは盛んに敵を挑発した。だが、すぐには応えはない。

『いいだろう』

無駄だったかとフリッツがあきらめかけたとき、ラナたちが答えた。

『私は、秩序を守るために生み出された。私の使命を守り、この世界を守る。そのためには、確実に破壊因子である妨害要素を消去する。くるがいい、H－1ユニットによる末端デバイスではなく、マスターシステムの一部である私たちが直接相手をしよう』

その言葉と共に、ドームの外壁の一部にゲートが現れた。

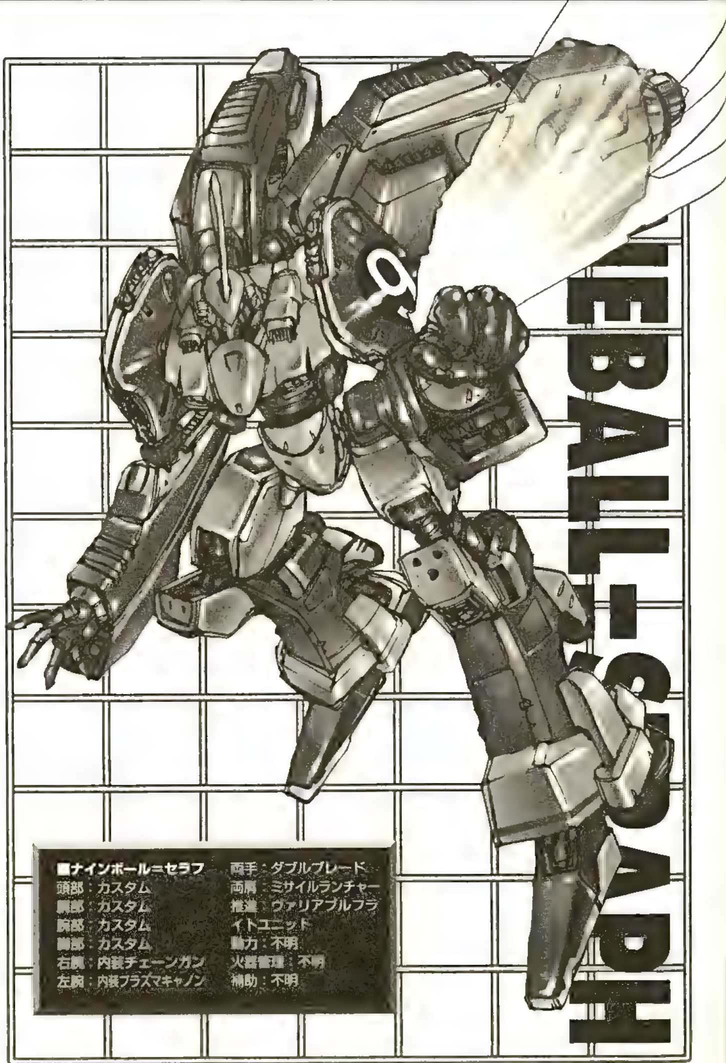
「いいだろう。その挑戦を受けてやろうじゃないか」

あくまでも自分こそがマスター・オブ・アリーナであり、貴様たちは今や挑戦者なのだということを誇示しながら、フリッツはその扉の中に入っていった。

長い通路の奥に、小部屋があった。扉がフリッツを招き入れるように開く。ドーム状

のホールの中央に、柱の集合体にも似た物が据えられていた。扉からそこまでは、ＡＣが歩いていけるほどの橋（ブリッジ）となっている。
『ついに直接会えたというわけだな』
ラナの声が、その中央の物から発せられた。
『いや、それは正確ではないだろう。我々はここに存在するとともに、ここには存在しないのだから』
ハスラー・ワンの声が言った。
「コンピュータ……」
ラナたちの正体にあぜんとしながら、フリッツはプラズマライフルを掲げた。まったく予測していなかったと言えば嘘になるが、彼にとってはもっとも馬鹿らしい結末の一つだった。この世界のすべてが機械などに踊らされていたというのは、悲劇を通り越して滑稽でしかない。
『我々を破壊するつもりかな』
「俺と戦うつもりだったはずだろう。だが、そんな箱の中におさまったプログラムの分際で、どうやって戦うつもりだ」
冷静に問いかけるハスラー・ワンに、フリッツは銃口をむけながら言った。
『我々を破壊したとしても、全体から見れば修正可能な誤差でしかないとなぜ気づかない。ここは我々の本拠地ではないのだぞ。単なる一工場だ。我々のマスター・システム

はレイヴンズ＝ネスト本部にある。これは、我々の持つ身体の一つにしか過ぎない』
すべては無駄なあがきだったのだと、ラナがフリッツをさとすように言った。
「ならば、ここを破壊した後、貴様たちの端末をすべて破壊してやろう。最後には、貴様たちのマスターシステムもな。見たところ、貴様たちの入れ物は、さっきから自慢そうにしている大破壊前の技術の集大成のようじゃないか。壊されてしまったら、替えは利くのかな」
フリッツの言葉にすぐに答えはなかった。どうやら図星のようだ。
「すべてを殲滅すれば、俺の勝ちだ。それとも、そのご自慢の技術をすべて解放して、俺たち人間の手にゆだねるか。そうすれば、何年後かには同じ型のシステムを作れないこともないだろう。もちろん、貴様たちの計画は破棄することになるがな」
フリッツは勝ち誇ったようにからからと笑った。後はトリガーを引き絞るだけで、この端末は停止する。
『いいだろう。ここから生きて出ることができたならば、実行してみるがいい』
再び一つとなった男女の言葉と共に、突然アナイアレイターの足下がぽっかりと暗黒の口を開いた。
「しまった……」
プラズマライフルを撃つこともなく、アナイアレイターは奈落の底に落ちていった。落とし穴などという古典的な手に引っかかるなど、油断しすぎていた。



ブースターで戻ろうと思ったとき、短い落とし穴は終わり、突然視界が開けた。天然の大洞窟。

いつかヴェルフェルと戦った場所に匹敵するほどの規模の空洞だ。

その一点に、何か見える。

フリッツは戦闘態勢をとりながら、冷静に空洞の地面へと降下していった。

『修正プログラム最終レベル起動。右腕部内装チェーンガンシステム確認。左腕部内装プラズマキャノンシステム確認。両手部ダブルブレードシステム確認。肩部ミサイルランチャー確認。背部ヴァリアブル・フライト・ユニット・ワン、およびツー確認。オールグリーン。ナインボール＝セラフ、戦闘モード起動』

空洞内に、ラナたちの声が不気味に響いた。待っていたのは、ナインボールによく似たカスタムＡＣだ。大きさ的には一回りほどナインボールよりも大きく、背中には独立稼働する二基の巨大な推進器があった。その大きさはＡＣの全高とほぼ同じくらいになる。たたずむ姿は、甲虫の羽根かマントを羽織っているようにも見える。

「なるほど、これが貴様たちの切り札だと言うわけだ」

着地したフリッツは、そのＡＣを見て先ほどまでの敵の自信の理由を納得した。このＡＣを倒さなければ、先ほどのコンピュータルームに戻ることは不可能だろう。逆に、今度こそ残る障害は目の前のＡＣだけだった。

『ターゲット確認。排除開始』

アリーナの試合開始にも似たナインボールの言葉が、戦いの始まりを告げた。

掲げられたセラフの右腕から、凄まじい勢いで弾丸が吐き出された。最初の挨拶としては、容赦ない攻撃だ。たまらず、フリッツはブースターダッシュで横に機体をすべらすようにして射界から逃げ出した。プラズマライフルで応戦しながら崩れた体勢を立て直す。セラフが動いた。両翼の推進器が翼のように起き上がり、凄まじい炎を噴き出しながら咆哮した。セラフの巨体が、空中へと飛び上がる。慌ててライフルの砲身を上にむけるが、アナイアレイターのＦＣＳはセラフの動きに追従できず、ビームは天井の岩盤を焦がすだけであった。

「速い！」

確実に、さっきまで対してきたナインボールたちとは違う。さすがに切り札にするだけのことはあると、フリッツは気を引き締めた。

悠然と空中に浮かんだセラフは、プラズマキャノンとミサイルをアナイアレイターにむかって一斉に発射してきた。出力を全開にしてフリッツはその攻撃を回避した。空洞内の地面を炎で埋め尽くすように爆発の華が次々と開いていく。

圧倒的な火力に対し、いつまでも閉鎖空間で逃げ切れるものではない。直撃ではないものの、至近弾の爆風に木の葉のように揉まれ、アナイアレイターは地面を転がった。

爆発の炎でフリッツを見失ったセラフが、一息ついた。閉鎖空間で舞い上がった石の破片や粉塵がおさまるのを待つようだ。

その圧倒的な攻撃力に、さすがにフリッツは驚異した。あの水陸両用ＭＴのような、失われた過去の技術を持つ組織、それがレイヴンズ・ネストであり、その産物が今眼前にいるナインボールのカスタムタイプなのだ。

「過去の亡霊め……」

フリッツはつぶやいた。

攻めるなら今しかない。フリッツは、粉塵に隠れながら垂直ミサイルを発射した。

空洞の天井すれすれまで上昇したミサイルの半分が岩盤に命中し、残りが軌道を変えて空中のセラフにむかう。敵は即座に回避運動に移った。ＶＦＵのサイドにあるスラスターノズルが咆哮し、セラフが高機動を発揮して逃げる。その後を、三基のミサイルが執拗に追いかけた。だが、追尾中に天井の岩盤に接触し、爆炎と共に石の破片の雨を空洞内に降らす。

フリッツは粉塵の中から一気に飛び出すと、降り注ぐ石をものともせず、セラフにむかってジャンプした。ブレードを発生させると、プラズマライフルを撃って敵の動きを牽制しながら一気に下から肉薄して空中での白兵戦をしかける。

迎え撃つセラフの両腕から、赤い光剣がのびた。自らの機体の前方でサーベルをクロスさせて、逆に突っ込んでくる。ＡＣのサーベルは、堅い刀身を持たないプラズマで形成された剣だ。当然サーベル同士で受け止め合うということはできない。交差した瞬間に相互干渉でいったん拡散した後、即座に元のように再形成される。まともに斬り合え

ばよくても相討ちだ。しかも、敵の出力の方がこちらに倍する以上、こちらの致命傷になりかねない。

両者の軌道が交差する寸前、フリッツはブースターを全開にしてむりやり上へ逃れた。足の下、紙一重の位置をセラフが外側にむけて薙ぎ払った一本のブレードが通り過ぎた。かろうじて敵の攻撃を回避したものの、無理な回避運動のため天井に機体をこすりつけるようにして衝突する。その衝撃の反動で、アナイアレイターがそのまま墜落を始めた。

止めをさそうと、セラフが反転して接近してきた。左腕のプラズマキャノンの照準を、真上からアナイアレイターに合わせてくる。

「まだ、俺はやられちゃいない！」

フリッツは、真上にむけてミサイルを連射した。予期していなかった攻撃に、セラフが機体をロールさせて回避する。

「逃がすか！」

なおもミサイルで執拗に責め立てながら、フリッツは回復しきらないコンデンサのエネルギーをすべてブースターに回して機体を持ち上げた。ロールから反転してきたセラフが、下方向からアナイアレイターに急迫する。

エネルギーチャージ残量がレッドゾーンに突入したのも構わず、フリッツはプラズマライフルをセラフにむけた。実際には連戦で消耗しきったため、撃てても後一発というところだろう。だが、それと気づかないセラフは、攻撃を避けようと進路を下に変えた。

ミサイルの射界を避けて、動きの鈍くなったアナイアレイターの下をくぐって背後に回り込むつもりだ。

「引っかかったな」

フリッツは、ミサイルランチャーの発射口近くへ、肩越しにブレードを近づけた。そのままミサイルを一発発射する。ブレードにふれたミサイルが、当然のごとく誘爆した。アナイアレイターを直撃した爆風が、機体を下に押し下げる。常識的に考えたら、それはあまりに無謀な行為だ。いくらわざと攻撃を多くして残弾を減らしてあったとはいえ、一歩間違えば機体ごと誘爆しているところだ。だが、それだけに機械には予測不可能な行動だろう。

セラフの背中にアナイアレイターが墜落するようなかたちで二機が接触した。フリッツはマニピュレーターでセラフのVFUをつかむと、セラフの首に腕を回してしがみついた。思いがけないフリッツの行動に、セラフは機体をロールさせてアナイアレイターを振り落とそうとした。そうはされてたまるかと、フリッツも必死にしがみつく。

「落ちるのなら、貴様も一緒に落ちろ！」

フリッツはプラズマライフルをVFUに押しつけると、０距離でビームを撃った。撃ち抜かれたVFUから炎が噴き出し、アナイアレイターの右腕を焼いた。フリッツは構わず連射しようとしたが、プラズマライフルはすでに反応しなくなっていた。

セラフが、何とか機体を安定させようとする。フリッツは役に立たなくなったライフ

ルを投げ捨てると、アナイアレイターの手でセラフのVFUを引きちぎりにかかった。推進器に無理な力をかけられて、セラフの飛行が激しく乱れた。アナイアレイターが、VFUを捻った。加速しつつ、もみあった二機のACがきりもみしながら墜落していく。

下になったのはセラフの方だった。地面を構成する岩盤に機体全体をこすりつけるようにして激突する。衝突の衝撃で、アナイアレイターはセラフの機体から放り飛ばされた。もんどりうつようにして、二機のACは転がっていった。細かな破片が周囲に飛び散る。

初めて、戦闘の喧噪が一瞬止んだ。

永遠とも思える一瞬の後、セラフが耳障りな金属摩擦音を立てながら動き出した。だが、墜落のショックで変形したVFUが邪魔になって、思うように立ち上がることができずにいる。

「ううっ……」

やや遅れて、フリッツも意識を取り戻した。コックピット内には異常を示す警告ランプが無数に点いていたが、基本動作には何とか支障はないようだ。武装も、まだブレードとショルダーキャノンが生きている。ジェネレーター出力はかなり低下しているが、何とかなるだろう。奇跡的と言っていいほど損傷は少なかった。問題は、敵の損傷の度合いだ。

「まだ動いているのか」

周囲を見回したフリッツは、何とか立ち上がろうとしているセラフを見て絶句した。

「引き際はわきまえろ！」

フリッツはアナイアレイターを立ち上がらせると、ショルダーキャノンを展開して発射体勢をとった。セラフもネックとなっているVFUを強制排除すると、ようやく機体を立ち上がらせた。

「消えてなくなれ！」

フリッツは叫びながらトリガーを引き続けた。ありったけのプラズマ光弾が、低下したエネルギーを使って何とか発射される。怒りと今までのすべての思いを込めた光弾が、セラフの機体をつつみ込む。やがてエネルギーのオーバーロードを知らせる警告音がコックピット内に鳴り響き、フリッツはやっとトリガーから指を放した。

セラフは炎につつまれていた。片膝をついたまま、がっくりとうなだれている。

「終わったか……」

フリッツはほっと息をついた。だが、停止したかに見えたナインボール＝セラフのシステムは、まだ生きていた。

『妨害要素は消去する……』

呪うように言葉が繰り返され、突如セラフが前進を始めた。だが、その一歩目で、左腕が脆くももげ落ちた。機体の破損には構わず、セラフが右腕をあげた。内装されたチェーンガンの砲身がのびて発射態勢をとる。だが、そのとたんに右腕が爆発した。満身

創痍となりながらも、なおもセラフは前進しようと機体をもがかせた。そのまま、前のめりに倒れて炎を機体各部から吹き上げる。
『これで終わりではない。まだネストは健在だ。我々がマスターであることは間違いない。この工場のシステムも、ナインボールも、ラナ＝ニールセンという存在も、我々の意志の一部でしかないのだ。我々は滅びはしない。時と共に貴様が朽ち果てたとしても、我々は存在し続けるだろう、永遠に……』
　ゆっくりとした声が聞こえてきた。
「俺たちは貴様たちなど必要としてはいない。貴様たちのようなものこそ不要だ」
『すでに手はうった。お前たちは修正される運命だ。貴様も、この工場と共に……。すべては人類のためだ……』
　フリッツの声が聞こえているのかいないのか、声はだんだんと小さくなりながらも続いた。
「運命なら自分の手で切り開く。さあ、消えてなくなれ!!」
　フリッツは叫んだ。同時に、回復したエネルギーによってショルダーキャノンのチャージが完了する。迷うことなく、フリッツはトリガーを引いた。光弾が、ナインボール＝セラフの機体を今度こそ跡形もなく吹き飛ばす。
「残るは……」
　フリッツは上を見上げた。天井の一角に、彼が落とされた穴がぽっかりと空いている。

　フリッツはその真下近くに移動すると、ショルダーキャノンから光弾を一発撃ち込んだ。爆音と共に、炎が噴き出してくる。これで、穴の蓋はなくなったはずだ。
　フリッツは咳き込むブースターを鞭打つと、空洞から脱出した。爆風を受けたコンピュータルームでは、火災が発生していた。中央のコンピュータも煙を出し始めている。
「しょせんは機械だ。あっけないものだな」
　確実に止めをさすべく近づきながらフリッツは言った。
『そうかもしれんな』
　突然、コンピュータがフリッツに語りかけてきた。それは、ラナ＝ニールセンともハスラー・ワンとも違う声だった。
「貴様は……!?」
『名前はすでに捨てている。モジュール・ナンバー3とモジュール・ナンバー7のように、人間名を使う必要がないのでね』
「すると、貴様も、端末の一つか」
『我々は、意志の集合体なのだよ。七つの人格で一つのシステムを構成している。大破壊前に作られた、一つの傑作かもしれないな。もっとも、ナンバー3とナンバー7は、君と戦ったナインボール＝セラフのコントロールを直接行ったため、破壊されたときのフィードバック負荷で現在は復旧作業中だが。さすがに、我々が直接コントロールするＡＣを撃破されるとは計算外だった』

「それが傲慢だと言うんだ。待っていろ、貴様たちもそのうち破壊してやる」
『それはどうかな。まあ、おかげで問題点がいくつか判明した。一つ新しい研究機関でも設立して、ナインボールの強化をはかるとしよう。強化人間（プラス）の技術が機械制御（マシンコントロール）の最適化を促進してくれるだろう。とにかく、礼は述べさせてもらうよ。もし、ここから脱出できることがあったら、あらためて挨拶させてもらうことにしよう。脱出できればの話だがね』
　その言葉と共に、地響きのような振動が伝わってきた。敵はこの施設ごとフリッツを葬るつもりのようだ。
「心配には及ばない」
『そうか。なら、そろそろ回線を閉じさせてもらうとするよ』
「ああ、フリッツ＝バーンとアナイアレイターに再会できる日を楽しみに待っていろ」
　フリッツは、自らの名とＡＣの名をあらためて敵に伝えた。
『記録しておこう。それでは失礼する』
　その言葉を最後として、フリッツはブレードでコンピュータを破壊した。後は脱出するだけだ。フリッツは、たどってきた道を急いで戻っていった。

エピローグ

『アナイアレイター』

「そんな馬鹿な、本社が壊滅したですって……」
「ええ、たった今シティ・ガードから連絡が入りました」
連絡を受けたメカニック・チーフの言葉に、エランをはじめとするプログテック社の社員であるメカニックたちは呆然とその場に立ちすくんだ。
「赤いACを中核とする、正体不明の部隊だそうです。おそらく、前に本社を襲ったのと同じ奴らでしょう。残念です」
チーフは、そう言葉を続けた。
「もしナインボールが本社にむかったのだとすると、フリッツの方にはいったい……」
エランが困惑していると、何か別の問題でガレージがざわめきだした。急ぎかけつけてみると、ぼろぼろになったACが一機搬入されてくる。
「アナイアレイター！　フリッツ、無事なんですか!?」
エランは大声で叫ぶと、ACに駆けよっていった。
アナイアレイターの状況はひどいものだ。ブレード発振器は過度の使用でマニピュレーター部を含めて焼け焦げ、その他の武装はすべてなくなっていた。装甲表面は無傷の場所を探す方が難しく、頭部メインセンサーの保護バイザーも、ひびが入って一部欠損していた。

「フリッツ!!」
　再度、エランが叫んだ。その声に応えるようにして、ようやくコックピットハッチが開く。多少ボディが変形しているのか、メカニックが数人手を貸さなければ完全には開かない様子だった。
　そして、中からはフリッツが無事な姿を現した。エランがほっと胸をなで下ろす。
「よくもまあ、無事で」
「帰ってくると約束しただろ。きっちりとケリはつけてきたつもりだ」
　そう答えながら、フリッツは元気にハンガー脇のタラップを駆け下りてきた。
「さすがに工場を爆破されたときは脱出に手間取ったが。何とか、レクテナシステム用の旧式のアンテナを動かして、それを使って地上に脱出することができたという次第だ。どうした、浮かない顔をして？」
　フリッツに問われて、エランがプログテック社の壊滅を告げた。
「そうか。奴らが、一部はすでに手をうったと言っていたのはこのことだったのか」
　悔しくは思ったが、いまさらどうしようもないことだった。エランやここのメカニックたちには気の毒だが、いまさらプログテック社がなくなったとしても、フリッツにはどうでもいいことだった。
「どうやら、敵は最初から両面作戦をとって、最悪でも私たちのどちらかを葬り去ろうとしていたようですね」

「だが、さすがにあんたがここにくるとは予測できなかったわけだ」
　しょせん、機械は人間の感情のすべてを推し量ることなどできはしない。だからこそ、すべてをゆだねることはできないのだと、フリッツは心の中で繰り返した。
「けれども、会社がなくなってしまえば私に対しては社会的に葬ることができたも同じです。あなたはこれからどうするつもりですか？」
　不安を隠しきれずに、エランがフリッツに訊ねた。
「レイヴンズ＝ネストはまだ存在している。真の敵は、この世界のすべてを裏から管理しているネスト本部のコンピュータシステムそのものだ。詳しくは後で教えるが、俺はこれから、そのシステムすべてを殲滅するつもりだ」
「そんな無茶な。できるはずがありません。たった一人で、レイヴンすべてを敵に回すつもりですか」
　びっくりしたエランが大きな声をあげた。誰が聞いても、無謀なことに違いないと言うだろう。
「なら、どうする。びくびく隠れながら一生を過ごすか。俺はこのＡＣに乗るときに最初に誓ったんだ、すべての敵を殲滅すると。だからこそ、俺の分身にアナイアレイターと名づけた。それに、すべてのレイヴンが敵とは限らないだろう」
　フリッツは、ラナたちの言葉を思い出しながら言った。確かに、奴らはフリッツのような人間が何人か現れていると言ったのだ。それらの人間が生きているのかはわからな

いが、彼らと手を結ぶにしろ結ばないにしろ、奴らに逆らうのはフリッツ一人では決してないということだ。中には、もしかしたらビンテージのようなレイヴンもいるかもしれない。そのときは、たっぷりと彼女のことを自慢してやろう。フリッツが認めた数少ないパートナーだと。

「自分も、今は帰る場所を失いました。一緒に連れていってはくれないでしょうか。これから先、ACを整備する人間が必要でしょう」

エランが申し出た。彼も、決意を固めたらしい。そう、彼もまた、大切なパートナーとなっていた。

「追われることになるぞ」

「構いません。どのみちネストは私たちを放っておいてはくれないでしょう」

「違うな。俺たちがネストを放っておかないのさ。主導権はあくまでも俺たちにある。過去が敷いたレールなんかぶち壊してやるさ」

その困難さなど微塵も感じないように、フリッツはつとめて明るく言い切った。もはや復讐は彼を縛ってはいなかった。今の彼が憤りを感じているのは、彼の自由を阻害する存在に対してだ。レイヴンは、自由であるべきなのだから。

「二人とも、これからどうしたらいいのか教えてくれないか。会社がなくなっちまったら、どうしていいかわからないんだ。何なら、あんたたちに雇われてもいい」

未だに困惑から抜け出せないでいるメカニックたちを代表して、チーフが二人に声を

かけてきた。

「金ならあるが、俺たちについてくるかは話を聞いてからにした方がいいぞ」

追われるリスクを思って、フリッツはチーフたちに考える時間を持つように言った。

「ひとまずは、アナイアレイターの予備パーツを揃えてください。できるだけたくさん。それと、それらを積めるキャリアの手配を」

すかさず、エランが最低限必要な物の手配はする。メカニックたちがついてくるにせよこないにせよ、戦闘を維持できるだけのパーツは必要だ。

指示を仰ぐチーフたちに呼ばれて、エランが駆けていった。

そうそう長居はしていられないだろう。すぐにでもここを離れて身を隠さねばならない。

フリッツは、感慨深げに慣れ親しんだアリーナのガレージを見回した。

「アリーナか……。しばらく留守にするが、忘れるんじゃないぞ。お前の主（マスター）はこの俺だ」

そして、この日一人のレイヴンがアリーナを巣立っていった。その名は、今も好敵手たちの心の中に刻まれ続けている……。

And...
What did you become?

あとがき

またもやページがなくなっちゃいました。なぜなんでしょう。

今回は、前回の直接的な続編ではなく、一九九九年二月四日に発売されたプレイステーション用ゲームソフト『アーマード・コア　マスター・オブ・アリーナ』のストーリーそのままのノベライズになっています。と言っても、細部はかなり変えてありますので、ゲームの話そのままというわけではありませんが。ピンテージなどのオリジナルキャラも登場していますし。

で、今回ペコちゃんは結構お気に入りです。まあ、純粋オリジナルの機体はペコちゃんとアベンジャーだけですけれど。その他の機体はすべてゲーム中に出てきますので、実際にゲームで確認してください。でも、アナイアレイターは基準違反機体なんですよね。アナイアレイター＋なら作れると思います。リャノン編の続編ではフリッツはアナイアレイターωという機体に乗って出てくる予定ですので、見たい人は編集部にプレッシャーかけてください。

一九九九年二月　篠崎　砂美

■ご意見、ご感想をお寄せください。
ファンレターの宛て先
〒154-0023 東京都世田谷区若林1-18-10 みかみビル
株式会社アスキー第六書籍編集部
篠崎砂美　先生
松田大秀　先生


ファミ通文庫
アーマード・コア　～マスターオブアリーナ～
一九九九年四月三日　初版発行
著者　篠崎砂美
発行人　浜村弘一
編集人　浜村弘一
発行　株式会社アスキー
〒一五一-八〇二四　東京都渋谷区代々木四-三三-一〇
電話　〇三(五三五一)八一一一代
発売　株式会社アスペクト
〒一五四-〇〇二三　東京都世田谷区若林一-一八-一〇
みかみビル六F　ETM営業部
電話　〇三(五四三三)七八五〇代
編集　第六書籍編集部
デザイン　リックデザイン事務所
写植・製版　株式会社パンアート
印刷　凸版印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-7572-0371-3

ファミ通文庫

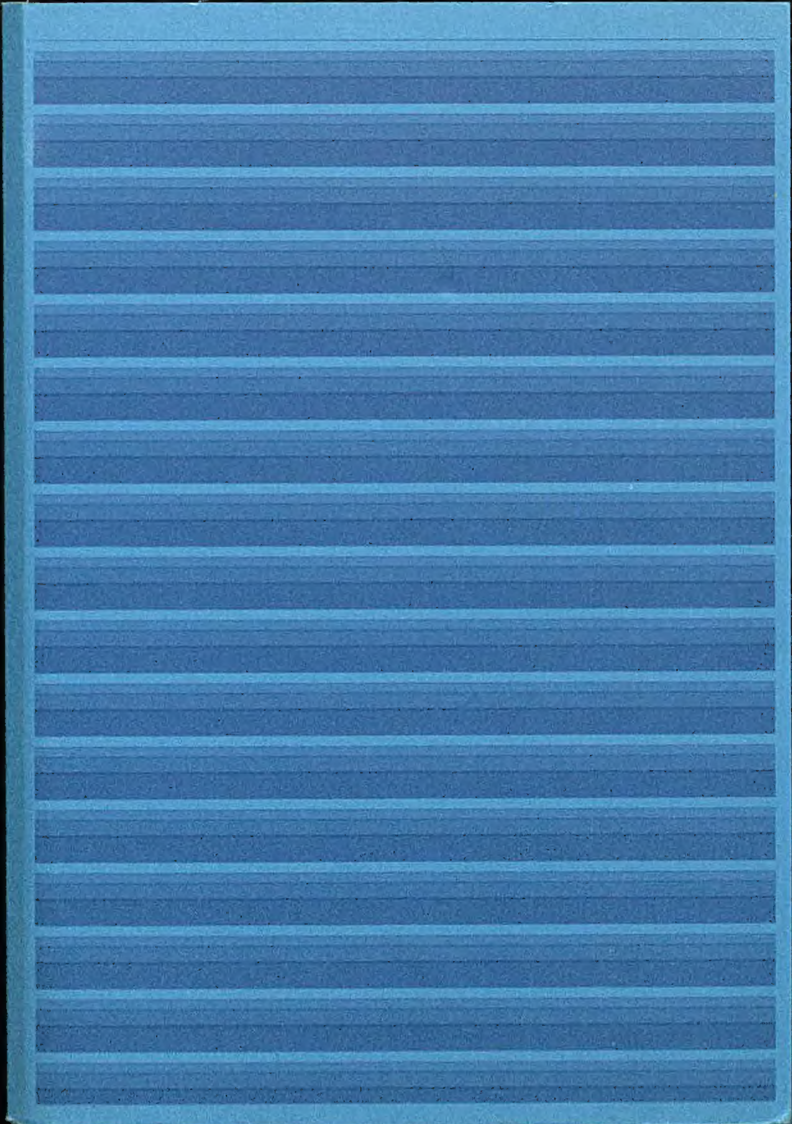
アーマード・コア
〜ザ・フェイク・イリュージョンズ〜

篠崎砂美
イラスト／松田大秀

……認めよう、君の力を。

〝大破壊〟から半世紀。〝国家〟という概念はすでになく、人々は数々の〝企業〟に導かれ、支配されていた。たったひとつの例外——報酬によって依頼を遂行し、何にも組みしない傭兵たち——を除いて。アーマード・コアと呼ばれる鋼鉄のロボットを駆る彼らを、人は、〝レイヴン〟と呼んだ……。人気戦闘メカシミュレーター『アーマード・コア』の世界を舞台に贈る、公式アフターストーリー！

定価 本体640円 ＋税 ISBN4-7572-0215-6



篠崎砂美
Sami Shinosaki

1960年7月22日生まれ。埼玉県出身。ファンタジーから近未来アクションまで幅広く手がける。裏設定満載の緻密な作風が好評。著書に『アーマード・コア～ザ・フェイク・イリュージョンズ～』『ブレイク・エイジ 戦士たちの夏』（いずれもアスペクト）など多数。
http://hp.vector.co.jp/authors/VA000787/

松田大秀
Taishu Matsuda

1961年生まれ。新潟県出身のマンガ家。いろいろあって現在にいたる。家族は妻と息子が一人。生家はお寺でお念仏をあげさせていただく毎日。著書に『フロントミッションシリーズ ガンハザード』（アスキーコミックス）ほか。戦争マンガでも活躍中。

カバーイラスト 松田大秀



FB Famitsu Bunko 054
アーマード・コア ～マスターオブアリーナ～
篠崎砂美
ファミ通文庫




ISBN4-7572-0371-3
C0193 ¥640E
9784757203716
1920193006407
定価 本体640円 ＋税
発行○アスキー
発売○アスペクト

FB Famitsu Bunko

“大破壊”から半世紀、“国家”が滅び、地下に潜った人類を数々の“企業”が支配する時代……。フリッツ＝バーンは両親の敵を討つため、アーマード・コアと呼ばれる鋼鉄のロボットを駆る傭兵—レイヴン—となった。果たして、彼は宿敵ナインボールを倒せるのか？ 人気の戦闘メカシミュレーター『アーマード・コア マスターオブアリーナ』の完全ノベライズが早くも登場！

篠崎砂美の著作リスト

アーマード・コア
～ザ・フェイク・イリュージョンズ～
アーマード・コア
～マスターオブアリーナ～
ブレイク－エイジ
戦士たちの夏 Fighters in Summer Grand Battle 2005
ブレイク－エイジ
戦士たちの秋 The hide-behind of the fighter 2009

篠崎砂美
Sami Shinosaki

1960年7月22日生まれ。埼玉県出身。ファンタジーから近未来アクションまで幅広く手がける。裏設定満載の緻密な作風が好評。著書に『アーマード・コア～ザ・フェイク・イリュージョンズ～』『ブレイク-エイジ 戦士たちの夏』(いずれもアスペクト)など多数。

http://hp.vector.co.jp/authors/VA000787/

松田大秀
Taishu Matsuda

1961年生まれ。新潟県出身のマンガ家。いろいろあって現在にいたる。家族は妻と息子が一人。生家はお寺でお念仏をあげさせていただく毎日。著書に『フロントミッションシリーズ　ガンハザード』(アスキーコミックス)ほか。戦争マンガでも活躍中。

篠崎砂美の著作リスト

アーマード・コア
～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

アーマード・コア
～マスターオブアリーナ～

ブレイクーエイジ
戦士たちの夏　Fighters in Summer Grand Battle 2005

ブレイクーエイジ
戦士たちの秋　The hide-behind of the fighter 2009

カバーイラスト　松田大秀